

【論文】

成人男性の10年間にわたる人格特性に関する
mean-level stabilityを指標とした研究¹⁾
—Today Personality Inventoryに基づいて—

The study of mean-level stability of personality traits in adult males
over a ten-year period
— Based on Today Personality Inventory —

外 島 裕
Yutaka Toshima

目次

1. はじめに
 - (1) 組織における人格特性の位置づけ
 - (2) 成人期の人格特性をとらえる枠組みと方法
2. MMPI原版と各尺度の内容およびMMPI-2の作成の概要
 - (1) MMPI原版について
 - (2) MMPI各尺度の内容
 - (3) MMPI-2について
3. 日本におけるMMPIに関する研究
 - (1) 日本女子大版
 - (2) 金沢大学版
 - (3) 日本版MMPI
4. MMPIを用いた年齢による人格特性の変化についての代表的な先行研究
 - (1) 村上・村上の研究 (2009)
 - (2) MMPI新日本版の研究 (1997)
 - (3) Leon, Gillum, Gillum, and Gouzeの研究 (1979)
5. 東京大学によるMMPIからTPIにいたる研究の経緯
 - (1) MMPI予備検査 (MMPI東大版)
 - (2) MMPI東大改訂版の作成
 - (3) TPIの標準化
6. TPIのコンピュータシステム化と能力開発への応用
 - (1) TPIのコンピュータシステム化
 - (2) TPIによる行動特徴の理解

7. 成人男性の10年間にわたる人格特性の横断的および縦断的研究

- (1) 本研究の目的
- (2) 研究方法
- (3) 研究1 (N社 2011年データによる10歳間隔の年代別による横断的研究)
- (4) 研究2 (N社 2001年データによる10歳間隔の年代別による横断的研究)
- (5) 研究3 (10歳間隔の4グループによる10年間にわたる縦断的研究)
- (6) 研究4 (5歳間隔の7グループによる10年間にわたる縦断的研究)
- (7) 研究5 (N社 2011年および他4集団との比較)
- (8) 研究6 (18年間あるいは28年間の長期にわたる個人のプロフィールの変化: 3事例)

8. まとめと今後の課題

(要旨)

本研究の目的は、成人期における長期にわたるパーソナリティの変化をパーソナリティ特性論の観点から、検討することである。回答者は、N社の1111名の男性従業員であった。回答者のパーソナリティを測定する尺度としては、Today Personality Inventory (TPI) が用いられた。分析のデータは2001年2006年2010年2011年である。まず、日本におけるMMPIの研究およびTPIの標準化の過程を確認し、能力開発の視点による各尺度の解釈が示された。はじめに、横断的研究として、世代間における違いを調べるため、平均値 (TPIのそれぞれの尺度における、T得点および粗点) が、10歳間隔のグループ間でそれぞれ比べられた。これは、2001年と2011年とでおこなわれた。それぞれのT得点による平均値のプロフィールは、グループ間で大変似た形となった。このような比較は、mean-level stability分析法とされる。さらに、各尺度の粗点による分散分析、多重比較の結果、尺度1・2・9には有意差がみられなかったが、他の尺度では有意差がみいだされた。つぎに、2001年から2011年への縦断的变化を検討するために、T得点、粗点の平均値が、10歳間隔の4グループ、および5歳間隔の7グループ間で、それぞれ比較された。20代前半を除き、他のグループではプロフィールはよく似た形となった。グループ間での粗点に基づいて、分散分析、多重比較がおこなわれ、尺度C・D・F・5・7などの得点の変化の傾向から、19-24歳、25-44歳、45-65歳の3つの時期に特徴を大別できることが考察された。なお、N社の特徴を把握するために、2つの他の企業の従業員と2つの大学の学生について、T得点の平均値のプロフィールが比較され、それぞれの違いが整理された。また、18年間あるいは28年間にわたる長期の個人の変化が、N社の3人の事例について紹介された。変化の大きい尺度と、変化の少ない尺度があり、個人によって異なっていた。

これらより、本研究によりみいだされたことは、つぎのようにまとめられた。平均値という指標では、どの年代グループでも、プロフィールの形はほとんど同じで変化はない。しかし、このことから20代から60代まで変化がないとするのは課題がある。各尺度における5歳間隔の変化の傾向の分析からは、成人期は3つの時期に特徴を大別できると推察された。さらに、3事例ではあるが、個人の長期の変化をみると、尺度に変化がみられ、それぞれ個人によって異なるといえる。個人の変化の追跡が必要と考えられる。したがって、成人期におけるパーソナリティの変化は、多角的な視点から検討する必要がある、今後の研究の重要性が提起された。

1. はじめに

成人期の人格 (personality) の特徴, 安定, 変化については, 大変興味深いものがある。本論文は, 産業・組織心理学の領域から成人男性の10年間にわたる人格特性 (personality traits) の安定性あるいは変化について, 集団の平均値に基づいて分析し検討を試みるものである。まず, 組織における人格特性の位置づけを簡潔に整理し, つぎに成人期での人格特性の分析の枠組みと研究方法の要点を確認する。さらに測定尺度として用いる心理検査の標準化の過程を検討し評価する。その後, 人格特性の測定結果の傾向を理解するために, 臨床的な視点による診断としてではなく, 能力開発的な視点に基づいた各特性の解釈について紹介する。これらをふまえ測定結果の分析・検討を論じたのち, さらに今後の研究課題を示唆するものとして, 個人の長期にわたる特性の変化にふれる。

(1) 組織における人格特性の位置づけ

産業・組織心理学において人格特性の研究は重要な課題である。Muchinsky (2003, pp.4-5) によれば, 選抜と配置 (Selection and Placement), 教育訓練と能力開発 (Training and Development), 職務遂行評価 (Performance Appraisal), 組織開発 (Organization Development), 仕事生活の質 (Quality of Worklife), 人間工学 (Ergonomics) の6つの領域があげられているが, とくに, 選抜と配置・教育訓練と能力開発・職務遂行評価は人事心理学 (Personnel psychology) ともいわれ (たとえばKaplan and Saccuzzo, 2005, p.510), ここでは個人差 (individual differences) の把握が不可欠となる (たとえばFurnham, 1992)。

Superは, 個人差を構成する要件として職業適合性 (vocational fitness) を整理した (日本職業指導協会, 1969, p.150)。職業適合性

は能力 (abilities) とパーソナリティとから構成される。能力は適性 (aptitudes: intelligenceなど) と技量 (proficiency) とである。パーソナリティは適応 (adjustment, これは欲求: needsと人格特性: traitsからなる) と価値観 (value) と興味 (interest) と態度 (attitude) とである。人格特性が位置づけられている。このようななかでとくに採用場面では慣習的に適性検査として標準化された心理検査が活用され, 知能検査 (intelligence tests) に代表される認知能力検査 (cognitive ability tests) と, おもに質問紙法による人格検査 (structured personality tests/objective personality inventory) が用いられることが多い (たとえば二村, 2005, pp.43-72)。心理検査をどの程度選抜に用いることができるかについては基準関連妥当性 (criterion-related validity)²⁾の研究が積み重ねられている (たとえばSchmidt and Hunter, 1998, pp.262-274)。とくに予測的妥当性 (predictive validity) においては, 時間間隔があるので人格特性の変化をも考慮に入れてとらえる必要があると思われるが, 単に相関係数によるものがほとんどであり, 暗黙的に人格特性の安定性を前提にしていると思われ, 成人の人格特性の変化の程度を検討することは基本的な知見として重要である。

また, Murphy (1996, pp.3-4) のモデルによれば, 個人差 (individual difference domain) は, 認知能力 (cognitive ability)・パーソナリティ (personality)・指向性 (orientation: 価値valuesと興味interests)・感情の傾性 (affective disposition) の4つの要件から構成される。この個人差が組織での行動と成果 (behavior in organizations and its outcomes) に影響を与えることとなる。組織側の要件には, 組織目標の実行 (advancing the goals of the organization) として職務遂行・効果性 (performance・effectiveness) がある。さらに, 組織での経験 (organizational experience)

rience) には、風土と文化 (climate and culture)・対人関係と葛藤 (interpersonal relations and conflict)・組織との同一化 (identification with the organization) を挙げている。

近年では個人と環境との相互作用による適合 (person-environment fit) との観点から³⁾、個人の特徴 (パーソナリティ・価値・目標・態度) と組織の特徴 (文化/風土・価値・目標・規範) との類似性適合 (supplementary fit) や、相補的適合 (complementary fit) などのモデルがいられている (坂爪, 2008, pp.46-54, Kristof, 1996, pp.1-49)。なお、個人—環境適合論は、高い適合が個人にとっても組織にとっても望ましいとの前提に立つが、むしろ変化に対する無能力や組織イノベーションの欠如につながるとの指摘がなされている。適合が肯定的な結果をもたらさないとする ASA モデルが提示された。これは Attraction (惹きつける)・Selection (選択する)・Attrition (欠落する) というプロセスとされる (坂爪, 2008, p.55, Schneider, 1989, pp.437-453)。

あるいはまた組織現象のなかに人格特性を位置づけたモデルとして、比較的初期のものであるが、組織現象の統合的コンティンジェンシー・モデルを挙げることができよう (野中, 1978, pp.13-18)。構成要件の概要を紹介するとつぎのようである。環境 (一般環境・タスク環境・組織間環境・創造環境) は組織全体に影響を及ぼす。組織の内部特性との間にはコンテキスト (目標・戦略・規模・技術・資源) が存在する。組織の内部特性には組織構造 (組織構造・組織風土⁴⁾) と個人属性 (欲求・モチベーション・価値・パーソナリティ) および組織過程 (リーダーシップ・意思決定・パワー・コンフリクト解消) の3要因があり、これらが相互に作用し組織有効性が生じる。この組織有効性が再び環境や組織自体にフィードバックされることとなる。組織と個

人は相互にダイナミックに影響しあうと考えられる (Lorsch and Morse, 1974, 馬場・服部・上村訳, 1977)。

このように個人差の主要な要件である人格特性は、産業・組織心理学および組織論などにおいて、主要な不可欠の要件として位置づけられてきており、組織との相互作用のなかでどの程度、どのように変化するのは興味深い課題といえよう。

(2) 成人期の人格特性をとらえる枠組みと方法

成人期の人格特性の把握は重要な課題と考えられるが、生涯発達心理学において、青年期や高齢期における研究の蓄積に比べて、まだ十分には検討されていないと考えられよう。

成人期の人格をとらえる理論的な枠組みは、おもに3つの理論に整理することができる (臼井, 2013, pp.255-257)。

①段階説：発達段階における心理的な構造と発達課題から考察する。精神分析的な立場による、Erikson (1950, 1959) や Levinson (1978) が代表的である。また、心理—社会的発達段階論を有機体論の立場から論じた Neugarten (1968, 1977) を挙げることができる⁵⁾。Neugarten は Chicago 大学を中心に 1952 年から 1962 年にかけておこなわれた Kansas City Studies of Adult Life の成果を公表した (Neugarten, 1968)。

②特性説：人格の特性論の立場による研究である。特性をどのように位置づけるかは、人間—状況論争 (person-situation controversy) (たとえば、若林, 1993) にみられるように、立場の違いはあるが、実証的には、比較的实施が容易な質問紙法による研究が多く、そのデータの蓄積は多い。たとえば、the Boston Study といわれる人格特性の縦断的研究では Costa and McCrae (1978, 1980) による Cattell の 16PF (Sixteen Personality Factor Questionnaire) を用いた研究がある。

25歳から82歳の男性、約2000名を対象に10年間隔の相関値によるrank-order stabilityの研究によると、Neuroticismで0.58から0.69、Extraversionで0.70から0.84、Opennessで0.44から0.63となり、安定的であると考察している。さらに、平均値についても検討を加えている。また、35歳から84歳において、10年間隔の変化を測定し、安定的であると論じている (Costa, McCrae, Zonderman, Barabano, Lebowitz, and Larson, 1986)。これらの研究が、のちのFive Factor Modelにつながっている。とくに近年では、測定尺度としてBig Five理論 (John, Naumann, and Soto, 2008) あるいはFive Factor Model (McCrae and Costa, 2008) に基づく研究が多くを占めるようになってきている (たとえば、Caspi, Roberts, and Shiner, 2005, Terracciano, McCrae, Brant, and Costa, 2005, Specht, Egloff, and Schmukle, 2011, Allemand, Steiger, and Hill, 2013)⁶⁾。これらの研究から、人格特性は比較的早い時期から安定化し、さらに中年期においても安定的な傾向を示すという結果 (たとえば、Costa and McCrae, 1994) と、これに対し安定化するのは50歳代以降であって、成人期にはまだ変化する可能性が大きいとの結果 (Roberts and DelVecchio, 2000) などがある。

なお、特性論に基づく研究の指標としては、平均値に基づく (mean-level in personality traits)、相関値に基づく (rank-order consistency/stability/change)、および個人差に基づく (individual differences in personality trait change in adulthood) の3つの指標に大別することができる (Roberts and Takahashi, 2011, pp.2-5)。

③状況・文脈説：人格の発達に対する社会・文化・歴史的な状況の影響を強調するものである。このような成人発達の縦断的研究で必ず紹介されるものに、California大学Berkeley校による一連のBlock (1971), Maas and

Kuypers (1974), Eichorn, Clausen, Haan, Honzik, and Mussen (1981) の報告がある。これらのThe California Longitudinal Studyは、3つの縦断的研究からなっている。1928-1929年から始まった、MacfarlaneによるGuidance Studyと、BayleyのBerkley Growth Study、およびStolz and JonesによるOakland Growth Studyとである。これらの3つの研究ははじめ目的が違っていたが、ほぼ8年違いの2つのコホートからなる1つのサンプルにまとめられることとなった。当初521名だったサンプルは、男女各々100名以下のグループとなっていた。これらをまとめた報告がEichornら (1981) の研究となる (Santrock, 1985. 今泉・南編訳, 1992, pp.379-380)。Block (1971) の研究は、Institute of Child Welfare (のちにInstitute of Human Development) によって、まず248名の幼児とその家族が対象となった。Maas and Kuypers (1974) は、当初Chicago大学と協力してInstitute of Human Developmentで、1929年から約40年間にわたって、142名のライフコースについての研究をおこなった。Eichornら (1981) の報告は、これらの2つの研究の、さらなる半世紀に及ぶまとめとなった。

以上紹介してきたように、歴史的にも多方面からの研究が試みられてきているが、日本においては成人期の人格の発達に関する実証的なデータは圧倒的に少ないとされ、成人を対象とした研究でも、青年期にあたる大学生に偏る傾向が強く、また短期的にしても、縦断的研究は少ない。人生の生涯にわたる生活の質の向上のためにも、多くの視点からの人格の発達研究のデータを蓄積していく必要性が求められ (臼井, 2013, p.258)、理解を深めていくことが必要である。発達の变化的研究の研究デザインについては、横断デザイン (cross-sectional design)、縦断デザイン (longitudinal design)、および系列デザイン

(sequential design) などの総合的な考察の必要性が論じられている(岡林, 2011, pp.49-53)⁷⁾。1つでも多くのデータの蓄積が期待されるところである。

2. MMPI 原版と各尺度の内容および MMPI-2 の作成の概要

(1) MMPI 原版について

本研究は後述するように、人格の特性論の視点から、その測定指標として、心理検査の質問紙法である Todai Personality Inventory (TPI: 東大版総合人格目録) を用いるものである。この TPI は、Minnesota Multiphasic Personality Inventory (MMPI) についての研究を進展させ、標準化された心理検査である。そこでまず MMPI の概要を整理したい。

MMPI は、Minnesota 大学病院精神神経科の心理学者 Starke Rosecrans Hathaway と精神神経学科長の Jovian Charnley McKinley とによって、1930 年代から Medical and Psychiatric Inventory として研究が始まり(井出, 2011, p.16), 1940 年に発表された(Hathaway and McKinley, 1940)。精神医学、臨床心理学に基づいて、基準群(精神障害者)と統制群(正常者)とを識別する項目 504 項目から構成されている。これは 1943 年に出版され(Hathaway and McKinley, 1943), さらに K 修正尺度の採点方法が変更されて、1951 年に改訂がおこなわれた(Hathaway and McKinley, 1951)。この間に性役割態度や自己報告の防衛スタイルなどが加えられて 550 項目となった。

(2) MMPI 各尺度の内容

MMPI の各尺度の内容を確認したい。各尺度の内容は肥田野(1967b, pp.36-38)によって、MMPI Handbook (Dahlstrom and Welsh, 1960, pp.43-85) を参照することにより、つぎのように簡潔にまとめられている。各尺度の内容を理解するため重要な要件であるので

紹介しておきたい。なお尺度名を表 1 にまとめておく。

① 妥当性尺度 (The validity Scales)

i) The Cannot Say Score (?) 疑問点 The Question Score (全項目)

「どちらともいえない」と回答した項目の数で、この得点が高いと、他の尺度で採点される項目が減るわけであるから、他の尺度の得点をもっと高いと疑われる。

ii) The L Scale (L 尺度) 虚構点

The Lie Score (15 項目)

回答者が実際の自分を偽って、社会的承認の得やすい回答を選ぶ傾向を測るものである。社会通念上好ましいとされているが実行しにくいような内容の項目が、作成者の判断によって選ばれている。

iii) The F Scale (F 尺度) 妥当点

The Validity Score (64 項目)

正常者の回答率が 10% 以下の項目からなっている。この得点が高いものは質問の意味が理解できない者か、でたらめあるいは不注意に回答した者である。また、採点や記録に誤りがある結果この得点が高くなることもある。

iv) The K scale (K 尺度) K 点: 修正点

The K Score (30 項目)

この得点は心理的弱点を防衛しようとする態度をとると高くなり、自己批判的な態度をとると低くなる。この尺度の得点を用いて Hs, Pd, Pt, Sc, Ma の 5 尺度の得点を修正することによって基準群 (criterion group) と対照群 (control group) の識別力を高めるために用いられる。

② 臨床尺度 (The Clinical Scales)

i) Scale 1 (Hs 尺度) 心気症尺度

The Hypochondriasis Scale (33 項目)

健康について不当に心配し、疾病の所見がないにもかかわらず身体の不調をいつまでも訴える心気症患者を基準群として作られた尺度である。

ii) Scale2 (D尺度) うつ病尺度

The Depression scale (60項目)

抑うつ症候群の程度をみるものであるが、うつ病以外の障害の結果でもうつ反応が強くなればこの尺度の得点は高くなる。無力感、志気の低下、自信喪失、関心の狭さなどがこの尺度に反映する。

iii) Scale3 (Hy尺度) ヒステリー尺度

The Hysteria Scale (60項目)

転換ヒステリー患者を基準群とする。この尺度が高い者は心理的に未成熟であり。身体的症状が結果的には困難な葛藤の解決や、責任の回避の手段となる。

iv) Scale4 (Pd尺度) 精神病質の偏倚尺度

The Psychopathic Deviate Scale (50項目)

基準群は反社会的な不道徳的な型の精神病質人格と判断された17歳ないし22歳の者で、

非行犯罪の型としては盗み、うそ、性的不道徳、アルコール耽溺などが多い。

v) Scale5 (Mf尺度) 性度・男性女性興味尺度

The Interest Scale⁸⁾ (60項目)

興味の傾向が男性的か女性的かを測るもので、性倒錯の男子すなわち女性的な傾向を示す同性愛者と、TermanとMiles (1936, pp.52-79) の性度検査で高い女性的傾向を示す男子が基準群とされた。女子の性倒錯を検出する尺度は作れなかった⁹⁾。

vi) Scale6 (Pa尺度) パラノイア・偏執病尺度

The Peranoia Scale (40項目)

パラノイア、妄想的状態および妄想型分裂病と判断された患者が基準群であり、易感性関係妄想、被害妄想、徹底した猜疑心などが特徴となっている。

表1. MMPI原版の各尺度名

妥当性尺度 (The Validity Scales)			
The Cannot Say Score	(?) 疑問点	The Question Score	
The L Scale	(L) 虚構点	The Lie Score	
The F Scale	(F) 妥当性点	The Validity Score	
The K Scale	(K) K点 (修正点)	The K Score	
臨床尺度 (The Clinical Scales)			
Scale1.	(Hs) 心気症尺度	The Hypochondriasis Scale	+ 0.5K
Scale2.	(D) うつ病尺度	The Depression Scale	
Scale3.	(Hy) ヒステリー尺度	The Hysteria Scale	
Scale4.	(Pd) 精神病質の偏倚尺度	The Psychopathic Deviate Scale	+ 0.4K
Scale5.	(Mf) 性度 (男性女性興味) 尺度	The Interest Scale	
Scale6.	(Pa) パラノイア (偏執病) 尺度	The Paranoia Scale	
Scale7.	(Pt) 精神衰弱症尺度	The Psychasthenia Scale	+ 1.0K
Scale8.	(Sc) 精神分裂病尺度	The Schizophrenia Scale	+ 1.0K
Scale9.	(Ma) 軽躁病尺度	The Hypomania Scale	+ 0.2K
追加尺度 (Additional Scales)			
Scale0.	(Si) 社会的向性尺度	The Social I.E. Scale	

vii) Scale7 (Pt 尺度) 精神衰弱症尺度

The Psychasthenia Scale (48 項目)

精神衰弱あるいは強迫症候群の診断を与えられた患者が基準群である。強迫観念、強迫行動、自信欠如、過敏さ、注意集中困難などがこの群の特徴である。

viii) Scale8 (Sc 尺度) 精神分裂症尺度¹⁰⁾

The Schizophrenia Scale (78 項目)

精神分裂症者を基準群とする。妄想、幻覚、無感動、無関心、家族関係の貧弱さなどが特徴であるが、うつ病患者や心気症患者と識別しにくいので、分裂症者以外でもこの尺度の得点が高くなる場合がある。

ix) Scale9 (Ma 尺度) 軽躁病尺度

The Hypomania Scale (46 項目)

活動過剰、情動興奮、観念の飛躍によって特徴づけられる軽躁病患者を基準とする。熱狂的、野心的で調子がよく、時には社会規範を無視する。強い興奮状態では、検査が実施できず、また躁状態は変化しやすいために、軽躁病の典型例は得にくいいため基準群の例数は少ないが、尺度としては高い識別力を持っている¹¹⁾。

③追加尺度 (Additional Scales)

i) Scale0 (Si 尺度) 社会的内向性尺度¹²⁾

The Social Introversion-Extraversion scale (70 項目)

社会的内向性は社会的接触を避け社会的責任を回避する傾向であり、社会的外向性は他人に関心を持ち社会的接触を求める傾向である。基準群としてはMinnesota T-S-E Inventory¹³⁾ をうけた大学生のうち社会的内向性尺度において65パーセント以上を内向群、35パーセント以下を外向群として選んでいる。

(3) MMPI-2 について

上記が各尺度の内容であるが、つぎに、MMPI-2 にふれる必要があるであろう。MMPI 原版を用いた研究は非常に多くおこな

われたが、時代の進展に伴い、項目への検討と再標準化の必要性が議論されるようになった。1989年にButcher, Dahlstrom, Graham, Tellgen, and Kaemmer (1989) によって再標準化委員会が構成され、MMPI-2 が出版された。

これは、原版の質問項目を残したものの、一部修正、まったく新しい項目、項目の削除などがおこなわれ、質問項目は567項目となった。また、従来の尺度以外に、内容尺度(15尺度)や補助尺度(新しい妥当性尺度3尺度、社会状況を反映する15尺度)が構成され分析できる。

MMPI 原版の一般健常人は724名であり、これに加えてさらに高校卒業生男女約250名である。Minnesota 周辺の住民となる。MMPI-2 では1980年の国勢調査に準拠して、2600名(男性1138名、女性1462名)が用いられている(Butcherら, 1989, pp.3-8)。

また、標準化における得点の変換については、原版はlinear T score変換であったが、MMPI-2 ではuniform T score変換がおこなわれている(Tellegen, 1988)。MMPI-2 についても、臨床的な解釈の研究がすすめられるようになった(たとえば, Butcher, 1990)。1999年9月初めからMMPI 原版の提供は停止され、北アメリカではMMPI-2 に統一されている。

なお、同時期にMMPIの青年期についての標準化(MMPI-A)が考えられた(Archer, 1987)。青年期は成人期に比して心身の変化が大きい時期であり、MMPIの解釈も慎重であるべきと思われる。標準得点に従うと、一般的に青年期は成人期よりも得点が高くなる傾向となる。

MMPI-2 およびMMPI-Aについては、日本ではまだ正式には公刊されていないが、研究用としてすべての項目が紹介され、統計的にも検討が加えられている(小口, 2001)。

3. 日本における MMPI に関する研究

日本におけるMMPIの研究の歴史的におもなものを整理しておこう。

(1) 日本女子大版

MMPIに関する日本で最初の研究として位置づけられる。

1950年から児玉省(日本女子大学)は塩入円祐(慶應義塾大学医学部)の協力を得て、MMPI原版の忠実な翻訳版を作成した。これを正常者570名(男性278名,女性292名)に実施した。

さらに、1951年から慶應義塾大学医学部、武蔵野病院、桜ヶ丘病院、井の頭病院において精神病患者と診断された人たちに施行した。9つの病態の合計は268名となる。なおここでは、MMPIの尺度にはないEpilepsyの患者20名(男性11名,女性9名)をも対象に実施されている。アメリカのスケールに頼ることなく、日本での基準群と正常群とで識別力が検討された。アメリカの精神病の分類および種別定義が必ずしも日本のそれとは一致しないのに、アメリカのスケールをそのまま使用することは不適切であると考えたからである。

まずはじめに、精神衰弱尺度(50項目)、精神分裂病尺度(58項目)の識別力が報告されている(児玉,1954, pp.93-115)。

さらに、359項目の短縮版を作成し、異常群296名に実施した。また、519項目の質問紙を作成し、精神分裂病患者(100名)と正常者(男女340名)とを比較している(児玉・多賀,1958, pp.28-49)。

このような研究から、結果としてMMPIとは異なる尺度も構成されることとなった。

Psychopathie(精神病質), Epilepsie(てんかん), Hebephrenie(破瓜型), Paranoideform(妄想型), Katatorie(緊張型), Schizophrenie Unclassified(その他の分裂病), Paralyse(進行

麻痺), Depression(うつ病), Philoponismus(ヒロポン中毒), Psychogenic(心因性反応), Schizophrenie(He+Pa+Ka+Un), およびEgo-Strength scale(自我強度)とDissimulation scale(感情の偽装)などである。

このようにMMPIとは異なる側面も多くなり、基準群を用いたものであったが、あまり広がりを見せなかったと考えられよう。

(2) 金沢大版

多田治夫によって、MMPI550項目をできるだけ忠実に翻訳した質問紙が作成された。これを金沢大学の入学生全員に実施し、学生群についての標準化を試みたものである。なお訳文は、鈴木達也、田中富士夫らに加わり協議された(多田,1960, pp.137-172, 田中,1965, pp.71-97)。

対象学生は1959年度入学生全員855名(男性724名,女性131名)である。1年生と思われるので年齢は18歳程度となろう。この結果によるとMinnesota正常群よりもプロフィールは得点は高い。またアメリカの大学生よりも高い。ドイツの大学生と似た傾向にあるが、ドイツは尺度Ma(軽躁病)の得点が高い傾向にあるのに比して、日本では低い傾向となっていた。プロフィールの特徴は東大改訂版による東大生ともよく似たプロフィールを示し、尺度D(うつ病)と尺度Sc(精神分裂病)が高い値を示した。

他に学部間、性差などを検討し、この大学生のサンプルに基づいてT得点への換算をおこなった。基準群との比較による妥当性の研究が大きな課題といえる。

翻訳された550項目はすべて記載されており、さらに、160項目からなる短縮版(鈴木,1962)が作成された。

(3) 日本版 MMPI

阿部満州(東北大学)と黒田正大(仙台少年鑑別所)は佐藤愛(東北大学精神科)と協

力して、1952年ごろから研究に着手して、1958年ごろから研究成果が公表された。1959年には被験者は少ないが日本人（男女60人・男女86人）とHathawayからの資料提供をうけアメリカ人（軍人27名・98名、男性226名・女性315名）との比較をおこない、日本人はとくに尺度D（抑うつ性）、尺度Sc（分離性）などが高いことが報告されている（阿部、1959、pp.60-73）。これらの研究ではMMPI550項目の忠実な翻訳をめざしたものであり、仙鑑版あるいは東北大学版とも呼ばれた（日本MMPI研究会編、1969、1989、p.62）。

このMMPIは1963年に改訂されて、翻訳権を取得して三京房から出版されることとなった。これが日本版MMPIとして活用されている。

この際の標準化は、東京・京都・名古屋・仙台・新潟・横須賀・前橋各地区の一般市民と学生（高校生以上）の1006名（男性560名、女性446名）である。

年齢ごとの人数は、15-19歳271名、20-24歳354名、25-29歳175名、30-34歳72名、35-39歳50名、40-44歳41名、45-49歳25名、50-54歳13名、55歳以上5名となっている（日本MMPI研究会編、1969、1989、pp.85-86）。ここでの標準化の年齢の分布が、のちに課題とされるのである。なお、この標準化では？回答・L・F・K・Pd・Pa・Sc・Maの各尺度は男女共通の標準化がなされ、Hs・D・Hy・Mf・Pt・Siの各尺度は標準化が男女で異なっている。

K尺度による修正率は粗点でおこなわれるが、 $Hs+0.5K$ 、 $Pd+0.4K$ 、 $Pt+1.0K$ 、 $Sc+1.0K$ 、 $Ma+0.2K$ となる。男女に修正の違いはない。

以上以外にも、九州大学、大阪大学医学部、学習院大学学生部（短縮版）、早稲田大学、国立精神衛生研究所、人事院（短縮版）、防衛庁、同志社大学の浜、マルグチ病院、オカダ、モリモトなどによるものがあるとされる

（肥田野、1967b、p.49、村上・村上、2009、p.28）。

なお本研究で用いた東京大学の肥田野を中心としたMMPIからTPIにいたる研究については後述する。

4. MMPIを用いた年齢による人格特性の変化についての代表的な先行研究

ここでは、本研究に関連する先行研究として、日本におけるMMPIの年齢のグループごとの各尺度の粗点平均得点による横断的な研究と、アメリカでの成人を対象としたMMPIを用いた標準得点の平均値による縦断的な研究を紹介しておきたい。mean-level stabilityの検討となる。

（1）村上・村上の研究（2009）

村上らは、MMPIの質問項目を独自に検討し翻訳して、MMPI-1を構成した。

さらに日本における標準化をおこなった。すなわち日本全国を8ブロックに分け、多段階無作為抽出法により、住民票から15歳から80歳までの男女4700名を抽出した。調査は1993年10月から12月にかけて実施され、有効回答は、男性494名、女性684名となった（村上・村上、2009、p.46）。

これらを、青年期（15-22歳：男性122名、女性187名）、成人初期（23-39歳：男性107名、女性218名）、成人中期（40-59歳：男性126名、女性168名）、成人後期（60歳以上：男性139名、女性111名）と分類した。各尺度ごとに、上記世代別の素点¹⁴⁾の平均値による1要因4水準の分散分析をおこない、世代差の検討をおこなった。その概要はつぎのようにまとめられている（村上・村上、2009、pp.47-54）。

妥当性尺度では、男性では尺度L（虚言）に1%水準の世代差があり、尺度F（頻度）には5%水準の世代差がみられた。女性では、

尺度L, F, K に1%の世代差がみられた。男女とも尺度Lの得点が年齢と共に上昇し、尺度Fの得点は低下する傾向がみられた。尺度Lは男性では成人後期に、女性では成人中期からの上昇が目立った。尺度Fは青年期でやや高くなった。

臨床尺度では、尺度1 Hs (心気症) が5%水準の世代差があった。男女ともに得点が低下していた。尺度2 D (抑うつ) は男女とも世代差はなかった。尺度3 Hy (ヒステリー) は男女とも1%水準の世代差があった。男性は年齢とともに減少し、女性は成人中期が最も得点が高くなった。尺度4 Pd (精神病質的逸脱) は1%水準で顕著な世代差があり、得点は年齢とともに減少していた。尺度5 Mf (男性性・女性性)、尺度6 Pa (妄想症)、尺度7 Pt (精神衰弱)、は男女とも1%水準の世代差があり、年齢とともに得点が低下していた。尺度8 Sc (精神分裂病) と、尺度9 Ma (軽躁症) とともに1%の世代差があり、男女とも青年期が高く、成人中期から低下していた。尺度0 Si (社会的内向) は、男女とも世代差はなかった。

世代差の傾向として、受検態度が最も素直なのは青年期であると解釈し、大部分の臨床尺度の得点はこの青年期が高くなっていた。成人前期以降では、防衛的受検態度が強まり、成人中期、成人後期とくに顕著となるとして、精神病理的側面は抑圧される傾向にあると解釈されている。また、臨床尺度で世代差がみられなかったのは尺度2の抑うつ傾向であるが、下位尺度のD-S尺度 (微妙な抑うつ) は年齢とともに得点が上昇しており、日本人の場合は、アメリカ人は素直に抑うつ傾向を表現するのに比べて、洗練された防衛的態度で抑圧していると論じている (村上・村上, 2009, p.55)。

尺度Lの得点の上昇の解釈として、防衛的態度とすることはよくみられる。しかし筆者の臨床的な経験からは、認知の枠組みは堅い

傾向は考えられるが適応感はいい場合が多く、この心的な状態を防衛的と理解することは議論を要することであると思われる。また、青年期では自己の感情・情動傾向に敏感であると思われるが、過敏とも表現でき、受験態度が素直とのとらえ方も議論が必要であろう。無論、2高尺度などによる組み合わせ、プロフィールによる解釈など重要であることは論を待たない。

この研究から、世代差がみられたことより世代別に標準化することの必要性が強調されている。

(2) MMPI 新日本版の研究 (1997)

すでに公刊されているMMPI日本版については、①項目レベルでの原版との等価性への疑問、②標準化集団の被験者の年齢の若年者への偏り、③?回答の多さにみられる実施手続きの疑念、④基礎データの未公開、などの問題点が指摘されている (田中, 1997, p.1)。

これらの問題を解決するために、新しい日本版が作成され標準化された。基本的には1990年の国勢調査結果にマッチさせるように標本抽出がおこなわれ、15歳以上の男性500名、女性522名が用いられた (田中, 1997, pp.6-12)。

各尺度得点に影響を与える年齢要因については、20歳未満、20歳代、30歳代、40歳代、50歳代、60歳代、70歳以上、の7群に分けて検討が加えられている。年齢と基礎尺度値との相関、年代別平均T得点、分散分析、その下位検定、などがおこなわれている。それらの結果から各尺度ごとに年齢による変化の特徴を論じている。アメリカの研究との違い、病理集団と正常者といった対象者の違い、など従来の見解との違いもみいだされ、整理するのには課題も多い (塩谷, 1997, pp.130-162)。

とくに、「20歳未満」と「70歳以上」に他の年齢群との間の有意差の頻度が多いことがみだされている。したがって、若年者お

よび高齢者のプロフィールの解釈において、今後の研究の必要性が指摘されている。

(3) Leon, Gillum, Gillum, and Gouze の研究 (1979)

Leonらは、1947年の時点で心身ともに健康な男性(45-54歳：平均49歳)281名を対象にしてMMPIを実施した。Minnesota近郊の中・上流階層に属する白人の男性である。

その後、6年後の1953年(平均55歳)、さらに7年後の1960年(平均62歳)、17年後の1977年(平均77歳)と実施した。これらにより同一人物71名の約30年間にわたる縦断的な変化の結果を得ることができた。MMPIの各尺度ごとの標準得点によるプロフィールの変化は図1のように整理されている。

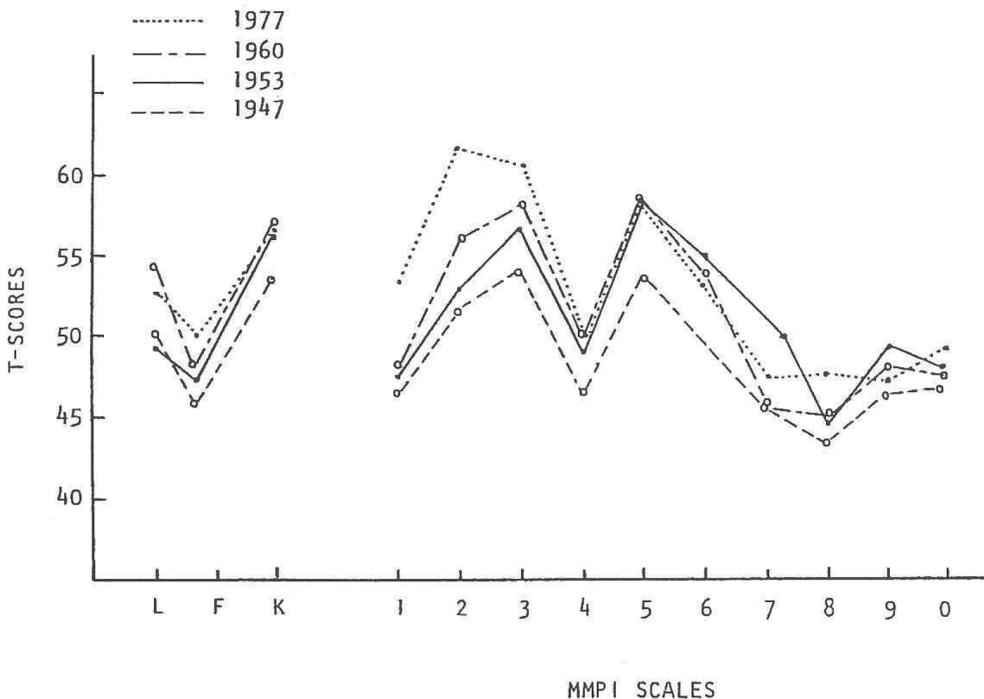
各尺度ごとに1要因4水準の分散分析がおこなわれ、詳しく検討されているが、プロ

フィルのパターンが似ていること、1947年(平均49歳)のプロフィールの得点は一番低いこと、1977年(平均77歳)の尺度では、尺度1(Hypochondriasis)、尺度2(Depression)、尺度3(Hysteria)の得点が高くなっていることが特徴的であるといえよう。尺度2については高齢化による身体的疾患の反映ではないかと推察している。中年期には比較的变化は少なく、高齢期にはいくつかの尺度で変化がみられるということとなる。

なお本論文では紹介しないが、相関値(rank-order stability)による検討もおこなわれている。

これまで整理してきたように、日本においてもMMPIの研究はおこなわれてはいたが、残念ながらその活用はあまりおこなわれていないと指摘されている(村上・村上, 2009, p.31)。1980年代までは、臨床的な使用数や

図1. Group MMPI profile for 71 men over a 30 year period.



(出典) Leon et al. (1979) p.520

研究数は非常に少ないとされ、1990年代の初めに新しく日本語版が公刊されたが、その後20年近くたってもほとんど臨床的な活用は広がっていないとされる(井手, 2011, p.15)。

臨床的な活用にとどまらず、ましてや健常人を対象として、人格の理解を促進するための活用は誠に少なく、研究する価値は大きいといえよう。

5. 東京大学による MMPI から TPI にいたる研究の経緯

東京大学では肥田野直を中心として、澤田慶輔・笠松章の指導の下に、精神医学と教育心理学の専門家が協力して、1955年から1962年にかけて、MMPIに関する何段階かの研究を経てTPIの作成と標準化とをおこなった(肥田野, 1967a, p.2)。以下に順を追って整理していきたい。

(1) MMPI 予備検査 (MMPI 東大版)

1955年よりMMPI原版をできるだけ忠実に翻訳して作成された検査原案が実験的に施行されることとなった。1956年に576項目が準備された。これは、MMPIは550項目であるが、日本とアメリカの風俗・慣習などの違いのために質問の意味に疑問が生じた項目については、適当な代替項目・予備項目が付加されたためである。

①予備検査は原案修正の参考とするために企画された。

1957年1月に予備検査として東大・本郷の学生246名が集計の対象となった。しかしながらMinnesota基準で採点すると、平均点はどの尺度も55点以上となり、とくに尺度D(うつ病)、尺度Sc(分裂病)では70点以上となった。アメリカの基準から考えると東大生は極度にD、Scの傾向があるということになる。同様の傾向は、都内大学生の結果でも、金沢大学の学生についてもみられてい

た(肥田野, 1958, 東京大学学生部, 1957¹⁵)。

②都内および周辺の男子大学生650名(個別式220名, 集団式430名)、女子学生161名(集団式)を対象に実施した。男女とも尺度D、Scは70前後で非常に高く、他の尺度は男は55-65、女はMf以外は60-65の範囲に入っていた。そこで、上記集団式実施の男子大学生430名、女子学生161名に基づいてT得点を算出して、東大版プロフィール記入表を作成した(坪上・平田, 1959, pp.235-236)。

③精神分裂病患者男女67名(病的体験の豊富な者33名, 病的体験の少ない者34名)の平均得点プロフィールが検討された。正常者(男子東大生121名)に比べて分裂病者の得点平均は、尺度Mf、Ma、Si以外は高く、体験によって分けた2群の差はPa、Sc、Siにやや大きい程度で、識別力は満足すべきものでなかった。

そこで、体験豊富な分裂病群と正常者群の回答率を比較して、その差の大きい項目から80項目をとり、仮の日本版分裂病尺度が作成された。これらの項目はMMPI原版の項目と照らし合わされて検討された(肥田野, 1958¹⁶, 坪上・平田, 1959)。

④20歳から25歳までの受刑者50名を被験者として選択し研究された。MMPIの尺度Pdは、基準群が感化院の入所者を含めた非社会的な型の精神病質と診断された者である。受刑者50名の平均点のプロフィールはPd、Pa、Maの順で高く、尺度Pdは一応識別力を示したといえる。なお、仮の受刑者尺度は作成されるにいたらなかった(坪上・平田, 1959, p.241)。

⑤1957年9月より1958年6月にかけては、正常成人群(男女各100名)、精神分裂病患者(100名)、累犯受刑者(男50名)についても予備検査が実施されている。各項目ごとの応答率の比較によって項目分析がおこなわれ、仮Sc尺度(分裂病)、仮Pd尺度(精神病

質人格), 仮F尺度 (まれな回答傾向), 仮Mf尺度 (男性的女性的興味傾向) の4尺度が試作されていた。

このような尺度作成のために, 改めて一般社会人の資料が集められたのは, 異常群と比較対照する正常群として, 大学生に限定することは適当でないと判断されたからである (東京大学学生部, 1962, p.6)。

なお, 正常成人について, 20歳から60歳までの男性100名, 15歳から59歳までの女性100名に検査を実施して, 平均点プロフィールを大学生と比較したところ, 一般成人のほうがやや低いことが明らかであるとされた (坪上・平田, 1959, p.241)。

(2) MMPI 東大改訂版の作成

MMPI予備検査 (MMPI東大版) を実施し検討した結果, 質問項目の翻訳は原文に忠実であったが, 内容や表現のしかたが日本人にとってあまり適当でないと思われる項目もあり, さらに, 項目数が非常に多い (576項目) ことなどのために, 回答者の負担が大きすぎると考えられた。また, アメリカの基準はそのままでは日本の大学生に適用できないので, 独自の基準が必要であると判断された (東京大学学生部, 1962, p.5)。

したがって, これらの点を修正して, 検査の実施を容易にするために, つぎの観点から全項目について検討が加えられた。

- ①日本とアメリカとの風俗・習慣等の相違のために内容が不適当な項目を修正または削除する。
- ②互いに内容が極めて類似している項目を整理する。
- ③否定文はなるべく肯定文に改める (したがって原版の採点基準は逆になる)。とくに2重否定はさける。
- ④構文をなるべく単純にし, 答える条件を2つ含んでいるようなものは1つに改める。
- ⑤語彙・漢字などは一般的なものをを用い, 表

現をやさしくしまた短くする。

⑥原版尺度の得点に無関係な項目を末尾に配列し, 場合によっては途中で打ち切ってもよいようにする。

このような観点から, 多数の心理学者, 精神科医, 教師, その他一般成人, 学生 (高校生を含む) などの意見を参考にして検討がおこなわれ, 全項目数576の約3分の2を修正し, 52項目が削除された。これによりMMPI東大改訂版は524項目となった。

この新採点基準の設定のための正常成人群は, 1955年度国勢調査結果の都市部人口の5万分の1を, 性, 年齢, 職業別の構成比率に可能な限り従って集めたものが用いられている。なお, 学歴については1960年度の国勢調査によっている (肥田野, 1967b, p.51)。

正常成人群は15歳から60歳未満の男性300名, 女性300名が用いられた。

各臨床尺度の基準群としてはMinnesotaの基準群になるべくそのような診断基準によって選ばれたが, たとえばPa, Hyなどいくつかの尺度については, 診断基準を若干修正せざるをえなかった。しかしながら各基準群についてはできるだけ純粋な症例を選ぶことが努力された。各基準群については15歳から59歳の男性と女性である。各尺度の基準群の人数はつぎのようである。男性の人数, 女性の人数, 合計人数の順で記す。

- ①Hs (心気症尺度) 21, 9, 30。
- ②D (うつ病尺度) 21, 9, 30。
- ③Hy (ヒステリー) 6, 24, 30。
- ④Pd (精神病質的偏倚尺度) 50, 0, 50。
- ⑤Pa (パラノイア尺度) 23, 7, 30。
- ⑥Pt (精神衰弱症尺度) 18, 12, 30。
- ⑦Sc (精神分裂病尺度) 20, 10, 30。
- ⑧Ma (軽躁病尺度) 16, 6, 22。

尺度構成の手続きとして, 正常成人群と各基準群について全項目に対する応答を調べ, 両群の応答率の差について χ^2 検定をおこない危険率5%以下で有意な差の認められた項

目が採用された。このような手続きで作成された新尺度は、粗点の平均と標準偏差に基づく標準得点 (T得点) で表示される。

1961 に実用化され、1962 年 4 月に『MMPI 東大改訂版—研究報告と実施手引』が報告された。

なお、基準群の設定に関しては、正常者においても日米間に検査結果の差がみられることから、精神障害者についても検査項目に対する反応傾向に差があることが予想された。基準群については日本の診断体系を背景にして選ばれる必要があると考えられ、MMPI 原版とはやや異なる基準群が設定された尺度もある。概要は東京大学学生部 (1962, pp.31-34) に詳しい。とくに、Mf 尺度 (性度尺度) は、単に正常成人の性差に基づいて尺度項目が選ばれているので、Minnesota 原版のように同性愛的傾向は含まれていない。女性的傾向が得点答となるようになっている。また、Si 尺度 (社会的向性尺度) は、大学生 (男性 208 名, 女性 217 名) に既成の性格検査 (田研式診断性向性検査と矢田部ギルフォード性格検査) を施行し、両者の社会的向性尺度で同時に内向性を示す上位群 (男女各 50 名) と外向性を示す下位群 (男女各 50 名) とを選び、両群の MMPI の項目における応答率の比較から作られたものである。得点答は社会的内向性を示すものである。

(3) TPI の標準化

MMPI 東大改訂版はかなり手続きを踏んで標準化がすすめられた心理検査といえるが、やはり MMPI 原版の影響は避けられず、文化的背景を異にする日本では、アメリカの検査をそのまま訳しただけでは課題は残り、役に立つものとはいいがたい。したがって、日本人に対して最も有効な性格検査を作るには、日本人の中の精神障害者と正常者を識別できる質問項目を丹念に拾いあげ、それによって検査尺度を構成することがどうしても必要と

なってくる (肥田野, 1967a, p.2)。このような構想に基づいて、沢田慶輔 (教育学部教授) と笠松章 (医学部教授) の指導の下に、さらに TPI の標準化がすすめられた。

① TPI の項目の構成

TPI は 500 項目で構成されているが、MMPI 東大改訂版と共通している項目は 263 項目である (肥田野, 1978, p.56)¹⁷⁾。

TPI の項目構成はつぎのようにおこなわれた (TPI 研究会, 発行年不詳, p.1-2)。パーソナリティ・テストの質問項目として適当と思われる項目を多数作成した。これらは、既成の質問紙形式のパーソナリティ・テストだけでなく、医学、心理学、社会学、文化人類学の教科書、専門書、研究論文などから、一般の新聞、雑誌の記事や、世論調査の諸項目にまでおよんでいる。

500 項目を選択する際には、3つの視点から検討された。

i) 内容的に項目間で重複がないようにするとともに、欠如する分野や偏りがないように考えられた。

ii) 性格の異なる種々の集団に実施して、無応答が出る比率の高い項目や、内容や用語、用字に対する質問や疑問が多く出る項目を、改善したり除いたりした。

iii) 基本尺度を作成する過程で、不要の項目を除いたり、新しい項目を加えることがなされた。これらの項目は、種々の型の精神障害者と正常者とできらかに異なり、したがって両者を識別する性質を持つ項目である。しかしながら、一般の人々はもちろん、専門家の場合でも、各項目がどのような識別性を持つかわからない項目が多くなっている。

このように豊富な内容を含む項目となっているので、これらに対する応答から、被検査者の性質や状態、あるいは環境など、パーソナリティを理解するための広い情報を得ることができると仮定されている。

② 標準化集団 (肥田野, 1967a, pp.2-7)

i) 正常者群

15歳以上60歳未満の男女各600名である。1960年度の国勢調査都市部人口(15-60歳)の年齢別、職業別のそれに比例するような構成をもつ標本が選ばれている。その結果による、各尺度ごとの粗点の平均値と標準偏差を表2に示す¹⁸⁾。

この値に基づいてT得点に換算される。なおこの値は尺度Eによる修正がなされているものである。修正前の値は公表されていない。

ii) 基準群

基本尺度における各基準群の人数はつぎのようである(肥田野・平田・長塚・坪上・古澤・堀, 1964, p.358)。

尺度7(累犯的犯罪傾向As)は50名であるが、ほかの尺度はすべて30名である。

なお、ここでの異常群の診断基準を確認すると、MMPI東大改訂版の際とまったく同様になされている(平田・肥田野・長塚・坪上・古澤・堀, 1964, p.359)。

TPIの各基本尺度の構成の基準となった、診断内容を簡略に示すとつぎのようになる

(肥田野, 1967a, pp.5-6)。

Dp尺度—内因性うつ病, 更年期うつ病, 抑うつ反応, 循環気質のうつ状態などにみられる特徴をみる尺度。

Hc尺度—神経性心気症の特徴をみる尺度。集中不全などの訴えや不安発作などの傾向も含まれている。

Hy尺度—失声, 失立, 失歩, ヒステリー性けいれん, その他感覚異常や運動異常などにみられる転換ヒステリー症状をみる尺度。

Ob尺度—強迫神経症の特徴。すなわち, 強迫観念, 恐怖症, 強迫行為, などの傾向をみる尺度。

Pa尺度—妄想型分裂病の特徴をみる尺度。

Hb尺度—破瓜型分裂病(欠陥状態を含む)の特徴をみる尺度。

As尺度—反社会的傾向。とくに累犯性犯罪傾向をみる尺度。

Ep尺度—てんかん患者にみられる粘着性の特徴をみる尺度。

Ma尺度—内因性躁病, 循環気質の軽躁状態および昂揚病などの特徴をみる尺度。

なお, 追加尺度のIn尺度は, 正常者にみら

表2. 一般成人(男N=600・女N=600)の平均・標準偏差

	男(N=600)		女(N=600)	
	M	SD	M	SD
A(Nr)				
B(Rr)	2.35	2.36	2.12	2.13
C(Uf)	7.00	4.87	7.57	5.10
D(Li)	5.72	3.01	5.23	2.81
E(Cr)	7.80	2.93	7.47	2.84
1(Dp)	11.91	2.91	12.29	2.87
2(Hs)	12.58	3.31	14.12	3.96
3(Hy)	6.74	3.15	11.52	3.25
4(Ob)	21.86	4.16	21.98	4.19
5(Pa)	11.40	3.01	11.51	2.95
6(Hb)	11.48	3.82	10.81	3.94
7(As)	13.73	2.97	13.45	2.89
8(Ep)	7.03	3.56	7.07	3.48
9(Ma)	10.01	3.73	9.92	3.63
In	15.86	7.71	18.66	7.73

れる社会的内向的傾向—社会的外向的傾向をみる尺度であるとされる。

iii) 基本尺度作成の手続き (平田ら, 1964, p.359)

まず, 正常群と異常群について, 全項目に対する応答を調べ, 両群の応答率の差について χ^2 検定をおこない危険率5%以下で有意差の認められた項目を各尺度の候補項目とする。

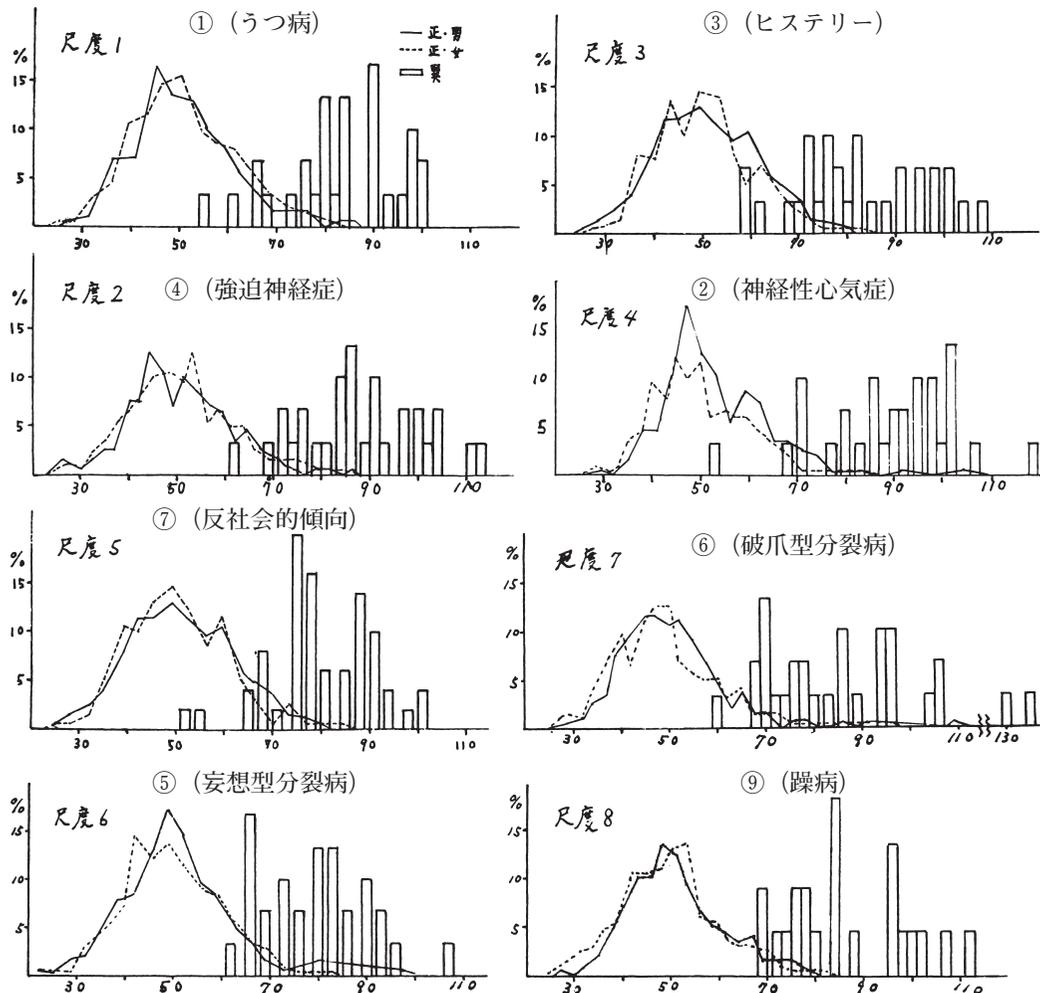
つぎに, これらの候補項目の組み合わせを

いろいろに変えて採点を試み, 正常群と異常群の平均値の差を正常群の標準偏差で除した値が, 最大になるような項目の組み合わせをみだし尺度項目とする。

この場合, 正常群の平均は10点前後, 標準偏差は3点以上になることを目標としたが, 尺度によってはこれに達しなかったものも出た。

このようにして構成された基本尺度の正常群と異常群の得点分布を図2に示す。

図2. TPI各尺度の基準群と標準化群との分布



(出典) 平田ら (1964) pp. 358-359

分布に差がみられることがわかる。ここでは8つの尺度が報告されているが、TPIの尺度8にあたるEp(てんかん)の分布の記載はない。なお、Ep尺度はてんかん患者にみられる粘着性の特徴をみる尺度とされる(肥田野, 1967a, pp.5-6)。

iv) 有効性尺度の作成の手続き(長塚・肥田野・平田・坪上・古澤・堀, 1964, p.360)(尺度A) 正常者において5%以上の?回答を生じた項目を36項目選定し, この?回答を数える。これはすべて数える手間を省くためである。当初はこのようななされたが, のちのTPIでは, すべての項目が対象になっている。(尺度B) まれな応答を選ぶ程度をみる。正常群の男女ともに15%未満しか選んでない項目応答から34項目を選定している。ただし, これに該当する項目でも, 異常群(特にヒステリー群, 破瓜型分裂病群)の平均B得点を不当に高らしめる項目はなるべく除いてある。(尺度C) L尺度をそのまま用いている。自分をよく見せかける応答態度の, 比較的幼稚なものを検出しようとするものである。ここでの尺度は, のちのTPIの尺度Dに相当すると思われる。

(尺度D) 「ハイ」の応答が現実に回避される可能性が一般に高いと考えられる項目が選ばれた。これらから, 異常群の平均値を不当に低める項目を除き, 27項目で作成された。この尺度は, のちのTPIでは用いられていないと思われる。

(尺度E) 正常群と異常群の間での識別性を高めるよう, 基本尺度得点を修正するために用いられる尺度である。MMPI原版では, 尺度Kが相当する。

これらの研究報告には, 付加尺度である尺度In, および, のちのTPIの尺度C(Unfavourable)については説明されていない。

v) プロファイルの解釈およびケースの理解(坪上・肥田野・平田・長塚・古澤・堀, 1964, p.361, 古澤・肥田野・平田・長塚・

坪上・堀, 1964, p.362.)

各尺度が構成された後には, 単独の尺度の意味するところにとどまらず, 2高点尺度などに代表されるプロファイルのパターン, 個別の解釈と理解が必要となる。MMPI原版では非常に多くの研究がなされており, 日本の文化, 社会のなかでの, TPIの広く臨床場面での実践的な研究の発展が期待される¹⁹⁾。

また, 500項目の1つずつの回答状況を検討して, さらに詳しい情報を集めて, 特定の目的に対して有効な項目だけを選び直して, 新しい尺度を開発する可能性を秘めていると考えられ, MMPI原版にみられるような, 多くの尺度開発研究の可能性が期待される。

③TPIの実施と活用に関する倫理

TPI研究会²⁰⁾は, 心理テストの実施, 採点, 活用, について倫理的問題を非常に重視している。したがって, TPIの実実施計画に関しては, 必ず専門家が責任者として参加していなければならないと義務づけている(TPI実施手引, p.15)。専門家とは, 精神医学または臨床心理学に関する専門的知識と経験を有し, 心理検査法について理解のある人を指している。問題用紙, プロフィール用紙, 採点版などの取り扱いや, 検査結果の解釈にとどまらず, 検査の全体的な責任者として, 終始指導と管理に当たらなければならない。実施に際しては, 目的を十分に説明した上で, 被検査者の納得を得なければならない。検査結果の活用については, 被検査者に何ら不利益をもたらすものでないことを明言する必要がある。これらの保障や明言が実行できない時には, 検査を実施することはひかえなければならない。

心理検査に関する倫理は, 多く議論されているが(たとえば, 岩脇, 1975, pp.57-68, アメリカ心理学会編, 1982, テスト学会編, 2007), 心理検査についての倫理基準を厳守して, TPI活用に当たっては, 『TPI実施の手引』の記載事項に従って運営しなければならないことは当然といえる。

6. TPIのコンピュータシステム化と能力開発への応用

(1) TPIのコンピュータシステム化

N社²¹⁾では、能力開発と組織開発をすすめるために、以前からTPIを用いていた松平²²⁾の協力を得て、社内へのTPIの導入をはかった。しかし、多人数へ実施する必要性から、N社においてコンピュータシステム化をおこなうこととなった。尺度の採点をおこなうだけでなく、当初の目的の能力開発に資するように、松平によるTPIプロフィールの解釈が活用された。松平の解釈は、いわゆる病理中心のものではなく、企業に勤務する社会人を対象に、自分自身の現在の行動特徴や、その行動特徴が現実周囲にどのような影響を与えているのかに気づききっかけとなるようにと、作成されたものであった(松平, 1992, p.21)²³⁾。また、N社では、TPIが誤解なく適切に組織のなかで活用されるよう、多くの工夫がなされた。

このようにして、TPIのコンピュータシステム版は、TPI研究会と東大出版会の正式な了承を1972年に得て、作成された。TPI-GADと称することとなった。なお、時代の変化にともない、TPIの質問項目の表現を検討する必要が出てきた。MMPI-2も同様の視点で改訂されたものである。TPIについても、肥田野・平田の了解を得て、1998年に54項目について、表現にやや工夫を加える試みがなされた。これは「限定版」として活用されることがある。ただし「限定版」は東大出版会ではあつかつていない²⁴⁾。

(2) TPIによる行動特徴の理解

自己理解や他者理解を深め、能力開発につながり²⁵⁾、また組織開発に発展するために整理された、各尺度の行動特徴を紹介する。これらは、行動の影響について考え、理解するためのヒントであって、判定的に用いてはいけない。

尺度の得点が高い場合も、低い場合も、それぞれよい影響を与える場合も、そうではない場合もあると考える。なお、尺度A・B・C・D・E・Fは標準得点50よりも、値が多ければ高い、少なければ低いとし、尺度1から9はこれらの尺度の各人の平均値よりも、値が多ければ高い、少なければ低いと原則として解釈している。

また、TPIの尺度名を記載するが、これは専門家以外には、絶対に公表してはいけない。

各尺度の特徴と、得点が高い場合、低い場合の行動の傾向をわかりやすく整理したものである(松平研究所・日本人材開発医学研究所, 2008, p.7, 河本, 1992, pp.45-49, FUJI XEROX, 1988)²⁶⁾。なお以下の各尺度名は平田(1995, pp.104-105)による。

(有効性尺度)

・尺度A (Nr) Non Response (疑問反応)

慎重かどうかの傾向を示す。

「高い場合」細かいところに気を配り、用心深く考えるので、上滑りはしない。

・尺度B (Rr) Rare Response (稀少反応)

気持ちが安定しているのか、気分が集中できない状態なのかなどの傾向を示す。

「高い場合」人が気づかないようなことに気づき、指摘したり、ユニークなアイデアや意見を言って、役に立つことがある。

・尺度C (Uf) Unfavourable Response (迎合反応)

自分に対する期待感、自分自身についての不満や不安があるのか、ないのかなどの傾向を示す。

「高い場合」控えめで、あまり自己主張はしないので、他人に悪い感じを与えない。

「低い場合」自分というものに自信があって、気持ちが安定しやすいし、少々の精神的圧迫にも、冷静さを保てる余裕がある。

・尺度D (Li) Lie score (虚飾反応)

心を支える信条や理屈、自分や他者を律する教科書的な物差しなどをもっているかどうか

かを示す。

「高い場合」あるべき姿とか、ルールなどを大事にする真面目さがあり、人情より知を重視する。

「低い場合」自分の考えにあまりとらわれないので、柔軟であり、相手とも折り合えるので、意見の衝突がない。

・ 尺度E (Cr) Correction scale (修正尺度)

この尺度は粗点の段階でつぎのようにいくつかの尺度に加算される。Hyが男女で異なる。

男性は、 $Dp+0.3E$, $Hc+0.5E$, $Ob+1.0E$, $As+0.5E$ 。

女性は、 $Dp+0.3E$, $Hc+0.5E$, $Hy+0.5E$, $Ob+1.0E$, $As+0.5E$ 。

尺度構成上の技術尺度である。

(付加尺度)

・ 尺度F (In) social Introversion (社会的向性尺度)

心的エネルギー (周囲に対する影響力) の強弱を示す。

「高い場合」印象はソフトで、悪い印象は与えない。親切で、あまりイヤということを書かない。

「低い場合」たいていの仕事や環境にへこたれない。変化に対しても何とか対応でき、外界への関心をもって、自己を押し出していく。

(基本尺度)

・ 尺度1 (Dp) Depression (うつ病尺度)

自分を責めたり、思いつめるなど、自分の内面を気にするかどうかの傾向を示す。

「高い場合」真面目で、丁寧な態度をとる。時間を惜しまず自分一人でもがんばる。会議では、相手の話をよく聴こうとしている。

「低い場合」周囲が落ち込んでいても、明るく振るまいムードメーカーになる。いつまでも過去のことなどにとらわれてぐずぐずすることはない。

・ 尺度2 (Hc) Hypochondria (心気症尺度)

健康への関心の強さ、好き嫌いなど、自分

が感覚的にとらえたことにこだわる傾向を示す。

「高い場合」細かい点によく気がつき、思いやりもある。顧客に対する気配りなどもあって、案外評判もよい。ムードづくりなどもうまい。

「低い場合」いざという時、神経の凶太さを発揮するようなどころがある。合理的な考え方をし、てきぱき仕事をすすめようとする。

・ 尺度3 (Hy) Hysteria (ヒステリー尺度)

勝ち気、移り気、感じやすさ、背伸び、自己顕示などの傾向を示す。

「高い場合」負けずぎらいで、がんばり屋。目立ちたがりで、無理をする。自分のよい面をPRしようとする。

「低い場合」クールで、ありのままを話すので、率直な人だと思われる。自分が出しゃばることはあまりしない。

・ 尺度4 (Ob) Obsessive-compulsive Neurosis (強迫神経症尺度)

思うように動けず、引っ込み思案になっているのか、ゆとりがあるのか、逆に自分のことで精一杯なのかなどの傾向を示す。

「高い場合」細かいことに気づき、完全にやろうとする真面目さがある。仕事を丁寧にするようとし、時間をかける。忙しそうにしている。

「低い場合」状況が変化したり、忙しいなかでもすぐに入りこめる。気軽に対応し、深く考えない。新しい仕事でも気おくれせず、すぐに取り組める。

・ 尺度5 (Pa) Paranoid Schizophrenia (妄想型分裂病尺度)

芯が強い、へこたれないなどの強気の傾向。現実とはまったく無縁ではないが、夢や理想、猜疑心などの傾向を示す。

「高い場合」状況が多少変化しても、自分の方針はぐらつかない。自分のプランとか思いつきとかを積極的に出してくる。

「低い場合」未来を語るよりも当面の実行計

画を考えるほうがあっていて、自由にやれと言われるより、目標がはっきりしているほうが、ガムシャラに行動できる。

・ 尺度6 (Hb) Hebephrenia (破瓜型分裂病尺度)

現実とはあまり縁のない内的思考や夢想、あるいは疎通性があるのかなどの傾向を示す。

「高い場合」仕事上の新しい着想や構想を考へることが好き。長期的なプランも立てることは好き。あまり発言はしないが、突然結論を言って驚かす。

「低い場合」職場の雰囲気づくりに協力的で、気軽に誰とでも話しやすい。上司や関係者など、周囲の人をうまく活用する。報告もコマメにするほう。

・ 尺度7 (As) Antisocial Personality Disorder (反社会性精神病質尺度)

マイペースなのか、環境に順応するのか、経験から学べるのかなどの傾向を示す。

「高い場合」自分の仕事ぶりや人柄が認められると、献身的にその人に対して働く。自分の得意なことには、他人を寄せつけずマイペースで突き進む。

「低い場合」素直で、協調性に富み、トラブルを起こすことはまずない。目立たないところで、雰囲気が良くなるように後押しする。優しい。

・ 尺度8 (Ep) Epilepsy (てんかん尺度)

がまん強いのか、感情をおさえるのか、あきらめが速いのかなどの傾向を示す。

「高い場合」既成のシステムやルールを大切にしている実行の人。能率は別として、時間外労働をいとわない。真面目で、信頼のおける仕事ぶりと言われることがある。

「低い場合」アッサリしていて、ものごとを決めるのも早い。自分勝手にキメツケルところはあるが、案外、すぐ折れることもある。

・ 尺度9 (Ma) Mania (そう病尺度)

楽天的でおおまか、物事を軽く受け流すの

か、自分の気持ちを表に出さないのかどうかなどの傾向を示す。

「高い場合」活動的で楽天的、リーダーシップをとる。ムードを盛り上げる。じっとしていないでどンドン動く。人と会うことをいとわない。

「低い場合」仕事はコツコツじっくりこなし、あまり抜け落ちがないので信頼されている。慎重なほう。まじめ。

以上、各尺度の解釈の要点を紹介した。この後のTPIの得点傾向を理解する際の手がかりの一助としてほしい。

7. 成人男性の10年間にわたる人格特性の横断的および縦断的研究

(1) 本研究の目的

本研究では、日本において実証的なデータが極めて少ないとされる成人期における人格の変化を、特性論の立場から、把握し検討する。まず、横断的な研究として、10歳違う年代ごとに人格特性の差異を分析する。つぎに、縦断的な研究として、10年間隔の人格特性の変化を分析する。その際には、10歳ごと、5歳ごとに世代を分けて追跡を試みた。

(2) 研究方法

① 測定尺度

人格特性を把握する指標として、質問紙法による心理検査である、Today Personality Inventoryによる、有効性尺度5尺度、付加尺度1尺度、基本尺度9尺度を用いた。本検査の質問項目は500項目である。日本の文化を背景としたなかで、基準群に基づく尺度構成による心理検査として、信頼に足る検査である。

各尺度ごとの粗点、および標準得点(T得点)に基づいて、平均値(mean-level stability)を分析の指標とした。

図3. N社 2011年_年代別 (10歳間隔) 男性 1111名

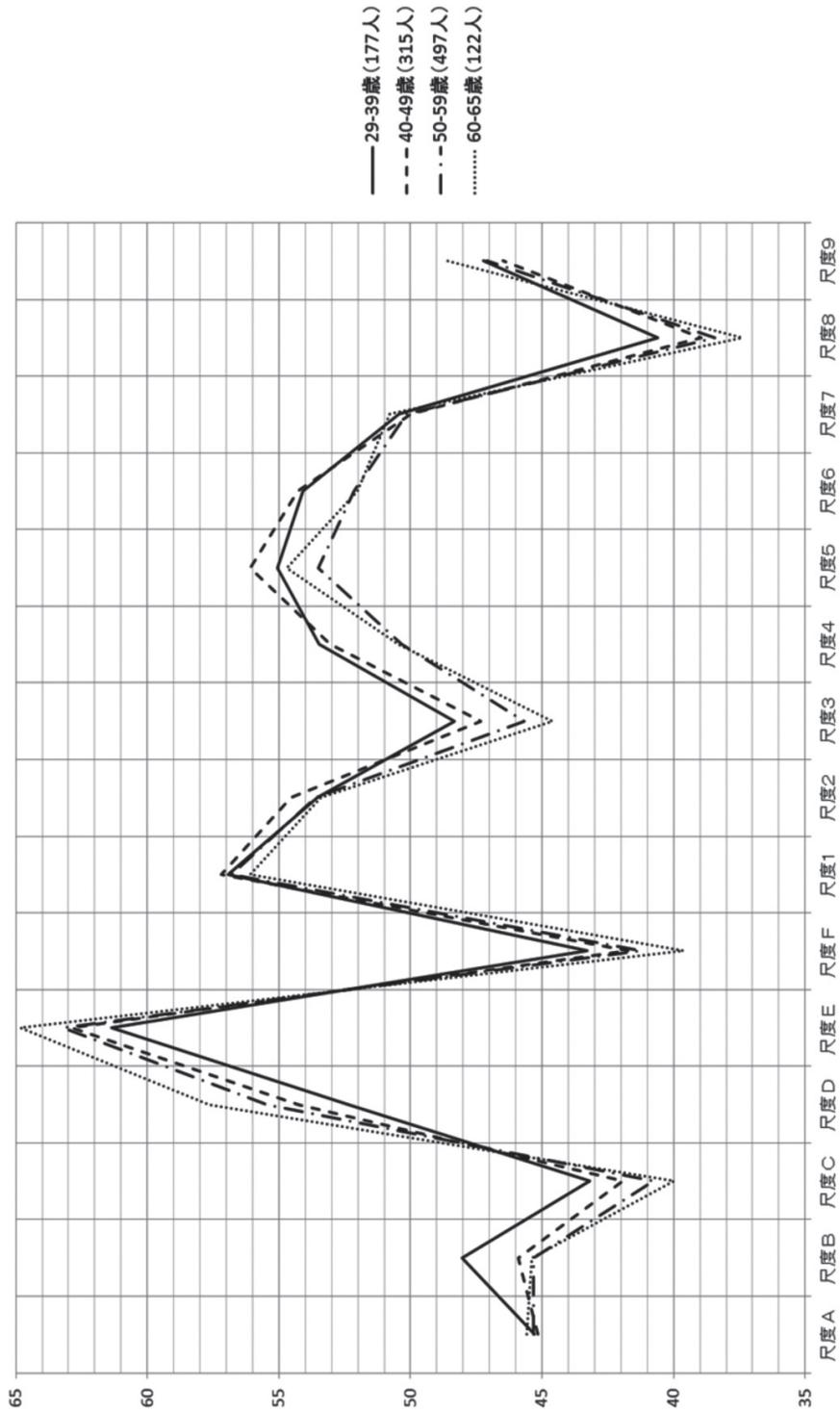


表3. N社2011年度データによる年代別（10歳間隔）標準得点の平均と標準偏差

	平均				標準偏差			
	2011年 29-39歳 n=177	2011年 40-49歳 n=315	2011年 50-59歳 n=497	2011年 60-65歳 n=122	2011年 29-39歳 n=177	2011年 40-49歳 n=315	2011年 50-59歳 n=497	2011年 60-65歳 n=122
尺度A	45.30	45.16	45.32	45.59	2.77	2.04	2.32	3.81
尺度B	48.05	45.92	45.32	45.39	11.34	7.01	6.26	5.67
尺度C	43.19	41.93	40.78	39.98	9.12	7.56	6.65	6.31
尺度D	52.34	54.24	55.45	57.65	10.42	9.95	10.13	9.23
尺度E	61.37	62.89	63.22	64.81	10.57	9.61	9.69	8.60
尺度F	43.29	41.73	41.26	39.65	10.16	9.89	9.15	8.26
尺度1	56.92	57.20	56.82	56.11	8.63	8.69	8.46	8.98
尺度2	53.54	54.54	53.60	53.40	9.49	8.79	8.40	7.42
尺度3	48.33	47.34	45.67	44.61	9.56	8.34	8.08	7.10
尺度4	53.47	53.06	50.32	50.48	8.93	8.51	8.38	8.20
尺度5	55.05	56.10	53.50	54.69	10.18	10.13	10.05	9.14
尺度6	54.09	54.28	52.15	52.02	9.69	9.47	9.26	9.15
尺度7	50.43	49.99	50.15	50.78	8.54	8.79	7.71	7.73
尺度8	40.62	38.97	38.44	37.39	9.28	7.44	7.02	5.65
尺度9	47.22	46.48	47.12	48.62	10.30	9.01	8.42	8.96
Mean	51.12	50.87	49.74	49.75				

表4. N社2011年度データによる年代別（10年間隔）の粗点の平均と標準偏差

	平均				標準偏差			
	2011年 29-39歳 n=177	2011年 40-49歳 n=315	2011年 50-59歳 n=497	2011年 60-65歳 n=122	2011年 29-39歳 n=177	2011年 40-49歳 n=315	2011年 50-59歳 n=497	2011年 60-65歳 n=122
尺度A	0.40	0.22	0.44	0.83	3.86	2.83	3.29	5.36
尺度B	2.06	1.54	1.40	1.43	2.71	1.68	1.51	1.36
尺度C	3.82	3.18	2.61	2.20	4.50	3.77	3.29	3.16
尺度D	6.72	7.29	7.64	8.30	3.09	2.96	3.02	2.75
尺度E	10.98	11.42	11.52	11.98	2.97	2.72	2.73	2.42
尺度F	11.67	10.52	10.13	8.93	7.77	7.63	7.01	6.41
尺度1	10.72	10.66	10.51	10.18	2.77	2.78	2.55	2.60
尺度2	8.33	8.43	8.08	7.78	3.41	3.18	2.74	2.38
尺度3	6.28	5.96	5.41	5.09	3.06	2.67	2.58	2.28
尺度4	12.54	11.92	10.72	10.32	4.70	4.39	3.89	3.94
尺度5	13.02	13.34	12.56	12.92	3.07	3.05	3.03	2.76
尺度6	13.36	13.45	12.61	12.56	3.72	3.63	3.56	3.49
尺度7	8.76	8.40	8.41	8.37	2.84	2.51	2.19	2.22
尺度8	3.85	3.27	3.08	2.70	3.30	2.63	2.49	2.00
尺度9	9.29	9.06	9.28	9.84	3.81	3.33	3.09	3.30

②回答参加者

中堅化学企業N社に勤務する男性社員1111名の回答を用いた。

同一人物の回答結果について、2001年、2006年、2010年、2011年に実施されたデータが分析された。

実施期間は、各年とも2月から4月であった。

N社では、毎年1回、自己啓発に基づく能力開発、影響力向上のために、原則全社員を対象としてTPIを実施している。これは組織開発の一環として長い活用の歴史を持つ。社員は活用の目的を十分理解したうえで、自主参加であり、強制ではない。各自のTPIの回答結果は関連部署によってコンピュータで採点、整理されて、3月から5月にかけて回答者本人にフィードバックされる。

④回答参加者の年齢構成

2011年における年齢構成は次のとおりである。

29-34歳：46名。35-39歳：131名。40-44歳：183名。45-49歳：132名。50-54歳：219名。55-59歳：278名。60-65歳：122名。平均年齢：49.49歳（SD 8.72）。

(3) 研究1 (N社2011年データによる10歳間隔の年代別による横断的研究)

①方法

N社2011年のデータを、回答者を10歳差の年代別に分けた。

30歳代(29-39歳:177名)、40歳代(40-49歳:315名)、50歳代(50-59歳:497名)、60歳代(60-65歳:122名)である。

各年代における各尺度ごとの標準得点の平均値を表3に、粗点の平均値を表4に、また標準得点によるプロフィールを図3に示す。

なお、TPIの付加尺度InはTPI-GADでは尺度Fとして尺度Eの次に位置している。また、有効性尺度・付加尺度・基本尺度間はプロフィールをつなげないが、ここでは見やすく

するためにつなげて表わしている。

さらに、年代別の各尺度の粗点の平均値によって、1要因4水準の分散分析をおこない、さらにTurky法による多重比較によって検討した。F値と有意水準、および多重比較の5%水準の有意差検定の結果を表5に示す。

②結果および考察

各年代ともに、全体的なプロフィールのパターンは類似していた。

組織全体の雰囲気としての概要を、個人の行動傾向についての各尺度の解釈を応用して類推するとつぎのようになる。ここでも尺度AからFは標準得点50、尺度1から9はこれらの尺度の平均値から、尺度の得点が多い場合を高、少ない場合を低と表わしている。

自分に対する肯定的な感情を持ち(尺度C低)、また精神的エネルギーを外に出せる心境でストレスにも強いが、現在感じる事が少ない(尺度F低)。やや固い価値観を持つ(尺度D・E高)。真面目で(尺度1高)、神経質な傾向(尺度2高)、精一杯なところ(尺度4高)も感じられる。自分の考えや思いにこだわる堅い傾向が推測される(尺度5・6高)。無理に背伸びしたり感情をため込む傾向は少ないかもしれない(尺度3・8低)。自信があり、まじめで、感情的な波立ちは少ない風土ではないかと思われる。

つぎに、各尺度の粗点に基づく、年代別による分散分析および多重比較からはつぎのことが言えよう。

有効性尺度では、尺度Bでは、30代が他の年代よりも相対的ではあるが、尺度粗点の得点の平均値は高く、尺度Cでも、30代が50・60代より粗点の得点の平均値は高かった。T得点そのものは50点より低い、年代ごとの相対的な観点では、30代はやや気分が落ち着かないと考えられよう(以降、各尺度の粗点の得点の平均値が高いあるいは低い場合を、高いあるいは低いと表わしている)。尺度Fにおいては30代は60代よりも

表5. 2011年 年代別(10歳間隔)の各尺度の有意差検定結果

	分散分析		多重比較	
	F(3,1107) 値	有意水準	MSe	
尺度A	0.88	0.4521 n.s.	12.631	—
尺度B	6.13	0.0004 ***	3.189	30代>40代・50代・60代
尺度C	7.02	0.0001 ***	13.201	30代>50代・60代
尺度D	7.87	0.0001 ***	8.911	60代>30代・40代, 50代>30代
尺度E	3.34	0.0189 *	7.495	60代>30代
尺度F	3.73	0.0110 *	52.636	30代>60代
尺度1	1.26	0.2850 n.s.	7.059	—
尺度2	1.84	0.1373 n.s.	8.712	—
尺度3	7.77	<.0001 ***	7.070	30代>50代・60代, 40代>50代・60代
尺度4	12.98	<.0001 ***	17.456	30代>50代・60代, 40代>50代・60代
尺度5	4.40	0.0044 ***	9.099	40代>50代
尺度6	4.76	0.0027 ***	12.946	40代>50代
尺度7	1.14	0.3330 n.s.	5.767	—
尺度8	5.48	0.0010 ***	6.910	30代>50代・60代
尺度9	1.64	0.1789 n.s.	10.914	—

*** P<.001, ** P<.01, * P<.05

高い。尺度Dでは、60代は30・40代より高く、50代は30代より高い。尺度Eについては60代が30代よりも高い。相対的には30代はややナイーブな傾向にあり、60代はタフといえよう。高齢で尺度Dが高くなるのは村上ら(2009)の指摘と一致する。

基本尺度では、尺度3・4で30・40代が50・60代よりも高く、りきみ、緊張、不安の傾向が推察される。尺度8で30代は50・60代よりも高く相対的にはややがまんしている傾向と思われる。また、尺度5・6では40代が50代よりも高かった。強気な傾向で、自己の考えや思いにこだわると解釈されよう。会社のなかでは実務を指導する中核的な存在で管理職的な立場が多く、このような仕事に取り組んでいる姿勢の反映であろうか。

30代は50代あるいは60代に比べて相対的にはあるが、尺度B・C・Fが高く、尺度3・4・8も高い。尺度D・Eは低い。やや自信がなく、ナイーブで、りきみ、不安を感じ、がまんする傾向にあり、自分の価値観を

通す構えは低い。

40代は50代60代に比べると、尺度3・4が高く、また、尺度5・6も高い。肩に力をいれ、自分の考え・思いなどを支えにしていると推察される。

50代60代は、尺度B・C・3・4・8などが低い。また、60代は尺度D・Eが高く尺度Fが低い。自分なりの考えがはっきりしてくるとともに、心的な緊張は少ない傾向といえよう。

尺度1・2・7・9には世代間に有意な差は示されなかった。

(4) 研究2 (N社2001年のデータによる10歳間隔の年代別による横断的研究)

①方法

N社2001年のデータに基づく、10歳間隔の年代別の尺度ごとの平均値を求めた。N社2011年の同一人物についての10年前の値となる。

図4. N社2001年_年代別 (10歳間隔)_男性1111名

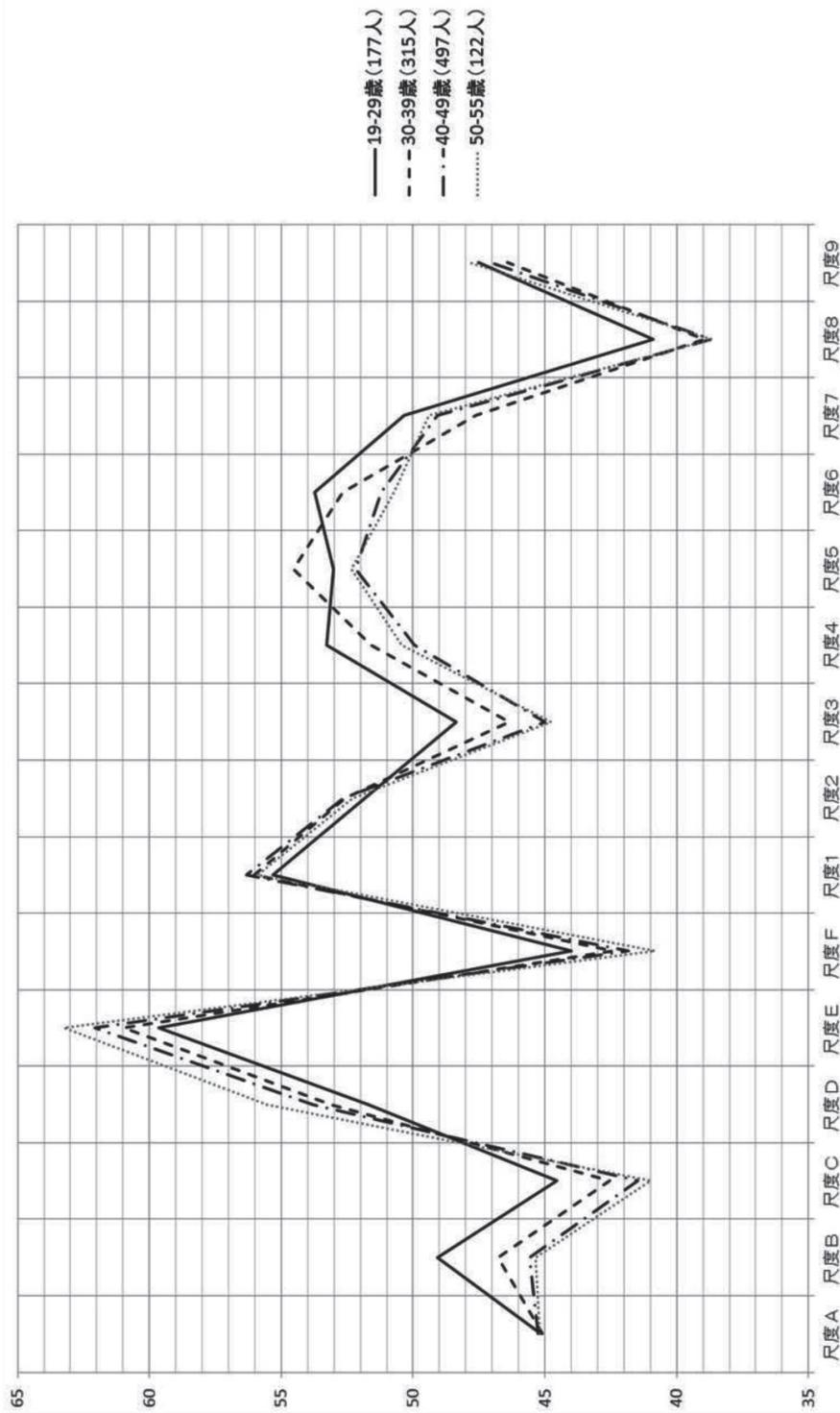


表6. N社2001年度データによる年代別（10歳間隔）標準得点の平均と標準偏差

	平均				標準偏差			
	2001年 19-29歳 n=177	2001年 30-39歳 n=315	2001年 40-49歳 n=497	2001年 50-55歳 n=122	2001年 19-29歳 n=177	2001年 30-39歳 n=315	2001年 40-49歳 n=497	2001年 50-55歳 n=122
尺度A	45.18	45.10	45.27	45.20	1.11	0.35	2.31	0.67
尺度B	49.08	46.79	45.58	45.34	11.45	9.64	6.57	6.95
尺度C	44.55	42.54	41.46	40.99	9.73	8.28	7.19	8.55
尺度D	51.70	53.12	53.81	55.55	9.66	9.66	10.62	11.00
尺度E	59.64	60.97	62.07	63.25	11.38	10.25	10.39	10.63
尺度F	43.99	42.41	41.85	40.83	10.25	10.29	9.66	9.98
尺度1	55.31	56.02	56.33	55.89	8.07	8.08	7.89	8.52
尺度2	51.83	52.57	52.65	52.29	10.64	8.53	8.84	8.23
尺度3	48.37	46.35	44.99	44.76	10.82	8.42	8.80	7.38
尺度4	53.28	51.61	49.94	50.44	9.14	8.98	8.51	8.59
尺度5	53.01	54.53	52.18	52.34	9.82	9.81	10.41	10.36
尺度6	53.74	52.67	51.21	50.72	11.25	9.77	9.98	8.97
尺度7	50.34	47.63	49.08	49.39	9.40	8.54	8.22	7.28
尺度8	40.89	38.96	38.71	38.68	9.96	7.77	6.70	7.11
尺度9	47.54	46.41	47.06	47.89	10.38	8.87	8.89	8.80
Mean	50.46	49.63	49.14	49.16				

表7. N社2001年度データによる年代別（10歳間隔）粗点の平均と標準偏差

	平均				標準偏差			
	2001年 19-29歳 n=177	2001年 30-39歳 n=315	2001年 40-49歳 n=497	2001年 50-55歳 n=122	2001年 19-29歳 n=177	2001年 30-39歳 n=315	2001年 40-49歳 n=497	2001年 50-55歳 n=122
尺度A	0.25	0.12	0.35	0.29	1.66	0.52	3.21	1.01
尺度B	2.30	1.76	1.47	1.40	2.73	2.31	1.58	1.67
尺度C	4.47	3.49	2.95	2.68	4.79	4.10	3.58	4.25
尺度D	6.51	6.95	7.15	7.67	2.87	2.87	3.15	3.28
尺度E	10.50	10.87	11.19	11.50	3.23	2.91	2.94	3.02
尺度F	12.23	11.02	10.59	9.80	7.85	7.90	7.41	7.68
尺度1	10.40	10.48	10.48	10.25	2.42	2.49	2.41	2.52
尺度2	8.02	8.06	7.94	7.67	3.68	2.99	2.92	2.65
尺度3	6.28	5.63	5.20	5.14	3.46	2.69	2.82	2.35
尺度4	12.94	11.89	10.89	10.78	4.67	4.38	3.95	4.36
尺度5	12.42	12.86	12.16	12.22	2.96	2.96	3.14	3.12
尺度6	13.24	12.83	12.26	12.04	4.32	3.74	3.82	3.46
尺度7	8.96	7.95	8.25	8.18	3.14	2.51	2.37	2.26
尺度8	3.94	3.26	3.17	3.14	3.51	2.74	2.38	2.54
尺度9	9.45	8.99	9.24	9.59	3.84	3.25	3.27	3.24

各尺度ごとの標準得点の平均値を表6に、粗点の平均値を表7に、プロフィールを図4に示す。また、先のN社2011年データの分析と同様の方法により、分散分析と多重比較の有意差検定の結果を表8に示す。

②結果および考察

N社2001年の全体的プロフィールの特徴は、N社2011年の傾向とほとんど変化は見られない。

尺度C・Fは標準得点の平均値は低く、尺度D・Eが高い。また、尺度1・2・4・5・6が標準得点の平均値は高く、尺度3・8が低い傾向となっている。

分散分析と多重比較による結果はつぎのようである。

尺度B・Cは20代が他の年代より尺度の粗点の得点の平均値は高く、また尺度Fで20代が50代よりも高い。尺度得点の偏差値は50よりも低いが、相対的には粗点の得点の差からは、20代は自信が弱く、内向的な傾向といえる。尺度Dでは、50代は20代よりも、

尺度Eでは50・40代が20代よりも粗点の得点の平均値は高かった。

尺度D・Eが高い場合は、防衛的であると解釈されることもあるが、やや固さはあるが、しっかりしているともいえ、適応感を持つ場合も多い。

基本尺度では、尺度3・4・6・7・8において、20代が粗点の平均値が高くなっている傾向にある。りきみ・緊張感・不安等があり（尺度3・4高）、自己の内こもる傾向がみられ（尺度6高）、自分のやり方を支えに（尺度7高）、がまんする気分（尺度8高）がみられよう。実務担当者として、受け身にならざるを得ない心境が推察される。

尺度5は、30代が40代よりも高くなっていた。2011年では、40代が50代よりも高くなっていたので、10年前と相対的には変わっていないこととなる。30代では管理職となっていないので、中堅社員としての姿勢があるとしても2011年の解釈では不十分かもしれない。この年代のコホート効果とも考

表8. 2001年 年代別（10歳間隔）の各尺度の有意差検定結果

	分散分析		多重比較	
	F (3,1107) 値	有意水準	MSe	
尺度A	0.62	0.6016 n.s.	5.253	—
尺度B	8.22	<.0001 ***	4.116	20代> 30代・40代・50代
尺度C	7.48	<.0001 ***	16.110	20代> 30代・40代・50代
尺度D	3.82	0.0097 ***	9.287	50代> 20代
尺度E	3.59	0.0132 *	8.940	50代・40代> 20代
尺度F	2.92	0.0332 *	58.551	20代> 50代
尺度1	0.34	0.7931 n.s.	5.985	—
尺度2	0.51	0.6736 n.s.	9.269	—
尺度3	7.07	0.0001 ***	8.117	20代> 40代・50代
尺度4	12.30	<.0001 ***	18.001	20代> 30代・40代・50代, 30代> 40代
尺度5	3.50	0.0150 *	9.373	30代> 40代
尺度6	4.17	0.0060 ***	14.769	20代> 40代・50代
尺度7	6.08	0.0004 ***	6.435	20代> 30代・40代・50代
尺度8	3.81	0.0098 **	7.331	20代> 30代・40代
尺度9	1.24	0.2928 n.s.	11.271	—

*** P<.001, ** P<.01, * P<.05

えられる。今後の課題である。

なお、20代ではプロフィールで尺度5よりわずかに尺度6が高い傾向がみられ、青年期の特徴が含まれているとも推察される。また、2011年データではみられなかった尺度7が高いということも同様である。2001年データにある20代の傾向が他の年代とやや異なる可能性が推察される。

2001年データでは尺度1・2・9では有意差は示されなかった。

研究1、研究2から年代別の傾向をまとめてみよう。

N社2011年、N社2001年の10歳間隔の年代別傾向より、20・30代は50・60代と異なり、相対的には心的緊張が強く、50・60代はやや固い傾向はみられるが、あえて言うならば心的な無理は少ないと考えられる。

2011年、2001年ともに尺度1・2・9には年代差は示されなかった。

ここで先に紹介した村上ら(2009, pp.47-54)の結果と照らし合わせてみると、MMPIとTPIの尺度とはまったく同じとは言えないが参考になろう。TPIの尺度とMMPIの尺度とを記しておこう。

尺度B(尺度F)は年齢が若いとやや得点が高くなること、また尺度D(尺度L)が年齢が高くなると得点が高くなる傾向と同様となった。尺度1(尺度D)は年齢で差がなく、MMPIと同様であった。尺度2(尺度Hs)は本研究では差がなかったが、年齢とともに得点は低下したとある。尺度3(尺度Hy)は年齢が若いと得点は高くなり、同様であった。また尺度4(尺度Pt)は年齢が若いと得点が高くなり、これも同様であった。尺度5(尺度Pa)は年齢が高いと得点は低下するとあるが、本研究では逆に高くなる傾向となった。尺度6(尺度Sc)は青年期は得点が高く、本研究では20代が高くなり、類似の傾向がみられた。尺度7(Pd)年齢が上がると得点が

低下するとされており、本研究では20代という若い年代で高くなっていった。(尺度8は対応する尺度はない)。尺度9(Ma)は青年期は得点が高く、成人中期から低下するとしているが、本研究では青年期のデータはなく、年齢による差はみられなかった。尺度F(尺度0)は世代差はなかったとされているが、本研究では年齢が若いと得点が高い傾向となった。

これらから尺度B・D・E・1・3・4・6・7が村上ら(2009)と同様の傾向を示したといえよう。

MMPI原版の先行研究(Leonら, 1979)では、高齢(平均年齢77歳)になると尺度1・2が高くなっているが、平均年齢62歳まではプロフィールの変化は少ない。この研究にみられたように同様に、プロフィールの変化は65歳までは少ない結果となった。

(5) 研究3(10歳間隔の4グループによる10年間にわたる縦断的研究)

①方法

同一人物を対象として、10年間にわたる人格特性の変化を縦断的研究として分析した。すなわち2001年から2011年にかけての20代から30代、30代から40代、40代から50代、50代から60代、の4グループでの変化となる。

以下に各グループの人数を記す。

1グループ：2001年19-29歳が2011年に29-39歳となる177名。

2グループ：2001年30-39歳が2011年に40-49歳となる315名。

3グループ：2001年40-49歳が2011年に50-59歳となる497名。

4グループ：2001年50-55歳が2011年に60-65歳となる122名。

②結果および考察

N社2001年と2011年の年代別による10年間隔の縦断的な分析として、各尺度の標準

図5. N社 2001年・2011年_各年代別比較 (10歳間隔)

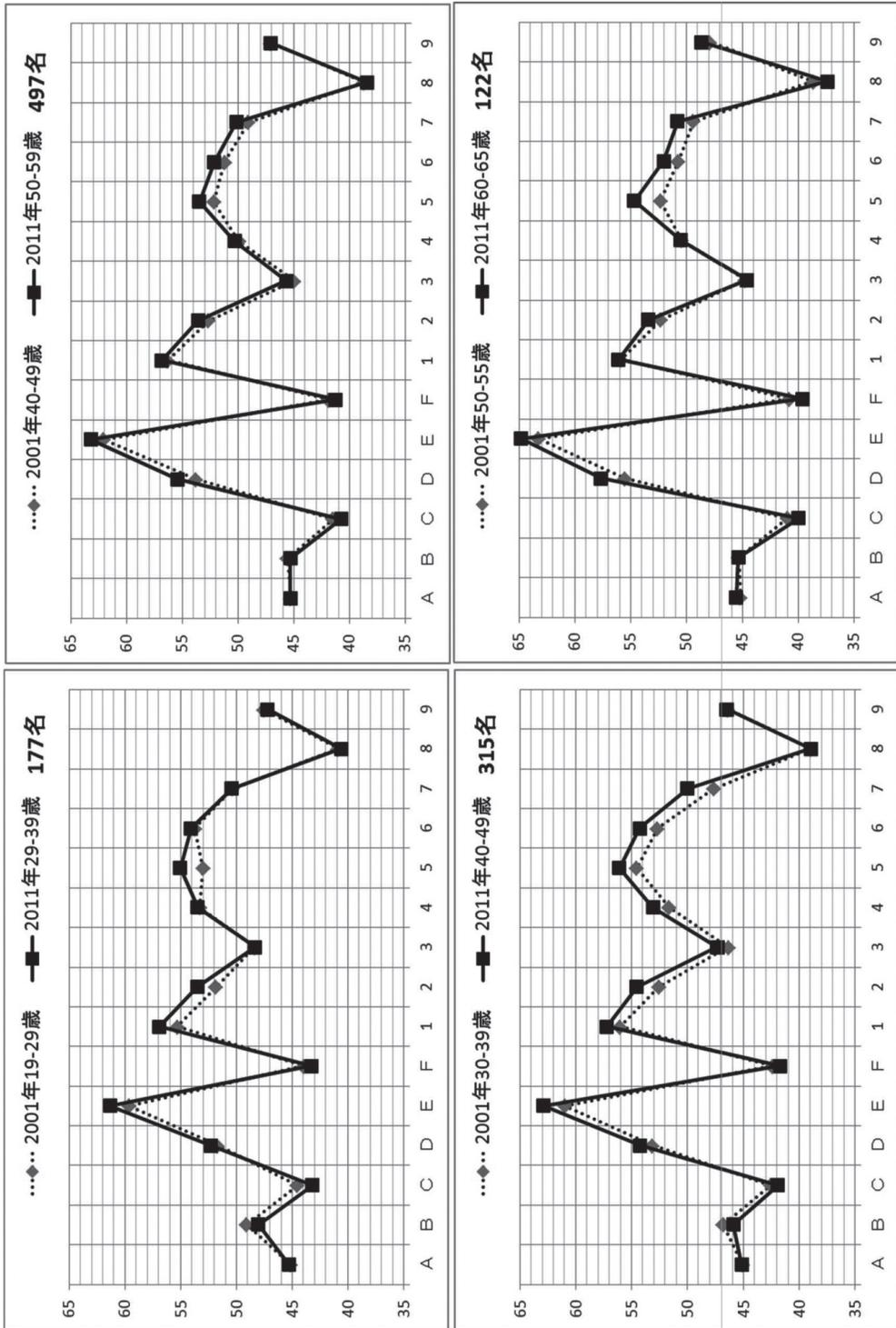


表9. N社2001年度と2011年度データの年代別（10年間隔）の標準得点と標準偏差

	平均										標準偏差									
	2001年 19-29歳	2001年 30-39歳	2001年 40-49歳	2001年 50-59歳	2001年 60-65歳	2001年 19-29歳	2001年 29-39歳	2001年 39-49歳	2001年 49-59歳	2001年 59-65歳	2011年 19-29歳	2011年 29-39歳	2011年 39-49歳	2011年 49-59歳	2011年 59-65歳	2011年 19-29歳	2011年 29-39歳	2011年 39-49歳	2011年 49-59歳	2011年 59-65歳
	n=177	n=315	n=497	n=122																
尺度A	45.18	45.30	45.16	45.27	45.32	45.10	45.16	45.20	45.59	1.11	2.77	0.35	2.04	2.31	2.32	0.67	3.81			
尺度B	49.08	48.05	45.92	45.58	45.32	46.79	45.92	45.34	45.39	11.45	11.34	9.64	7.01	6.57	6.26	6.95	5.67			
尺度C	44.55	43.19	41.93	41.46	40.78	42.54	41.93	40.99	39.98	9.73	9.12	8.28	7.56	7.19	6.65	8.55	6.31			
尺度D	51.70	52.34	54.24	53.81	55.45	53.12	54.24	55.55	57.65	9.66	10.42	9.66	9.95	10.62	10.13	11.00	9.23			
尺度E	59.64	61.37	62.89	62.07	63.22	60.97	62.89	63.25	64.81	11.38	10.57	10.25	9.61	10.39	9.69	10.63	8.60			
尺度F	43.99	43.29	41.73	41.85	41.26	42.41	41.73	40.83	39.65	10.25	10.16	10.29	9.89	9.66	9.15	9.98	8.26			
尺度1	55.31	56.92	57.20	56.33	56.82	56.02	57.20	55.89	56.11	8.07	8.63	8.08	8.69	7.89	8.46	8.52	8.98			
尺度2	51.83	53.54	54.54	52.65	53.60	52.57	54.54	52.29	53.40	10.64	9.49	8.53	8.79	8.84	8.40	8.23	7.42			
尺度3	48.37	48.33	47.34	44.99	45.67	46.35	47.34	44.76	44.61	10.82	9.56	8.42	8.34	8.80	8.08	7.38	7.10			
尺度4	53.28	53.47	53.06	49.94	50.32	51.61	53.06	50.44	50.48	9.14	8.93	8.98	8.51	8.51	8.38	8.59	8.20			
尺度5	53.01	55.05	56.10	52.18	53.50	54.53	56.10	52.34	54.69	9.82	10.18	9.81	10.13	10.41	10.05	10.36	9.14			
尺度6	53.74	54.09	54.28	51.21	52.15	52.67	54.28	50.72	52.02	11.25	9.69	9.77	9.47	9.98	9.26	8.97	9.15			
尺度7	50.34	50.43	49.99	49.08	50.15	47.63	49.99	49.39	50.78	9.40	8.54	8.54	8.79	8.22	7.71	7.28	7.73			
尺度8	40.89	40.62	38.96	38.71	38.44	38.96	38.97	38.68	37.39	9.96	9.28	7.77	7.44	6.70	7.02	7.11	5.65			
尺度9	47.54	47.22	46.41	47.06	47.12	46.41	46.48	47.89	48.62	10.38	10.30	8.87	9.01	8.89	8.42	8.80	8.96			
Mean	50.46	51.12	50.87	49.14	49.74	49.63	50.87	49.16	49.75											

表 10. N社 2001年度と2011年度データの年代別（10年間隔）の粗点と標準偏差

	平均										標準偏差									
	2011年 19-29歳		2011年 29-39歳		2011年 39-49歳		2011年 49-59歳		2011年 59-65歳		2001年 19-29歳		2001年 29-39歳		2001年 39-49歳		2001年 49-59歳		2001年 59-65歳	
	n=177	n=315																		
尺度 A	0.25	0.40	0.12	0.22	0.35	0.44	0.29	0.83	1.66	3.86	0.52	2.83	3.21	3.29	1.01	5.36				
尺度 B	2.30	2.06	1.76	1.54	1.47	1.40	1.40	1.43	2.73	2.71	2.31	1.68	1.58	1.51	1.67	1.36				
尺度 C	4.47	3.82	3.49	3.18	2.95	2.61	2.68	2.20	4.79	4.50	4.10	3.77	3.58	3.29	4.25	3.16				
尺度 D	6.51	6.72	6.95	7.29	7.15	7.64	7.67	8.30	2.87	3.09	2.87	2.96	3.15	3.02	3.28	2.75				
尺度 E	10.50	10.98	10.87	11.42	11.19	11.52	11.50	11.98	3.23	2.97	2.91	2.72	2.94	2.73	3.02	2.42				
尺度 F	12.23	11.67	11.02	10.52	10.59	10.13	9.80	8.93	7.85	7.77	7.90	7.63	7.41	7.01	7.68	6.41				
尺度 1	10.40	10.72	10.48	10.66	10.48	10.51	10.25	10.18	2.42	2.77	2.49	2.78	2.41	2.55	2.52	2.60				
尺度 2	8.02	8.33	8.06	8.43	7.94	8.08	7.67	7.78	3.68	3.41	2.99	3.18	2.92	2.74	2.65	2.38				
尺度 3	6.28	6.28	5.63	5.96	5.20	5.41	5.14	5.09	3.46	3.06	2.69	2.67	2.82	2.58	2.35	2.28				
尺度 4	12.94	12.54	11.89	11.92	10.89	10.72	10.78	10.32	4.67	4.70	4.38	4.39	3.95	3.89	4.36	3.94				
尺度 5	12.42	13.02	12.86	13.34	12.16	12.56	12.22	12.92	2.96	3.07	2.96	3.05	3.14	3.03	3.12	2.76				
尺度 6	13.24	13.36	12.83	13.45	12.26	12.61	12.04	12.56	4.32	3.72	3.74	3.63	3.82	3.56	3.46	3.49				
尺度 7	8.96	8.76	7.95	8.40	8.25	8.41	8.18	8.37	3.14	2.84	2.51	2.51	2.37	2.19	2.26	2.22				
尺度 8	3.94	3.85	3.26	3.27	3.17	3.08	3.14	2.70	3.51	3.30	2.74	2.63	2.38	2.49	2.54	2.00				
尺度 9	9.45	9.29	8.99	9.06	9.24	9.28	9.59	9.84	3.84	3.81	3.25	3.33	3.27	3.09	3.24	3.30				

表 11. 2001 年と 2011 年との年代別 (10 歳間隔) の各尺度の有意差検定結果

	20代から30代			30代から40代		
	F (1,117) 値	有意水準	尺度粗点傾向	F (1,314) 値	有意水準	尺度粗点傾向
尺度A	0.24	0.6275 n.s.		0.35	0.5571 n.s.	
尺度B	1.20	0.2745 n.s.		2.39	0.1234 n.s.	
尺度C	4.51	0.0350 *	(低下)	1.90	0.1686 n.s.	
尺度D	0.92	0.3391 n.s.		6.07	0.0143 *	(上昇)
尺度E	5.32	0.0222 *	(上昇)	16.20	<.0001 ***	(上昇)
尺度F	1.34	0.2484 n.s.		2.13	0.1458 n.s.	
尺度1	2.74	0.0999 +	(上昇傾向)	1.72	0.1902 n.s.	
尺度2	1.15	0.2851 n.s.		4.08	0.0442 *	(上昇)
尺度3	0.00	1.0000 n.s.		3.39	0.0665 +	(上昇傾向)
尺度4	1.26	0.2626 n.s.		0.02	0.8882 n.s.	
尺度5	6.68	0.0106 *	(上昇)	8.82	0.0032 **	(上昇)
尺度6	0.11	0.7431 n.s.		9.15	0.0027 **	(上昇)
尺度7	0.64	0.4222 n.s.		7.60	0.0062 **	(上昇)
尺度8	0.13	0.7205 n.s.		0.00	0.9691 n.s.	
尺度9	0.36	0.5469 n.s.		0.14	0.7049 n.s.	

	40代から50代			50代から60代		
	F (1,496) 値	有意水準	尺度粗点傾向	F (1,121) 値	有意水準	尺度粗点傾向
尺度A	0.20	0.6536 n.s.		1.19	0.2777 n.s.	
尺度B	0.94	0.3320 n.s.		0.07	0.2949 n.s.	
尺度C	7.41	0.0067 n.s.	(低下)	4.47	0.0366 *	(低下)
尺度D	22.85	<.0001 ***	(上昇)	10.57	0.0015 **	(上昇)
尺度E	12.42	0.0005 ***	(上昇)	6.06	0.0152 *	(上昇)
尺度F	4.66	0.0314 *	(低下)	5.11	0.0256 *	(低下)
尺度1	0.10	0.7498 n.s.		0.11	0.7359 n.s.	
尺度2	1.53	0.2163 n.s.		0.30	0.5872 n.s.	
尺度3	3.46	0.0634 +	(上昇傾向)	0.05	0.8283 n.s.	
尺度4	1.29	0.2570 n.s.		2.71	0.1024 n.s.	
尺度5	11.99	0.0006 ***	(上昇)	8.85	0.0035 **	(上昇)
尺度6	6.47	0.0113 *	(上昇)	4.75	0.0312 *	(上昇)
尺度7	2.68	0.1022 n.s.		1.05	0.3080 n.s.	
尺度8	0.96	0.3286 n.s.		7.61	0.0067 **	(低下)
尺度9	0.15	0.7017 n.s.		1.16	0.2829 n.s.	

** P<.01, * P<.05, + P<.10,

得点の平均値を表9(表3と表6を整理)に、同じく粗点による平均値を表10(表4と表7を整理)に示す。また、年代別の標準得点の平均値によるプロフィールを図5(図3と図4を整理)に示す。

各年代別に尺度ごとの粗点の平均値について1要因2水準の被験者内計画による分散分析をおこなった。その検定結果を表11に示す。

各年代ごとの各尺度のプロフィールはほとんど同じパターンである。

各尺度の10年間隔において、尺度得点の粗点の平均値で有意差のみられた変化を確認するとつぎのようである。

1グループ:20代から30代にかけては、尺度Cが得点が低下し(4.47:3.82)、尺度Eは得点が上昇していた(10.50:10.98)。また、尺度5が得点が上昇していた(12.42:13.02)。やや自信を持ち、強気の傾向となったと思われる。

2グループ:30代から40代にかけては、尺度Dが得点が上昇し(6.95:7.29)、尺度Eも得点が上昇する(10.87:11.42)こととなった。また、尺度2が得点が上昇し(8.06:8.43)、尺度5(12.86:13.34)、尺度6(12.83:13.45)、尺度7(7.95:8.40)がいずれも得点が上昇していた。また、尺度3も得点が上昇する傾向(5.63:5.96)を示した。30代から40代の10年間においては、やや固いが自分なりの価値観や判断の方向を持つとし(尺度D・E・5・6高)、一方では、やや感情的に肩に力を入れ、自己流のやり方で対応(尺度2・3・7高)しようとする可能性が考えられる。自分なりの仕事のやり方を創っていかうとしている姿勢かもしれない。

3グループ:40代から50代にかけては、尺度C(2.95:2.61)・尺度F(10.59:10.13)が得点が低下し、尺度D(7.15:7.64)と尺度E(11.16:11.52)は得点が上昇していた。また、尺度5(12.16:12.56)と尺度6(12.26:

12.61)が得点は上昇していた。自信・自己への安定感が増し、自分の考えやこだわりあるいは思いの方向がはっきりするといった、強気の傾向となっている。なお、尺度3(5.20:5.41)が上昇する傾向となっていた。まだ肩に力が入っているのかもしれない。

4グループ:50代から60代にかけては、尺度C(2.28:2.20)・F(9.80:8.93)が得点が低下し、尺度D(7.67:8.30)・E(11.50:11.98)が上昇している。また、尺度5(12.22:12.92)・6(12.04:12.56)が得点が上昇している。尺度8(3.14:2.70)は低下していた。自己に対する安定感が増しており、強気の傾向を持ち、一方では、割り切りよく感情をため込まない傾向といえよう。

これらのことから、各年代での様子を解釈すると、20代から30代にかけては、やや自信を持ち強気になり始める。30代から40代にかけては、自分の考え・思いの方向を創るが、同時に自己流のやり方を支えにしようとする。40代から50代にかけては、自信・安定感を強め、自分の価値観・考えが強くなる。50代から60代にかけては、同様に安定感を持ち、自己の考え・強気の傾向となっているが、感情をためず割り切りのよい傾向となっているようだ。とくに、40代から50代、50代から60代にかけて、尺度C・Fの得点が低下し、尺度5・6が上昇することとなっている。適応感を持ち、自己への安定感、強気の心境が続いていると思われる。

各年代においての各尺度のプロフィールはほとんど同じパターンを示しているが、上記のように統計的に有意の差を示す尺度がみいだされた。しかしながら、尺度の粗点の平均値による値とすればわずかな差とも考えられ(たとえば最大で、50代から60代での、39項目で構成される尺度Fにおける差は0.87である)、今後丁寧な個別の事例などの検討も期待されるところであろう。

10歳間隔での人格特性の変化の様子を整

理したが、さらに5歳ごとの年齢差によって7グループに分けて以下に検討したい。10歳間隔の結果と同様の傾向になるとも思われるが、細かい変化を検討することができよう。

(6) 研究4 (5歳間隔の7グループによる10年間にわたる縦断的研究)

①方法

N社男性1111名について、2001年、2006年(5年後)、2010年(9年後)、2011年(10年後)のデータを用いた。各年代を5歳間隔に7グループに細分化し、10年間にわたる4時点での各尺度の粗点の平均値に基づいて検討した。7グループは次の分類となる。

1グループ：19-24歳が29-34歳(20代前半から30代前半)46名。

2グループ：25-29歳が35-39歳(20代後半から30代後半)131名。

3グループ：30-34歳が40-44歳(30代前半から40代前半)183名。

4グループ：35-39歳が45-49歳(30代後半から40代後半)132名。

5グループ：40-44歳が50-54歳(40代前半から50代前半)219名。

6グループ：45-49歳が55-59歳(40代後半から50代後半)278名。

7グループ：50-55歳が60-65歳(50代前半から60代前半)122名。

②結果および考察

1グループ：20代前半から30代前半の10年間にわたる4時点での標準得点の平均値を表12、同粗点の平均値を表13に、プロフィールを図6に示す。

2グループ：20代後半から30代後半の標準得点の平均値を表14に、粗点の平均値を表15に、プロフィールを図7に示す。

3グループ：30代前半から40代前半の標準得点の平均値を表16に、粗点の平均値を表17に、プロフィールを図8に示す。

4グループ：30代後半から40代後半の標

準得点の平均値を表18に、粗点の平均値を表19に、プロフィールを図9に示す。

5グループ：40代前半から50代前半の標準得点の平均値を表20に、粗点の平均値を表21に、プロフィールを図10に示す。

6グループ：40代後半から50代後半の標準得点の平均値を表22に、粗点の平均値を表23に、プロフィールを図11に示す。

7グループ：50代前半から60代前半の標準得点の平均値を表24に、粗点の平均値を表25に、プロフィールを図12に示す。

7グループに分けた各年代(5歳間隔)ごとに、10年間にわたる4時点での各尺度の粗点の平均値に基づいて1要因4水準の被験者内計画による分散分析をおこなった。さらに、Scheffe法による下位検定によって5%水準による多重比較を検討した。

この分散分析および多重比較の結果の要約を表26に示す。

各尺度の粗点による得点の平均値の有意差の概要を整理すると、つぎのようである。

1グループ：20代前半(2001年データ以下01と記す)・20代後半(2006年データ以下06と記す)・30代前半(2010年データ10とし2011年データ11と記す)においては、尺度Cでは20代前半では得点は高く、30代前半では得点は低くなっていた。尺度Fでは20代前半が得点が高くなっている。また尺度Eでは20代前半では得点が低くなっていた。20代前半では自分のネガティブな面を意識して内向的な傾向がみられる。

2グループ：20代後半(01)・30代前半(06)・30代後半(10・11)では、尺度1が20代後半よりも30代になるに従い得点が高くなる(10.05:10.55:10.76:10.87)こととなった。尺度5では10歳間隔では20代から30代において得点が増加するという有意な変化がみられたが、5歳間隔では2グループでの多重比較では有意とならなかった。

3グループ：30代前半(01)・30代後半(06)・

図6. 2011年29-34歳_男性_46名標準得点 (1グループ)

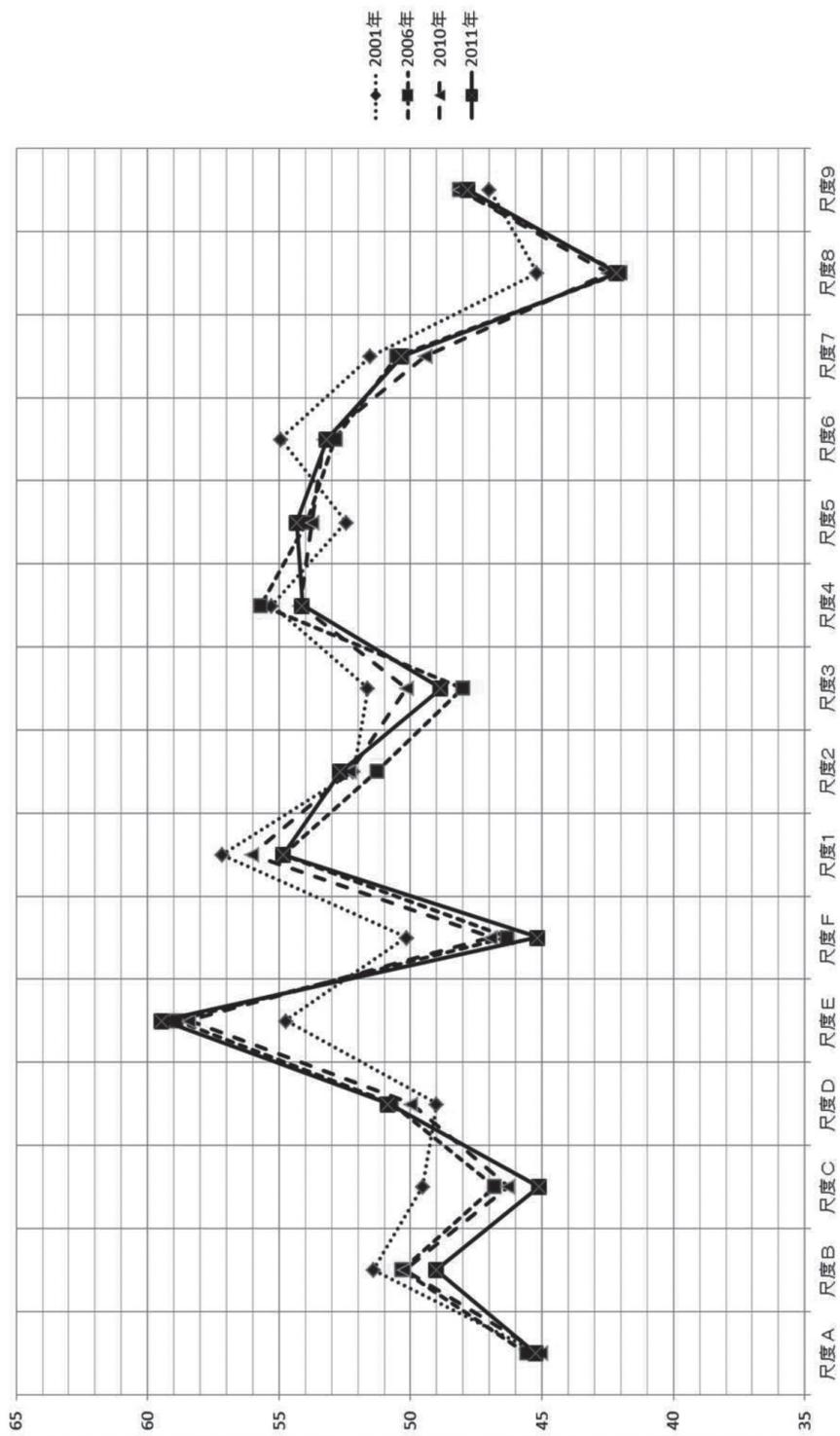


表 12. 19-24 歳から 29-34 歳の 10 年間の標準得点の平均と標準偏差 (1 グループ)

	平均				標準偏差			
	2001 年 19-24 歳	2006 年 24-29 歳	2010 年 28-33 歳	2011 年 29-34 歳	2001 年 19-24 歳	2006 年 24-29 歳	2010 年 28-33 歳	2011 年 29-34 歳
尺度 A	45.11	45.59	45.02	45.24	0.38	2.60	0.15	1.20
尺度 B	51.41	50.33	50.24	49.02	11.49	12.54	8.77	7.27
尺度 C	49.54	46.80	46.28	45.11	11.39	11.80	9.82	8.85
尺度 D	49.00	50.72	49.98	50.85	8.51	9.70	10.93	10.92
尺度 E	54.74	58.91	58.43	59.46	11.92	10.27	10.79	10.08
尺度 F	50.15	46.33	46.93	45.15	11.48	10.85	11.60	10.81
尺度 1	57.17	54.85	56.04	54.85	8.09	8.36	8.79	8.21
尺度 2	52.17	51.28	52.30	52.65	11.68	9.27	9.48	9.19
尺度 3	51.63	48.02	50.15	48.85	13.35	9.67	10.17	7.52
尺度 4	55.28	55.70	54.22	54.11	10.19	9.52	8.90	8.65
尺度 5	52.46	53.93	53.74	54.33	9.15	10.13	10.10	9.87
尺度 6	54.93	52.87	53.28	53.17	11.18	9.17	9.40	8.32
尺度 7	51.52	50.52	49.43	50.33	8.31	7.74	7.35	8.98
尺度 8	45.20	42.04	42.48	42.15	10.71	9.36	8.99	7.71
尺度 9	47.00	48.13	48.15	47.83	10.57	11.65	10.37	8.99
Mean	51.87	50.83	51.07	50.96				

表 13. 19-24 歳から 29-34 歳の 10 年間の粗点の平均と標準偏差 (1 グループ)

	平均				標準偏差			
	2001 年 19-24 歳	2006 年 24-29 歳	2010 年 28-33 歳	2011 年 29-34 歳	2001 年 19-24 歳	2006 年 24-29 歳	2010 年 28-33 歳	2011 年 29-34 歳
尺度 A	0.15	0.85	0.02	0.33	0.56	3.83	0.15	1.78
尺度 B	2.87	2.61	2.59	2.30	2.74	2.96	2.07	1.71
尺度 C	6.93	5.57	5.33	4.74	5.56	5.77	4.81	4.36
尺度 D	5.72	6.22	6.04	6.28	2.52	2.88	3.23	3.25
尺度 E	9.13	10.26	10.15	10.41	3.40	2.93	3.05	2.86
尺度 F	16.89	13.98	14.41	13.07	8.77	8.29	8.78	8.26
尺度 1	11.37	10.33	10.70	10.30	2.54	2.49	2.76	2.58
尺度 2	8.80	7.96	8.35	8.35	4.30	3.31	3.33	3.05
尺度 3	7.33	6.17	6.85	6.46	4.25	3.09	3.26	2.41
尺度 4	15.15	14.13	13.65	13.37	5.53	4.98	4.58	4.31
尺度 5	12.24	12.67	12.65	12.80	2.77	3.08	3.04	2.98
尺度 6	13.72	12.89	13.04	13.02	4.30	3.52	3.62	3.24
尺度 7	10.00	9.15	8.87	9.00	3.33	2.68	2.27	2.72
尺度 8	5.46	4.37	4.54	4.39	3.80	3.34	3.17	2.74
尺度 9	9.24	9.70	9.65	9.52	3.88	4.32	3.88	3.30

図7. 2011年35-39歳_男性_131名標準得点(2グループ)

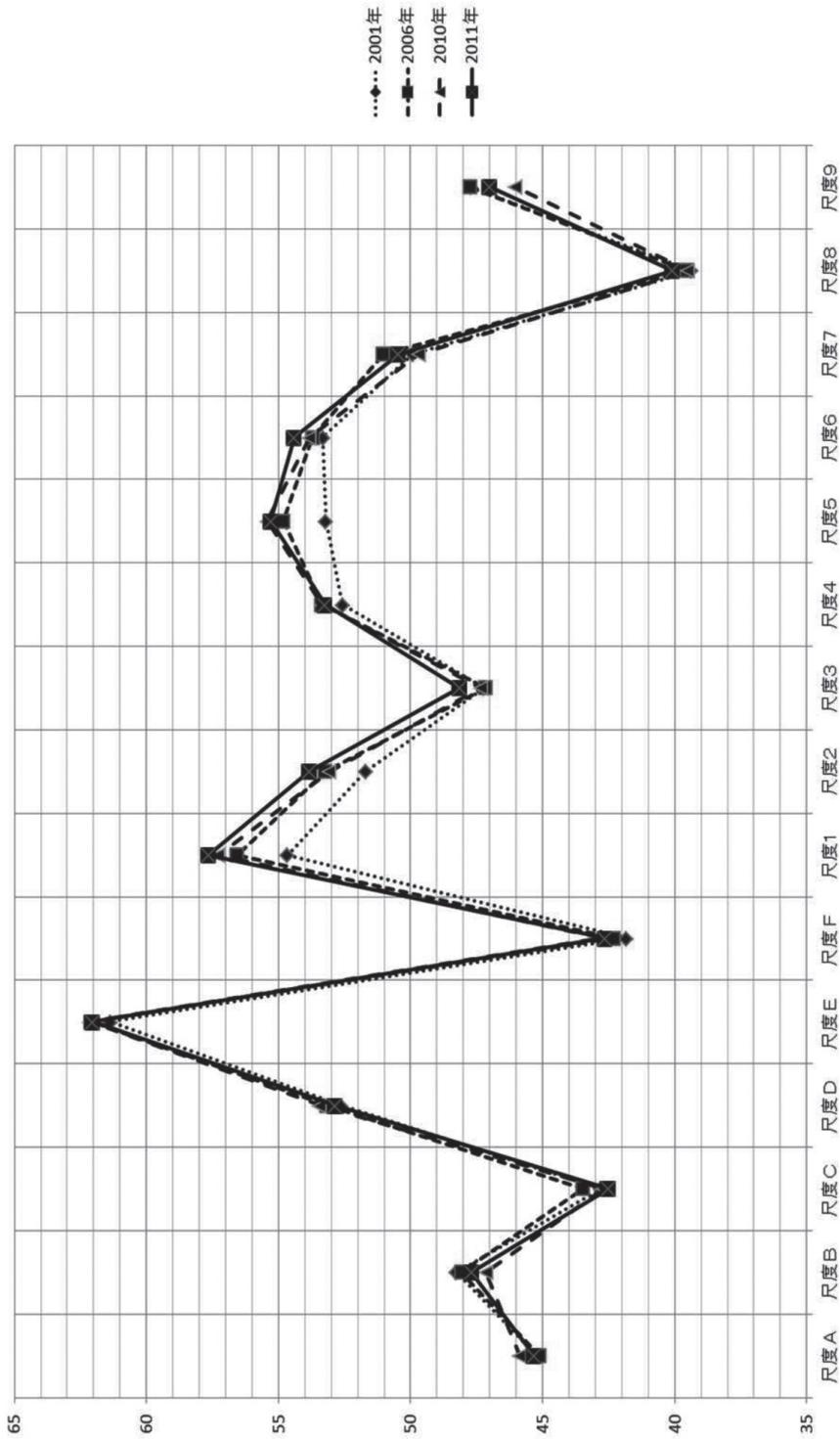


表 14. 25-29 歳から 35-39 歳の 10 年間の標準得点の平均と標準偏差（2 グループ）

	平均				標準偏差			
	2001 年 25-29 歳	2006 年 30-34 歳	2010 年 34-38 歳	2011 年 35-39 歳	2001 年 25-29 歳	2006 年 30-34 歳	2010 年 34-38 歳	2011 年 35-39 歳
尺度 A	45.21	45.13	45.87	45.32	1.27	0.99	5.40	3.15
尺度 B	48.26	48.09	47.15	47.70	11.37	9.12	9.51	12.46
尺度 C	42.79	43.47	42.70	42.51	8.44	9.17	8.74	9.15
尺度 D	52.65	53.18	53.44	52.86	9.89	10.32	9.93	10.23
尺度 E	61.37	62.11	62.14	62.04	10.70	10.19	10.33	10.69
尺度 F	41.82	42.32	42.76	42.64	8.85	8.93	9.73	9.89
尺度 1	54.66	56.58	57.29	57.65	7.99	8.11	8.15	8.69
尺度 2	51.71	53.24	53.08	53.85	10.29	9.61	9.69	9.61
尺度 3	47.23	47.16	47.34	48.15	9.58	10.34	8.84	10.20
尺度 4	52.58	53.37	53.37	53.24	8.67	9.37	9.14	9.05
尺度 5	53.21	54.83	55.43	55.30	10.07	11.09	10.64	10.31
尺度 6	53.32	53.70	53.82	54.41	11.28	9.27	9.91	10.13
尺度 7	49.93	51.05	49.70	50.47	9.75	8.13	7.96	8.42
尺度 8	39.37	39.54	39.50	40.08	9.25	7.75	8.56	9.74
尺度 9	47.73	47.76	46.03	47.01	10.34	9.45	9.08	10.74
Mean	49.96	50.82	50.63	51.18				

表 15. 25-29 歳から 35-39 歳の 10 年間の粗点の平均と標準偏差（2 グループ）

	平均				標準偏差			
	2001 年 25-29 歳	2006 年 30-34 歳	2010 年 34-38 歳	2011 年 35-39 歳	2001 年 25-29 歳	2006 年 30-34 歳	2010 年 34-38 歳	2011 年 35-39 歳
尺度 A	0.29	0.18	1.19	0.43	1.90	1.45	7.50	4.37
尺度 B	2.10	2.07	1.82	1.98	2.71	2.16	2.27	2.98
尺度 C	3.61	3.92	3.59	3.50	4.18	4.54	4.32	4.53
尺度 D	6.79	6.96	7.05	6.87	2.95	3.06	2.96	3.04
尺度 E	10.98	11.18	11.19	11.18	3.03	2.89	2.93	3.00
尺度 F	10.60	10.94	11.23	11.18	6.81	6.80	7.38	7.57
尺度 1	10.05	10.55	10.76	10.87	2.28	2.45	2.49	2.83
尺度 2	7.74	8.12	8.07	8.33	3.40	3.35	3.27	3.54
尺度 3	5.91	5.91	5.98	6.21	3.07	3.31	2.82	3.27
尺度 4	12.16	12.30	12.26	12.24	4.08	4.59	4.53	4.82
尺度 5	12.48	12.97	13.15	13.09	3.04	3.35	3.21	3.11
尺度 6	13.08	13.23	13.25	13.47	4.33	3.57	3.81	3.88
尺度 7	8.60	8.83	8.43	8.68	3.00	2.53	2.50	2.89
尺度 8	3.40	3.49	3.47	3.66	3.25	2.75	3.01	3.47
尺度 9	9.53	9.52	8.88	9.21	3.84	3.49	3.35	3.99

図8. 2011年40-44歳_男性_183名標準得点(3グループ)

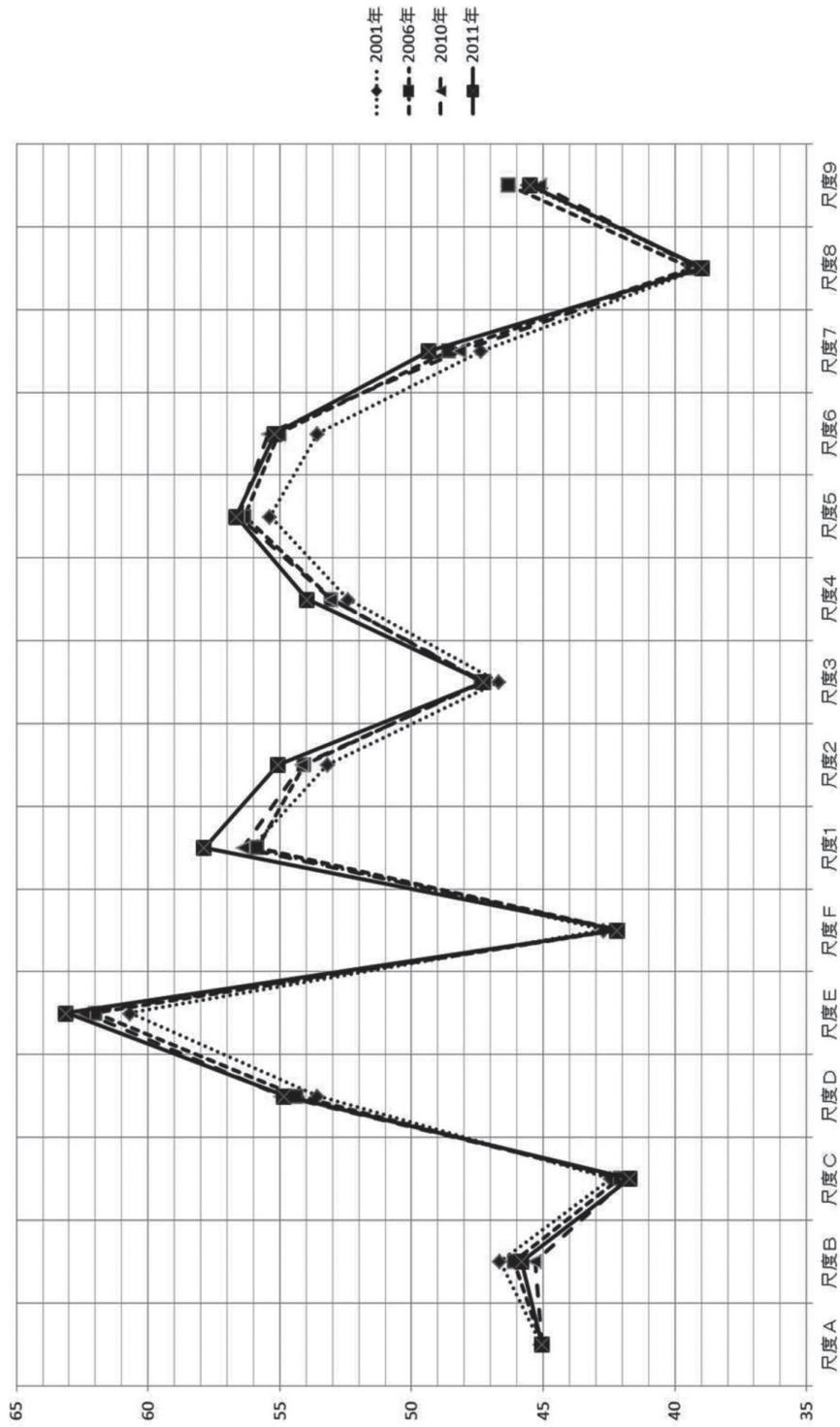


表 16. 30-34 歳から 40-44 歳の 10 年間の標準得点の平均と標準偏差（3グループ）

	平均				標準偏差			
	2001 年 30-34 歳	2006 年 35-39 歳	2010 年 39-43 歳	2011 年 40-44 歳	2001 年 30-34 歳	2006 年 35-39 歳	2010 年 39-43 歳	2011 年 40-44 歳
尺度 A	45.10	45.06	45.04	45.05	0.36	0.35	0.21	0.22
尺度 B	46.64	46.11	45.32	45.82	9.68	9.55	5.69	7.09
尺度 C	42.45	42.10	41.80	41.72	8.38	8.44	7.40	7.17
尺度 D	53.57	54.37	54.96	54.83	9.76	10.48	10.46	9.86
尺度 E	60.69	62.02	62.43	63.11	10.84	10.29	9.63	9.63
尺度 F	42.70	42.18	42.17	42.18	10.45	10.80	10.15	10.35
尺度 1	56.08	55.86	56.39	57.86	8.13	8.57	8.25	8.71
尺度 2	53.19	54.08	54.16	55.08	8.71	9.07	8.66	8.31
尺度 3	46.70	47.36	47.25	47.25	7.97	9.25	6.84	7.81
尺度 4	52.42	53.04	53.07	53.96	9.36	8.86	9.13	8.05
尺度 5	55.37	56.34	56.57	56.65	9.76	10.03	10.17	10.22
尺度 6	53.57	55.04	55.42	55.19	9.36	9.61	9.65	9.52
尺度 7	47.36	48.58	48.17	49.34	8.96	9.29	8.41	8.76
尺度 8	39.01	39.36	39.12	38.95	7.69	8.01	6.56	7.14
尺度 9	45.59	46.32	45.12	45.50	8.56	9.20	8.26	9.06
Mean	49.89	50.67	50.57	51.08				

表 17. 30-34 歳から 40-44 歳の 10 年間の粗点の平均と標準偏差（3グループ）

	平均				標準偏差			
	2001 年 30-34 歳	2006 年 35-39 歳	2010 年 39-43 歳	2011 年 40-44 歳	2001 年 30-34 歳	2006 年 35-39 歳	2010 年 39-43 歳	2011 年 40-44 歳
尺度 A	0.12	0.09	0.05	0.05	0.51	0.57	0.24	0.25
尺度 B	1.72	1.60	1.40	1.52	2.31	2.27	1.37	1.70
尺度 C	3.43	3.27	3.14	3.08	4.13	4.18	3.68	3.59
尺度 D	7.08	7.31	7.49	7.46	2.90	3.13	3.11	2.93
尺度 E	10.78	11.17	11.29	11.47	3.08	2.91	2.72	2.72
尺度 F	11.27	10.83	10.83	10.88	8.04	8.28	7.80	7.96
尺度 1	10.53	10.34	10.48	10.84	2.44	2.69	2.49	2.79
尺度 2	8.31	8.40	8.38	8.59	2.92	3.09	2.87	2.96
尺度 3	5.75	5.96	5.92	5.92	2.55	2.95	2.19	2.49
尺度 4	12.32	12.17	12.05	12.23	4.57	4.52	4.31	4.09
尺度 5	13.11	13.42	13.48	13.51	2.95	3.04	3.07	3.08
尺度 6	13.18	13.71	13.89	13.79	3.58	3.67	3.71	3.65
尺度 7	7.91	8.09	7.92	8.17	2.62	2.76	2.33	2.43
尺度 8	3.27	3.42	3.29	3.25	2.71	2.82	2.35	2.52
尺度 9	8.70	8.98	8.52	8.71	3.12	3.37	3.03	3.35

図9. 2011年45-49歳_男性_132名標準得(4グループ)

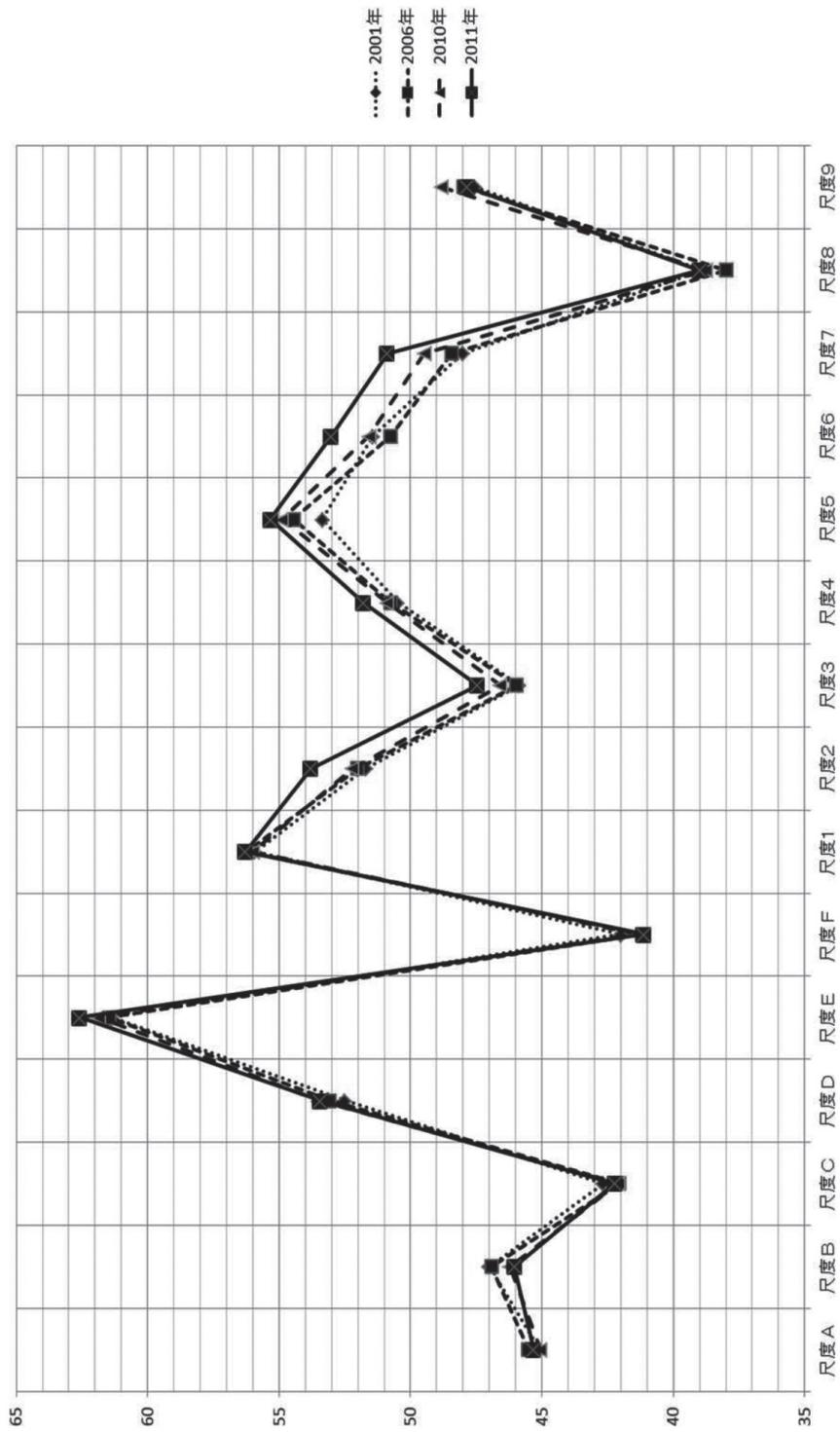


表 18. 35-39 歳から 45-49 歳の 10 年間の標準得点の平均と標準偏差（4 グループ）

	平均				標準偏差			
	2001 年 35-39 歳	2006 年 40-44 歳	2010 年 44-48 歳	2011 年 45-49 歳	2001 年 35-39 歳	2006 年 40-44 歳	2010 年 44-48 歳	2011 年 45-49 歳
尺度 A	45.09	45.52	45.05	45.32	0.34	3.42	0.31	3.14
尺度 B	47.00	46.92	46.22	46.05	9.63	8.01	7.12	6.93
尺度 C	42.67	42.05	42.11	42.23	8.18	6.88	7.48	8.08
尺度 D	52.50	53.08	53.49	53.43	9.52	10.23	9.73	10.05
尺度 E	61.37	61.47	61.86	62.59	9.39	9.46	9.86	9.62
尺度 F	42.01	41.19	41.39	41.11	10.09	9.31	9.34	9.23
尺度 1	55.93	56.23	56.01	56.28	8.03	7.97	8.06	8.60
尺度 2	51.70	52.01	52.20	53.80	8.22	7.94	8.02	9.40
尺度 3	45.87	45.96	46.58	47.45	9.02	7.88	7.72	9.06
尺度 4	50.49	50.77	50.89	51.80	8.33	8.93	8.50	9.00
尺度 5	53.36	54.46	54.89	55.33	9.79	10.29	9.27	10.00
尺度 6	51.43	50.75	51.58	53.02	10.21	9.97	9.03	9.28
尺度 7	48.02	48.45	49.47	50.89	7.95	8.60	8.81	8.78
尺度 8	38.90	37.99	38.75	39.00	7.91	5.66	6.86	7.85
尺度 9	47.55	47.98	48.83	47.83	9.19	8.63	9.12	8.79
Mean	49.27	49.45	49.90	50.58				

表 19. 35-39 歳から 45-49 歳の 10 年間の粗点の平均と標準偏差（4 グループ）

	平均				標準偏差			
	2001 年 35-39 歳	2006 年 40-44 歳	2010 年 44-48 歳	2011 年 45-49 歳	2001 年 35-39 歳	2006 年 40-44 歳	2010 年 44-48 歳	2011 年 45-49 歳
尺度 A	0.13	0.72	0.07	0.45	0.53	4.84	0.47	4.37
尺度 B	1.81	1.79	1.63	1.58	2.31	1.92	1.70	1.67
尺度 C	3.58	3.23	3.29	3.33	4.07	3.42	3.71	4.01
尺度 D	6.77	6.94	7.05	7.05	2.84	3.04	2.90	2.99
尺度 E	10.99	11.01	11.12	11.34	2.67	2.68	2.80	2.73
尺度 F	10.66	10.06	10.18	10.02	7.72	7.17	7.14	7.14
尺度 1	10.41	10.52	10.42	10.42	2.56	2.52	2.55	2.76
尺度 2	7.72	7.79	7.83	8.21	3.06	2.76	2.99	3.47
尺度 3	5.48	5.52	5.70	6.01	2.88	2.53	2.47	2.90
尺度 4	11.30	11.41	11.34	11.49	4.06	4.19	4.49	4.75
尺度 5	12.51	12.83	12.97	13.10	2.95	3.11	2.80	3.01
尺度 6	12.36	12.09	12.44	12.97	3.91	3.82	3.46	3.57
尺度 7	8.02	8.14	8.39	8.72	2.37	2.13	2.55	2.60
尺度 8	3.25	2.95	3.20	3.30	2.81	1.99	2.41	2.78
尺度 9	9.40	9.58	9.90	9.55	3.38	3.18	3.35	3.24

図 10. 2011 年 50-54 歳_男性_219 名標準得点 (5グループ)

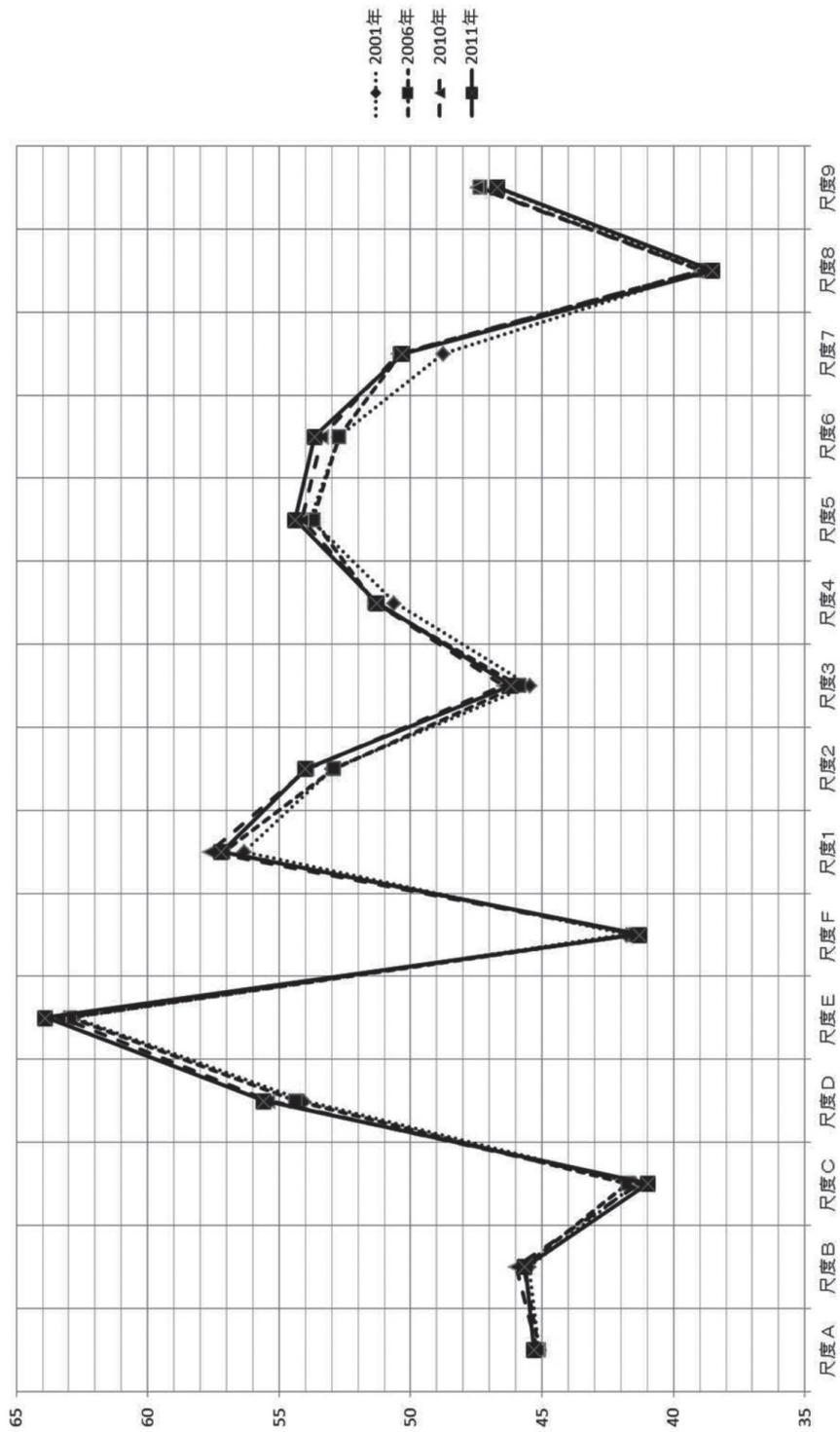


表 20. 40-44 歳から 50-54 歳の 10 年間の標準得点の平均と標準偏差（5 グループ）

	平均				標準偏差			
	2001 年 40-44 歳	2006 年 45-49 歳	2010 年 49-53 歳	2011 年 50-54 歳	2001 年 40-44 歳	2006 年 45-49 歳	2010 年 49-53 歳	2011 年 50-54 歳
尺度 A	45.11	45.13	45.17	45.30	0.44	0.80	1.11	1.76
尺度 B	45.50	45.69	46.00	45.65	6.67	7.53	7.06	6.97
尺度 C	41.44	41.74	41.32	40.97	7.71	8.02	7.88	7.07
尺度 D	54.06	54.39	55.43	55.58	10.41	10.16	10.04	9.84
尺度 E	62.82	62.96	63.32	63.89	10.47	10.14	9.41	9.51
尺度 F	41.79	41.43	41.43	41.30	10.11	9.73	9.94	9.63
尺度 1	56.33	57.12	57.63	57.19	8.24	7.73	9.12	8.84
尺度 2	52.98	52.91	53.93	53.99	9.77	8.79	9.71	8.65
尺度 3	45.46	45.89	46.46	46.18	9.84	8.70	10.02	8.71
尺度 4	50.63	51.37	51.36	51.29	8.98	8.89	9.01	8.64
尺度 5	53.80	53.71	54.13	54.40	10.38	9.44	9.42	9.59
尺度 6	52.72	52.72	53.37	53.65	10.01	9.18	9.15	9.12
尺度 7	48.77	50.39	50.46	50.31	8.13	7.77	8.49	7.71
尺度 8	38.84	38.95	38.94	38.52	7.32	7.25	7.87	7.98
尺度 9	46.74	47.37	47.47	46.70	9.05	8.48	9.45	8.47
Mean	49.59	50.06	50.42	50.24				

表 21. 40-44 歳から 50-54 歳の 10 年間の粗点の平均と標準偏差（5 グループ）

	平均				標準偏差			
	2001 年 40-44 歳	2006 年 45-49 歳	2010 年 49-53 歳	2011 年 50-54 歳	2001 年 40-44 歳	2006 年 45-49 歳	2010 年 49-53 歳	2011 年 50-54 歳
尺度 A	0.12	0.16	0.21	0.42	0.60	1.08	1.53	2.58
尺度 B	1.46	1.49	1.57	1.49	1.60	1.80	1.69	1.67
尺度 C	2.95	3.07	2.86	2.72	3.84	3.96	3.90	3.48
尺度 D	7.23	7.33	7.64	7.68	3.09	3.02	2.99	2.93
尺度 E	11.40	11.44	11.54	11.71	2.96	2.88	2.67	2.68
尺度 F	10.54	10.26	10.29	10.18	7.77	7.46	7.65	7.40
尺度 1	10.42	10.63	10.75	10.57	2.55	2.50	2.82	2.73
尺度 2	7.95	7.89	8.19	8.12	3.24	3.07	3.42	2.96
尺度 3	5.36	5.50	5.67	5.57	3.14	2.79	3.20	2.78
尺度 4	10.95	11.23	11.12	10.91	4.20	4.54	4.40	4.29
尺度 5	12.65	12.62	12.75	12.83	3.13	2.85	2.85	2.90
尺度 6	12.84	12.84	13.10	13.19	3.84	3.52	3.52	3.52
尺度 7	8.05	8.52	8.49	8.36	2.40	2.32	2.45	2.26
尺度 8	3.22	3.26	3.24	3.11	2.60	2.58	2.77	2.83
尺度 9	9.14	9.39	9.42	9.13	3.32	3.12	3.48	3.10

図 11. 2011 年 55-59 歳_男性_278 名標準得点 (6グループ)

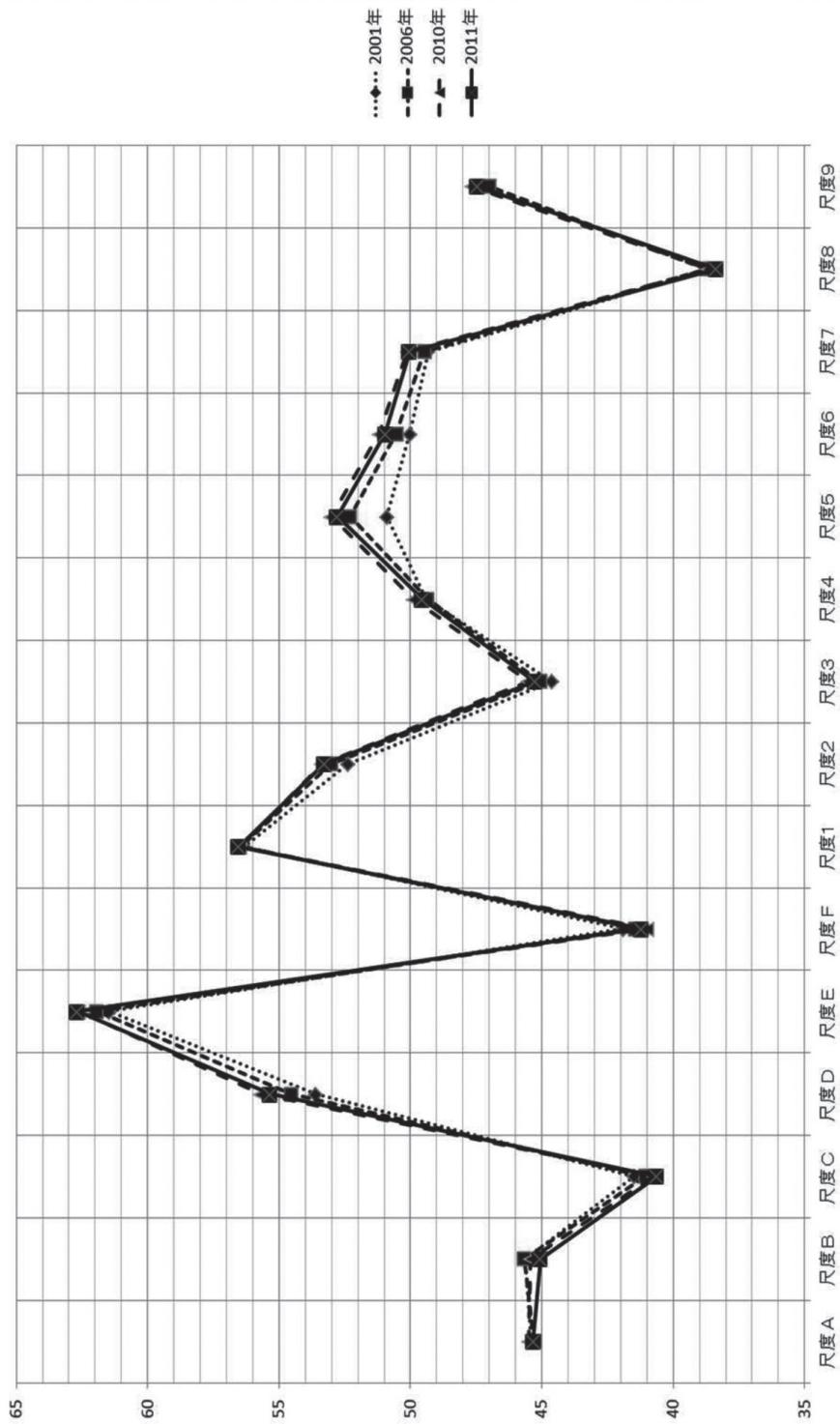


表 22. 45-49 歳から 55-59 歳の 10 年間の標準得点の平均と標準偏差（6 グループ）

	平均				標準偏差			
	2001 年 45-49 歳	2006 年 50-54 歳	2010 年 54-58 歳	2011 年 55-59 歳	2001 年 45-49 歳	2006 年 50-54 歳	2010 年 54-58 歳	2011 年 55-59 歳
尺度 A	45.40	45.31	45.49	45.33	3.06	2.34	3.30	2.69
尺度 B	45.64	45.68	45.43	45.06	6.49	5.97	5.86	5.64
尺度 C	41.49	41.06	40.74	40.63	6.77	7.21	6.76	6.32
尺度 D	53.62	54.55	55.71	55.35	10.79	10.94	10.80	10.37
尺度 E	61.47	61.94	62.62	62.69	10.31	9.98	9.74	9.82
尺度 F	41.90	41.44	41.01	41.22	9.30	9.06	8.86	8.77
尺度 1	56.33	56.47	56.47	56.53	7.61	7.49	8.09	8.15
尺度 2	52.38	53.04	53.37	53.29	8.05	8.77	8.67	8.20
尺度 3	44.63	45.08	45.51	45.27	7.90	7.44	7.69	7.55
尺度 4	49.41	49.36	49.90	49.56	8.09	9.05	8.22	8.10
尺度 5	50.89	52.30	53.02	52.79	10.27	9.94	10.68	10.36
尺度 6	50.03	50.54	51.19	50.96	9.82	9.41	9.75	9.22
尺度 7	49.33	49.47	50.12	50.03	8.30	7.83	8.34	7.72
尺度 8	38.60	38.73	38.66	38.37	6.18	6.24	6.90	6.17
尺度 9	47.31	47.00	47.66	47.45	8.77	8.74	8.79	8.38
Mean	48.78	49.12	49.52	49.35				

表 23. 45-49 歳から 55-59 歳の 10 年間の粗点の平均と標準偏差（6 グループ）

	平均				標準偏差			
	2001 年 45-49 歳	2006 年 50-54 歳	2010 年 54-58 歳	2011 年 55-59 歳	2001 年 45-49 歳	2006 年 50-54 歳	2010 年 54-58 歳	2011 年 55-59 歳
尺度 A	0.53	0.44	0.68	0.45	4.26	3.27	4.60	3.76
尺度 B	1.47	1.47	1.43	1.34	1.57	1.44	1.41	1.37
尺度 C	2.96	2.75	2.59	2.51	3.37	3.59	3.35	3.14
尺度 D	7.09	7.37	7.73	7.61	3.20	3.26	3.22	3.09
尺度 E	11.02	11.15	11.35	11.37	2.92	2.84	2.76	2.77
尺度 F	10.63	10.29	9.96	10.10	7.14	6.94	6.77	6.70
尺度 1	10.53	10.52	10.47	10.47	2.30	2.28	2.42	2.40
尺度 2	7.94	8.08	8.09	8.05	2.64	2.71	2.76	2.57
尺度 3	5.08	5.24	5.37	5.29	2.53	2.38	2.47	2.42
尺度 4	10.84	10.69	10.72	10.56	3.76	4.02	3.68	3.54
尺度 5	11.78	12.20	12.41	12.35	3.11	3.00	3.22	3.12
尺度 6	11.79	11.99	12.24	12.14	3.75	3.58	3.72	3.52
尺度 7	8.40	8.38	8.48	8.45	2.34	2.23	2.28	2.14
尺度 8	3.13	3.17	3.15	3.05	2.19	2.21	2.45	2.19
尺度 9	9.32	9.24	9.49	9.40	3.23	3.22	3.24	3.08

図 12. 2011 年 60-65 歳_男性_122 名標準得点 (7グループ)

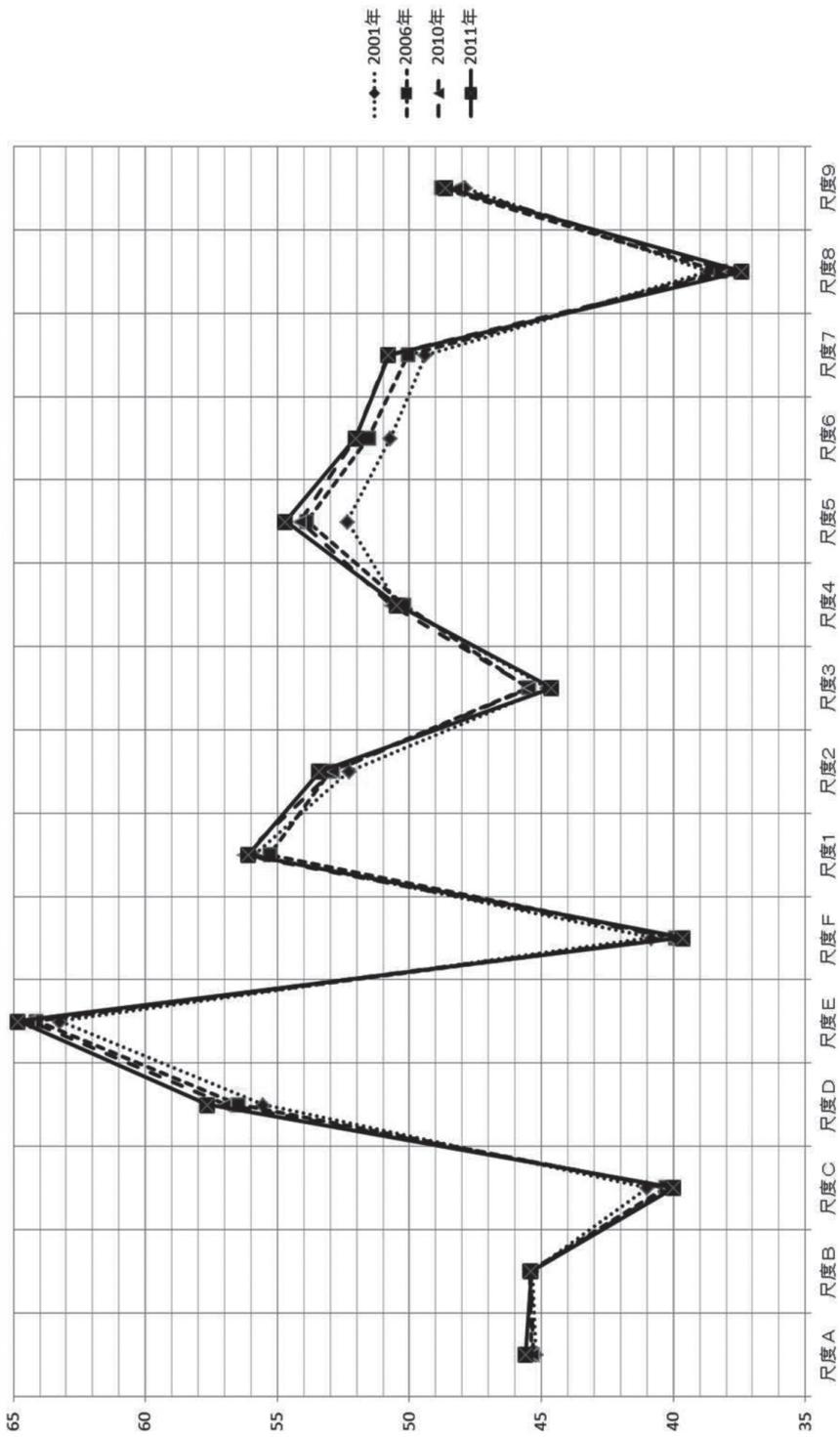


表 24. 50-55 歳から 60-65 歳の 10 年間の標準得点の平均と標準偏差（7グループ）

	平均				標準偏差			
	2001 年 50-55 歳	2006 年 55-60 歳	2010 年 59-64 歳	2011 年 60-65 歳	2001 年 50-55 歳	2006 年 55-60 歳	2010 年 59-64 歳	2011 年 60-65 歳
尺度 A	45.20	45.39	45.32	45.59	0.67	1.71	1.70	3.81
尺度 B	45.34	45.44	45.42	45.39	6.95	6.12	5.67	5.67
尺度 C	40.99	40.29	40.15	39.98	8.55	6.55	6.67	6.31
尺度 D	55.55	56.49	56.99	57.65	11.00	9.79	9.83	9.23
尺度 E	63.25	64.13	64.39	64.81	10.63	9.01	9.69	8.60
尺度 F	40.83	39.93	40.11	39.65	9.98	8.90	8.49	8.26
尺度 1	55.89	55.30	56.27	56.11	8.52	8.71	9.43	8.98
尺度 2	52.29	53.01	52.91	53.40	8.23	8.24	8.55	7.42
尺度 3	44.76	45.50	45.44	44.61	7.38	8.05	7.93	7.10
尺度 4	50.44	50.22	50.70	50.48	8.59	8.22	8.70	8.20
尺度 5	52.34	53.89	54.15	54.69	10.36	9.46	9.77	9.14
尺度 6	50.72	51.54	52.03	52.02	8.97	8.79	9.34	9.15
尺度 7	49.39	50.06	50.80	50.78	7.28	8.87	7.27	7.73
尺度 8	38.68	38.21	37.85	37.39	7.11	6.87	6.11	5.65
尺度 9	47.89	48.80	48.20	48.62	8.80	9.12	8.98	8.96
Mean	49.16	49.60	49.84	49.75				

表 25. 50-55 歳から 60-65 歳の 10 年間の粗点の平均と標準偏差（7グループ）

	平均				標準偏差			
	2001 年 50-55 歳	2006 年 55-60 歳	2010 年 59-64 歳	2011 年 60-65 歳	2001 年 50-55 歳	2006 年 55-60 歳	2010 年 59-64 歳	2011 年 60-65 歳
尺度 A	0.29	0.57	0.44	0.83	1.01	2.54	2.49	5.36
尺度 B	1.40	1.45	1.45	1.43	1.67	1.46	1.34	1.36
尺度 C	2.68	2.33	2.28	2.20	4.25	3.28	3.36	3.16
尺度 D	7.67	7.94	8.10	8.30	3.28	2.92	2.93	2.75
尺度 E	11.50	11.78	11.84	11.98	3.02	2.54	2.73	2.42
尺度 F	9.80	9.12	9.32	8.93	7.68	6.82	6.53	6.41
尺度 1	10.25	10.01	10.26	10.18	2.52	2.61	2.77	2.60
尺度 2	7.67	7.77	7.70	7.78	2.65	2.76	2.67	2.38
尺度 3	5.14	5.37	5.35	5.09	2.35	2.55	2.53	2.28
尺度 4	10.78	10.41	10.56	10.32	4.36	4.00	4.22	3.94
尺度 5	12.22	12.66	12.75	12.92	3.12	2.84	2.95	2.76
尺度 6	12.04	12.39	12.56	12.56	3.46	3.37	3.57	3.49
尺度 7	8.18	8.25	8.44	8.37	2.26	2.62	2.26	2.22
尺度 8	3.14	3.01	2.87	2.70	2.54	2.42	2.15	2.00
尺度 9	9.59	9.89	9.66	9.84	3.24	3.36	3.32	3.30

表 26. 5 歳間隔の 7 グループにおける 10 年間にわたる縦断的研究の有意差検定の結果要約

	分散分析			多重比較	
	F値	有意水準	MSe		
20 代 から 30 代	1 G : 20 代前半から 30 代前半 $F(3,135)$				
	尺度C	4.65	0.0040 **	8.554	01・06・10 > 11, 01 > 06・10・11
	尺度E	5.55	0.0013 **	2.813	11・06・10 > 01
	尺度F	7.84	<.0001 ***	15.691	01 > 10・06・11
	尺度 1	3.40	0.0196 *	3.343	— (01 が高い傾向)
	尺度 4	2.80	0.0425 *	10.077	— (01 が高い傾向)
	尺度 7	2.98	0.0335 *	4.003	— (01 が高い傾向)
	尺度 8	2.74	0.0459 *	4.485	— (01 が高い傾向)
	2 G : 20 代後半から 30 代後半 $F(3,390)$				
	尺度 1	6.87	0.0002 ***	2.505	11・10・06 > 01, 11・10 > 06・01
尺度 5	3.01	0.0302 *	3.997	— (年とともに高い傾向)	
尺度 9	2.24	0.0834 +	5.544	—	
30 代 から 40 代	3 G : 30 代前半から 40 代前半 $F(3,546)$				
	尺度D	2.48	0.0602 +	2.612	—
	尺度E	6.41	0.0003 ***	2.467	11・10・06 > 01, 11・10 > 06・01
	尺度 1	3.28	0.0208 *	2.522	11 > 01・10・06, 11・01・10 > 06
	尺度 6	3.20	0.0232 *	5.717	10・11・01 > 01, 10 > 11・06・01
	4 G : 30 代後半から 40 代後半 $F(3,393)$				
	尺度 3	2.33	0.0736 +	3.321	— (年とともに高い傾向)
	尺度 5	2.72	0.0442 *	3.130	— (年とともに高い傾向)
	尺度 6	3.44	0.0169 *	5.207	11 > 10・01・06, 11・10・01 > 06
	尺度 7	4.55	0.0038 **	2.784	11 > 10・06・01, 11・10・06 > 01
40 代 から 50 代	5 G : 40 代前半から 50 代前半 $F(3,654)$				
	尺度D	5.03	0.0019 **	2.245	11・10・06 > 01, 11・10 > 06・01
	尺度E	2.39	0.0677 +	1.804	— (年とともに高い傾向)
	尺度 7	3.85	0.0095 **	2.646	06・10・11 > 01, 06・10 > 11・01
	6 G : 40 代後半から 50 代後半 $F(3,831)$				
	尺度C	4.08	0.0069 **	2.630	01 > 06・10・11, 01・06・10 > 11
	尺度D	10.55	<.0001 ***	2.068	10・11 > 06・01, 10 > 11・06 > 01
	尺度E	4.35	0.0048 *	1.775	11・10・06 > 01, 11・10 > 06・01
	尺度F	3.02	0.0290 *	7.605	01 > 06・11・10, 01・06・11 > 10
	尺度 5	8.62	<.0001 ***	2.626	10・11・06 > 01
尺度 6	2.69	0.0455 *	3.976	— (年とともに高い傾向)	
50 代 から 60 代	7 G : 50 代前半から 60 代前半 $F(3,363)$				
	尺度D	4.00	0.0080 **	2.157	11 > 10・06・01, 11・10・06 > 01
	尺度E	2.97	0.0319 *	1.637	11 > 10・06・01, 11・10・06 > 01
	尺度F	2.53	0.0568 +	6.815	— (年とともに低い傾向)
	尺度 5	4.00	0.0081 **	2.709	11 > 10・06・01, 11・10・06 > 01
	尺度 6	2.90	0.0348 *	1.514	01 > 06・10・11, 01・06・10 > 11

40代前半(10・11)では、尺度Eが40代前半は30代前半に比べて得点が高くなっている。尺度1は40代前半は得点が高く、30代前半も得点が高いが、相対的に一時的に30代後半では低くなっていた(10.53:10.34:10.47:10.84)。20代後半から40代前半にかけて尺度1は得点が高くなる傾向にあるが明確ではない。尺度6については40代後半で得点が高くなり30代前半が低いこととなった(13.18:13.71:13.86:13.80)。

4グループ:30代後半(01)・40代前半(06)・40代後半(10・11)については、尺度6では40代後半と30代後半が得点が高く、40代前半で一時的に低くなる様子を示した(12.36:12.09:12.44:13.00)。尺度5は年齢とともに得点が高くなる傾向が推察されるが多重比較では有意とならなかった。尺度7は10歳間隔では30代から40代で得点は高くなる方向であったが、5歳間隔では30代後半から40代後半にかけて得点が高くなった(8.01:8.14:8.39:8.72)。

5グループ:40代前半(01)・40代後半(06)・50代前半(10・11)では変化をみせる尺度は少ない。尺度Dでは40代前半が得点は低く50代前半が得点が高くなっていた。尺度7では40代前半が得点は低く40代後半が高いといえる(8.05:8.52:8.49:8.34)。尺度7は30代後半からの4グループでも、40代前半からの5グループでも、40代後半が得点が高いこととなった。尺度Eは年齢とともに得点が高くなる傾向が示唆された。

6グループ:40代後半(01)・50代前半(06)・50代後半(10・11)では、尺度Cは40代後半は得点が高く50代後半は低くなっていた。尺度Fでも40代後半は得点が高く50代後半は低くなっていた。尺度D・Eは50代後半が得点が高くなっているといえる。尺度5では40代後半が得点は低いこととなった。尺度6は年齢とともに得点が高くなる傾向は推察されたが多重比較では有意とならなかった。

7グループ:50代前半(01)・50代後半(06)・60代前半(10・11)では、尺度Dにおいて50代前半は得点が低く、60代前半は高くなっていた。尺度Eにおいても50代前半は得点が低く、60代前半は高くなっていた。尺度Fは年齢とともに得点は低くなる傾向があった。尺度5では50代前半は得点が低く60代前半は高くなっていた。尺度8は50代前半で得点が高く、60代前半は低くなっていた。

以上のことより、大きな傾向は10歳間隔と同様であるが、5歳間隔でグループ化すると各年代の前半・後半とで有意差のみられる尺度には違いが示された。特徴を整理してみる。

20代前半から30代前半にかけての変化より、19-24歳時点でのプロフィール(図6)にあるように、人数は46名と少ないが、すでにふれたように相対的ではあるが尺度Cの得点が高く、尺度Fも高い、また尺度Eの得点は低い。尺度1・4・7・8の得点が高い傾向にあり、尺度6の得点が尺度5よりも高い。これは青年期の名残とも考えられる。やや尺度Bの得点が高い。自信が少なく(尺度C・F高)、やや気持ちも落ち着かず(尺度B高)、心配を多く感じる面もあり(尺度1・4高)、自己流のやり方で(尺度7高)、自分の中で抱えている(尺度6・8高)傾向とも考えられる。

20代後半から40代後半にかけて、尺度Eの得点は上昇する傾向を示したが、尺度Fはあまり変化していない。尺度1・3・6などに変化がみられる。また尺度7の得点が高くなる傾向を示したのが特徴的といえよう。尺度5は年齢とともに得点が高くなる傾向を示したが、多重比較で有意差は示されなかった。

とくに40代後半から自己に対する自信や安定感が増し、価値観の強さや、考え方・思いの方向がはっきりしてくる傾向がみられる。

本研究では5歳間隔ごとに重なりがあるので、まだ未整理の部分もあり今後の検討を要すると思われるが、上記のように3つの時期にまとめてみたい。簡潔に記すとつぎのようである。

i) 20代前半の、相対的に自信が少なく、いろいろなことを自分のなかに抱え込みがちな時期。

ii) 20代後半から30代後半そして40代後半への、自分の思いの方向を探りながら、自分のやり方で対処を試みている時期。(なお、40代前半から50代前半では、尺度D・7に変化がみられるが他の尺度に変化はみられない。)

iii) 40代後半から60代前半の、自信や安定感を持ち自分の考えの方向も固まってきている時期。

さて、Levinson (1978, pp.56-63, 南博訳, 1992, pp.110-122)によれば、17歳以下は児童期と青年期になるが、成人期の発達段階をほぼ5年間隔で説明している。

17-22歳の「成人への過渡期」、22-28歳の「おとなの世界に入る時期」、28-33歳の「30歳の過渡期」、33-40歳の「一家を構える時期」、ここまでが「成人前期」となる。つぎに、40-45歳の「人生半ばの過渡期」を経て、45-50歳の「中年に入る時期」、50-55歳の「50歳の過渡期」、55-60歳の「中年の最盛期」となる。これらは「中年期」である。その後、60-65歳は「老年への過渡期」となり、「老年期」へとすすむ。Levinson (1978, pp.19-20, 南博訳, 1992, p.48)は、ある発達期から次の発達期への過渡期は4年ないし5年かかる、しかし3年以下ということはなく、また6年以上かかるということもまずないとしている。

本研究では「成人前期」での年齢の区切りは数年異なるが、「中年期」からの年齢の区切りは同様である。ここであえて対応させるならば「成人への過渡期」「おとなの世界に

入る時期」は、自信が相対的に少なく、自分のなかにこもる傾向がみられた。また、45歳以降の「中年期」においては、自己の思いの方向がはっきりしてくるという傾向であった。「老人への過渡期」においても、本研究で用いた尺度には心理的に不安定な傾向はみられなかった。なお「人生半ばの過渡期」についても、平均値での指標では大きな変化は示されていないと考えられる。

また、Super and Bohn (1970, pp.134-140, 藤本・大沢訳, 1973, pp.208-218)は職業生活の諸段階を5つに分けている。1段階目は成長段階(誕生-14歳)で、空想期(4-10歳)・興味期(11-12歳)・能力期(13-14歳)からなる。2段階目は探索段階(15-24歳)で、暫定期(15-17歳)・移行期(18-21歳)・試行期(22-24歳)からなる。3段階目は確立段階(25-44歳)で、移行期(25-30歳)・安定期(31-44歳)からなる。4段階目は維持段階(45-64歳)である。5段階目は下降期(65歳以降)で、減速期(65-70歳)・引退期(71歳以降)となる。本研究で整理した上記の3段階は、20代前半が探索段階の試行期に、20代後半から40代前半は確立段階に、40代後半以降は維持段階に、ちょうど対応すると思われる。TPIによる変化の傾向からみいだした成人期の年齢段階と、Superによる段階とが同様であることは興味深い。

なお、ここで各尺度の標準得点の平均値によるプロフィールを確認すると20代前半でのプロフィール以外では、プロフィールのパターンはほとんど同一である。

(7) 研究5 (N社2011年および他4集団との比較)

①方法

N社2011年および他4集団との比較をおこなった。

N社の回答者は1111名と多人数であり、会社に勤務する男子成人の一般的な傾向を示

しているかもしれない。そこで、他の集団との比較を試み検討することとした。

企業としては2社である。

D社は広告企業であり、男性1503名（平均年齢29.85歳）。

T社は公益企業であり、男性2886名（平均年齢38.19歳）。

大学生としては2校である。

J大は運動部員であり、男性270名（平均年齢20.07歳）。

T大は一般文系大学生であり、男性2875名（平均年齢19.18歳）。

②結果および考察

各尺度ごとの5集団の標準得点の平均値を表27に、粗点の平均値を表28に、5集団のプロフィールを図13に示す。各尺度ごとに5集団の粗点の平均値により、1要因5水準の分散分析をおこなった。さらにTukey法による多重比較をおこなった。検定の結果を表29に示す。

有効性尺度についてみると尺度Aでは、T大が得点が高く、企業ではD社が得点が高い。

尺度Bでは、J大・T大が企業3社より得点が高く、D社は他の2社よりも得点が高い。

尺度Cでは、T大が他4集団より得点が高く、J大も3社より高い。N社は一番低い。

尺度Dでは、N社が他4集団より得点が高く、J大・T大は他集団より得点が高い。

尺度Eでは、N社が他4集団より得点が高く、J大・T大は低く、とくにT大は低い。

青年期であるJ大・T大は、尺度B・Cの得点が高く、尺度Dの得点が高い。企業では、N社が尺度Cの得点が高く、尺度D・Eが高い。尺度Bにおいて、D社がやや得点が高いのが興味深い。

尺度Fでは、T大が他4集団より得点が高く、企業ではT社が得点が高い。N社は低く、とくにD社は得点が高い。

基本尺度では、尺度1はT社・N社が得点が高く、D社は得点が高い。尺度2はT大は

他4集団より得点が高く、D社が低い。尺度3はT大・J大が企業より得点が高い。尺度4はT大・J大が企業より得点が高い。企業ではT社が高い。尺度5はJ大が一番得点が高く、つぎにN社・D社となり、T大やT社は得点が高い。尺度6はJ大が一番得点が高く、D社・T社が低い。尺度7はT大・J大が企業3社より得点が高い。T社よりもN社・D社の得点が高い。尺度8はJ大・T大が企業3社よりも得点が高い。N社は低い。尺度9はD社が他4集団より得点が高い。T社が低い。

大学生集団が相当する青年期のプロフィールは、成人期に比べると全体的にプロフィールの得点が高い傾向があるとされるが、必ずしもそうはならなかった。大学生でも、たとえば尺度5・6でみられるように、運動部の学生は一般学生と比べて得点が高い傾向にあり、かなり強気で思いが強いと推察される。T大では尺度5の得点が低くなっている。企業人でも、N社、T社、D社は特徴が異なり、尺度5では、N社・D社に比べて、T社がT大よりも得点が高くなっている。

N社は、繰り返しとなるがすでに述べたように品質管理を重視するメーカーで、自信を持ち（尺度C・F低）まじめで固い印象（尺度D・E・5・6高）があり、完全を気にする気持ちがみられ（尺度1高）、対人関係上はやや甘い雰囲気だが（尺度2高）、割り切りはよい（尺度8低）。

T社は、地味な公益企業で、ややおとなしく（尺度F高・9低）、細かいことに気を配る（尺度1・4高）傾向がみられ、現業部門が多いからか現実対応的（尺度5低）である。筆者の臨床経験からすると、尺度5が低い場合は、やや受け身で不適應感を持つ場合も考えられる。

D社は、尺度Bが企業のなかでは高く、気分の変化・気分の動きが強く、またユニークなアイデアを思いつく傾向と考えられ、尺度Fが低く、エネルギーを外に表現でき、尺度

図 13. N社2011年と他集団比較

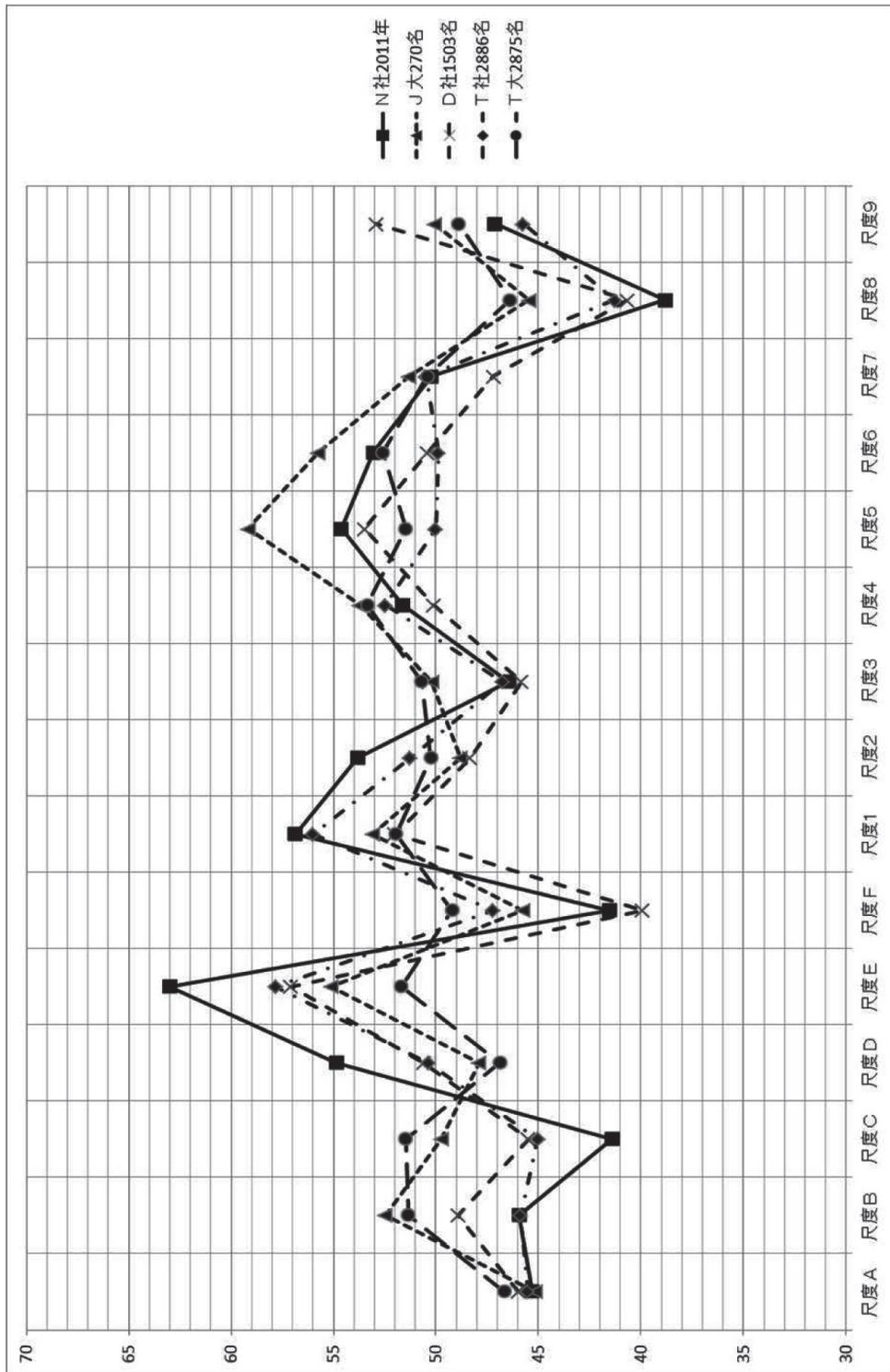


表 27. 各尺度の標準得点の平均と標準偏差による他集団比較

	平均					標準偏差				
	N社 2011年 n=1111	J大 270名 n=270	D社 1503名 n=1503	T社 2886名 n=2886	T大 2875名 n=2875	N社 2011年 n=1111	J大 270名 n=270	D社 1503名 n=1503	T社 2886名 n=2886	T大 2875名 n=2875
尺度 A	45.30	45.15	45.99	45.52	46.67	2.53	0.46	4.78	2.59	7.72
尺度 B	45.93	52.46	48.91	45.88	51.34	7.50	10.96	8.76	6.67	10.45
尺度 C	41.40	49.74	45.48	45.02	51.48	7.38	9.69	8.69	8.35	10.49
尺度 D	54.85	47.90	50.60	50.37	46.88	10.12	8.94	9.15	9.75	8.71
尺度 E	63.01	55.12	57.08	57.83	51.68	9.73	9.42	9.55	9.71	10.11
尺度 F	41.54	45.76	39.91	47.21	49.22	9.48	10.04	9.09	10.65	11.23
尺度 1	56.87	53.09	51.99	56.00	51.95	8.61	8.11	8.03	7.96	8.64
尺度 2	53.83	48.79	48.33	51.27	50.26	8.59	9.86	9.32	8.82	10.35
尺度 3	46.45	50.21	45.83	46.76	50.71	8.39	9.93	8.93	8.35	10.18
尺度 4	51.62	53.71	50.12	52.47	53.35	8.60	9.95	9.40	8.96	10.37
尺度 5	54.61	59.17	53.48	50.00	51.47	10.05	9.43	9.94	10.82	9.46
尺度 6	53.05	55.75	50.41	49.89	52.60	9.42	9.06	9.06	8.85	9.58
尺度 7	50.22	51.30	47.18	50.49	50.41	8.16	8.63	8.51	8.46	9.38
尺度 8	38.82	45.46	40.66	41.28	46.39	7.46	8.87	7.43	7.91	9.77
尺度 9	47.12	50.08	52.93	45.74	48.88	8.98	10.87	10.18	8.69	10.24
Mean	50.28	51.99	48.98	49.32	50.67					
年齢平均	49.49	20.07	29.85	38.19	19.18					
標準偏差	8.72	1.14	6.43	7.05	1.81					
実施年	2011年	2011年	1990年	1992年	1988年					

表 28. 各尺度の粗点の平均と標準偏差による他集団比較

	平均					標準偏差				
	N社 2011年 n=1111	J大 270名 n=270	D社 1503名 n=1503	T社 2886名 n=2886	T大 2875名 n=2875	N社 2011年 n=1111	J大 270名 n=270	D社 1503名 n=1503	T社 2886名 n=2886	T大 2875名 n=2875
尺度 A	0.41	0.19	1.40	0.73	2.39	3.55	0.61	6.79	3.72	10.95
尺度 B	1.55	3.10	2.26	1.54	2.84	1.80	2.59	2.08	1.60	2.48
尺度 C	2.92	7.08	4.96	4.75	7.92	3.66	4.73	4.28	4.10	5.13
尺度 D	7.47	5.40	6.19	6.13	5.09	3.01	2.65	2.72	2.90	2.57
尺度 E	11.45	9.21	9.78	9.99	8.23	2.75	2.69	2.73	2.76	2.88
尺度 F	10.36	13.57	9.09	14.69	16.21	7.28	7.64	7.00	8.11	8.56
尺度 1	10.55	10.14	9.64	10.74	10.09	2.66	2.33	2.40	2.40	2.59
尺度 2	8.19	7.68	7.23	8.08	8.63	2.95	3.42	3.26	3.01	3.66
尺度 3	5.67	6.90	5.48	5.77	7.04	2.68	3.20	2.86	2.68	3.26
尺度 4	11.31	14.41	12.38	13.12	15.24	4.25	4.66	4.63	4.35	5.10
尺度 5	12.89	14.27	12.55	11.51	11.95	3.03	2.86	3.00	3.26	2.85
尺度 6	12.96	14.00	11.95	11.75	12.79	3.62	3.48	3.47	3.38	3.67
尺度 7	8.46	9.91	8.37	9.27	10.13	2.40	2.74	2.53	2.50	2.91
尺度 8	3.21	5.60	3.87	4.10	5.91	2.64	3.12	2.64	2.80	3.44
尺度 9	9.28	10.36	11.42	8.76	9.92	3.31	4.03	3.77	3.20	3.78

表 29. N社 2011 年および他 4 集団の各尺度の粗点平均値による分散分析・多重比較の結果

	分散分析		多重比較	
	F (4,8640) 値	有意水準	MSe	
尺度A	25.76	<.0001 ***	54.171	T大>D社・T社・N11・J大 D社>T社・N11
尺度B	181.59	<.0001 ***	4.283	J大>D社・N11・T社 T大>D社・N11・T社 D社>N11・T社
尺度C	334.65	<.0001 ***	19.979	T大>J大・D社・T社・N11 J大>D社・T社・N11 D社>N11, T社>N11
尺度D	161.00	<.0001 ***	7.678	N11>D社・T社・J大・T大 D社>J大・T大, T社>J大・T大
尺度E	311.31	<.0001 ***	7.789	N11>T社・D社・J大・T大 T社>J大・T大, D社>J大・T大, J大>T大
尺度F	257.16	<.0001 ***	63.488	T大>T社・J大・N11・D社 T社>N11・D社 J大>N11・D社, N11>D社
尺度 1	56.93	<.0001 ***	6.242	T社>J大・T大・D社 N11>T大・D社 J大>D社, T大>D社
尺度 2	46.22	<.0001 ***	10.806	T大>N11・T社・J大・D社 N11>D社, T社>D社
尺度 3	109.21	<.0001 ***	8.588	T大>T社・N11・D社 J大>T社・N11・D社 T社>D社
尺度 4	190.99	<.0001 ***	21.688	T大>J大・T社・D社・N11 J大>T社・D社・N11 T社>D社・N11, D社>N11
尺度 5	91.20	<.0001 ***	9.247	J大>N11・D社・T大・T社 N11>D社・T大・T社 D社>T大・T社, T大>T社
尺度 6	59.45	<.0001 ***	12.461	J大>N11・T大・D社・T社 N11>D社・T社, T大>D社・T社
尺度 7	149.10	<.0001 ***	6.991	T大>T社・N11・D社 J大>T社・N11・D社 T社>N11・D社
尺度 8	247.39	<.0001 ***	8.974	T大>T社・D社・N11 J大>T社・D社・N11 T社>N11, D社>N11
尺度 9	147.22	<.0001 ***	12.563	D社>J大・T大・N11・T社 J大>N11・T社 T大>N11・T社, N11>T社

*** P<.001, 多重比較は順番がうしろほど差が大きい

9が高く、非常に活発である。広告企業の特徴として理解できると思われる。

以上のように企業はわずか3事例ではあるが、各企業1111・1503・2886名と多人数であるにもかかわらず、平均値が同じにはならずそれぞれのプロフィールが異なり特徴が了解できるものとなった。従来からいわれている組織風土²⁷⁾の新たなアプローチの方法として、今後の研究課題としたい。

(7) 研究6 (18年間あるいは28年間の長期間にわたる個人のプロフィールの変化: 3事例)

すでに紹介したように、N社においては集団としての平均値でのプロフィールの変化はほとんどみられなかった。しかし、集団を構成している各人の個々の変化はどのようになっているのだろうか。あまり変化はみせないのだろうか。今後の研究のために3事例を取り上げ紹介したい。この3事例は、長期にデータが保管されていて、今後状況の面接が可能であり、営業経験の後、人事教育関連の職務に就いた共通のキャリアを有する。事例として公表することを了解している。

①S氏の1985-2013の28年間にわたる20回の標準得点の変化を表30に、プロフィールを図14に示す。

S氏では、有効性尺度のパターンは変化が少なく、また尺度C(36-40)・F(32-38)のように自己に肯定的である姿勢はあまり変わっていない。尺度B(40-48)・1(53-62)・2(52-62)・4(47-60)・8(30-41)の変化は中程度である。しかし、尺度3(28-60)・5(42-58)・6(35-56)・7(41-67)など変化が大きい。S氏のプロフィールの特徴的な2時点を挙げてみたい。

尺度3が低い時は26歳の時点である。尺度A(45)・B(43)・C(37)・D(57)・E(68)・F(36)・1(57)・2(56)・3(28)・4(47)・5(52)・6(40)・7(48)・8(36)・9(43)

となる。自信を持ち適応感も強い(尺度C・F低, D・E高)傾向だが、強気というほどではなく(尺度5中程度)、背伸びする気持ちや感情をためることは少ない(尺度3・8低)。真面目で細かいことを気にする(尺度1・2高)姿勢といえようか。

尺度7が高い時は48歳の時点である。尺度A(45)・B(43)・C(37)・D(50)・E(76)・F(33)・1(62)・2(62)・3(47)・4(52)・5(38)・6(42)・7(67)・8(32)・9(52)となる。自信は揺らいでいないが(尺度C・F低)、自分の考えや強気の気分は少なく(尺度D中程度・5・6低)、周囲に合わせて学ぶというよりは、自己流のやり方にこだわって何とかしようとする私の強さが出ているかもしれない。

②Y氏の1995-2013の18年間にわたる17回の結果による、標準得点の変化を表31に、プロフィールを図15に示す。

有効性尺度のパターンは変化を示し、尺度Dは47-73と、尺度Eは51-76と変化している。尺度B(43-52)・C(36-50)またF(35-53)は中程度である。基本尺度においても、たとえば尺度3(35-60)・4(42-62)・6(46-75)・5(55-71)・7(33-57)などの変化がみられる。尺度8は他の尺度に比べると比較的变化は少ない(32-43)といえる。特徴的な時点を挙げてみよう。

尺度7が低い時は26歳の時点である。尺度A(45)・B(43)・C(46)・D(57)・E(51)・F(48)・1(58)・2(51)・3(51)・4(42)・5(55)・6(53)・7(33)・8(41)・9(41)となっている。プロフィールの様子から尺度D・1・5・6が高い傾向なので、真面目でしっかりした姿勢であろうが、さほど自信が強いというほどではなく(尺度C・F中程度)、我を通すというよりは周囲にあわせる傾向であろうか(尺度7低)。

尺度6が高い時は37歳の時点である。尺度A(45)・B(48)・C(38)・D(73)・E(68)・

図 14. S 氏 1985-2013 年 TPI プロファイル (20 回)

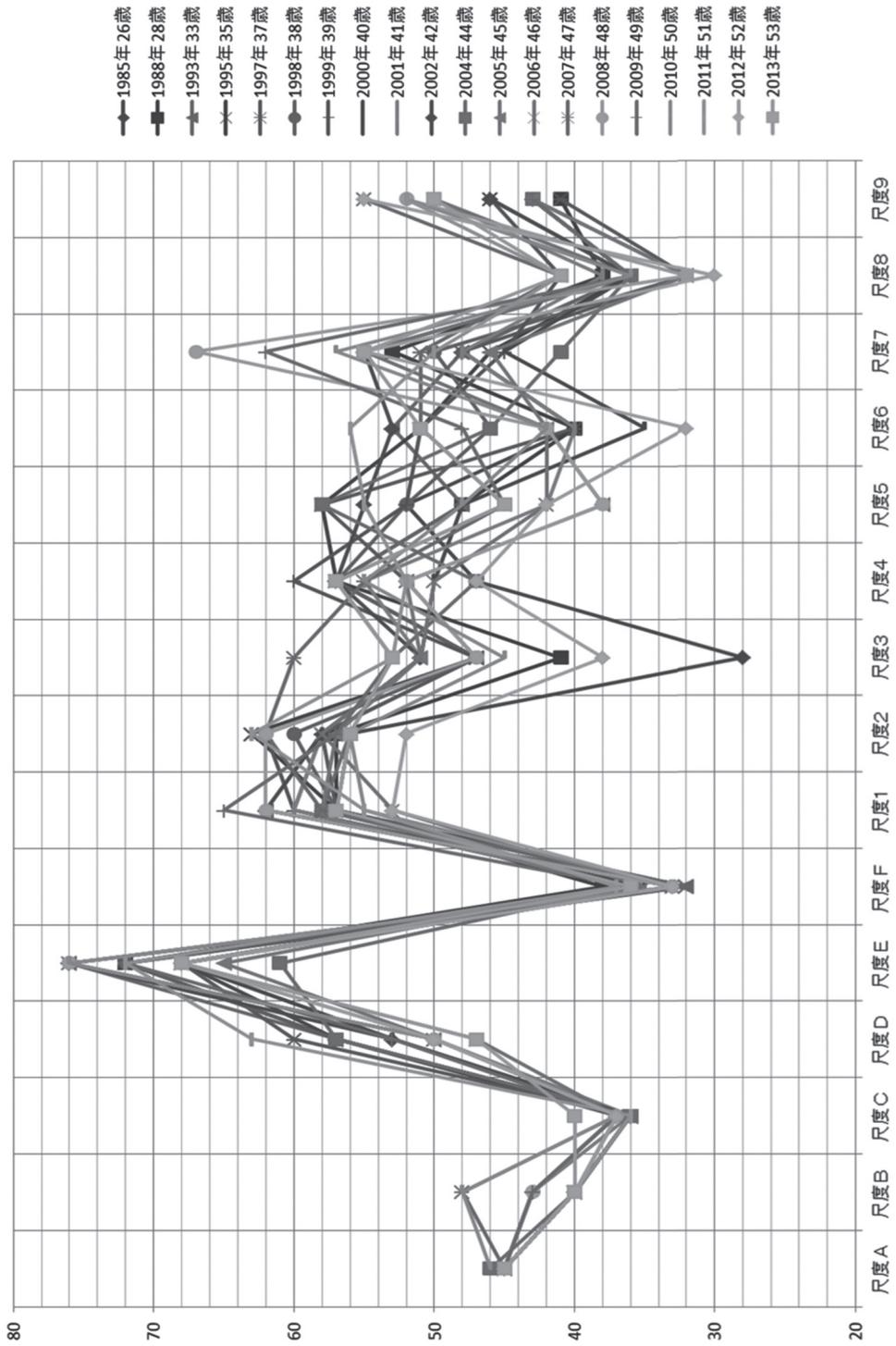


表 30. S氏の1985-2013年(28年間)にわたる20回の標準得点の変化

	1985年 26歳	1988年 28歳	1993年 33歳	1995年 35歳	1997年 37歳	1998年 38歳	1999年 39歳	2000年 40歳	2001年 41歳	2002年 42歳	2004年 44歳	2005年 45歳	2006年 46歳	2007年 47歳	2008年 48歳	2009年 49歳	2010年 50歳	2011年 51歳	2012年 52歳	2013年 53歳
尺度A	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	46	45	45	45	45	45	46	45	45	45
尺度B	43	40	40	40	40	40	43	40	43	40	40	40	40	48	43	43	48	40	40	40
尺度C	37	36	36	36	36	36	37	36	36	36	36	37	37	37	37	37	37	36	37	40
尺度D	57	57	57	57	60	57	53	53	50	53	57	50	47	50	50	53	50	63	50	47
尺度E	68	72	76	72	68	72	68	68	68	76	61	65	68	76	76	72	76	72	68	68
尺度F	36	38	32	32	33	33	36	35	36	33	36	36	35	32	33	36	33	37	33	36
尺度1	57	57	62	57	57	57	60	60	60	62	58	58	53	58	62	65	55	55	53	57
尺度2	56	57	58	63	58	60	62	58	58	58	56	57	58	62	62	57	56	63	52	56
尺度3	28	41	47	47	47	47	47	51	51	51	53	51	51	60	47	53	45	53	38	53
尺度4	47	57	57	57	52	57	60	50	55	57	47	52	50	55	52	57	55	52	47	57
尺度5	52	48	48	58	58	52	52	48	42	55	58	38	42	45	38	45	48	55	42	45
尺度6	40	40	53	51	40	46	51	35	40	53	46	42	42	51	42	48	42	56	32	51
尺度7	48	53	48	46	48	50	45	45	48	55	41	46	55	51	67	62	57	50	55	55
尺度8	36	38	36	36	32	32	41	36	38	36	36	32	36	41	32	36	36	41	30	41
尺度9	43	41	43	46	41	43	46	43	50	46	43	43	50	55	52	43	52	52	55	50
Mean	45	48	50	51	48	49	52	47	49	53	49	47	49	53	50	52	50	53	45	52

図 15. Y 氏 1995-2013 年 TPI プロファイル (17 回)

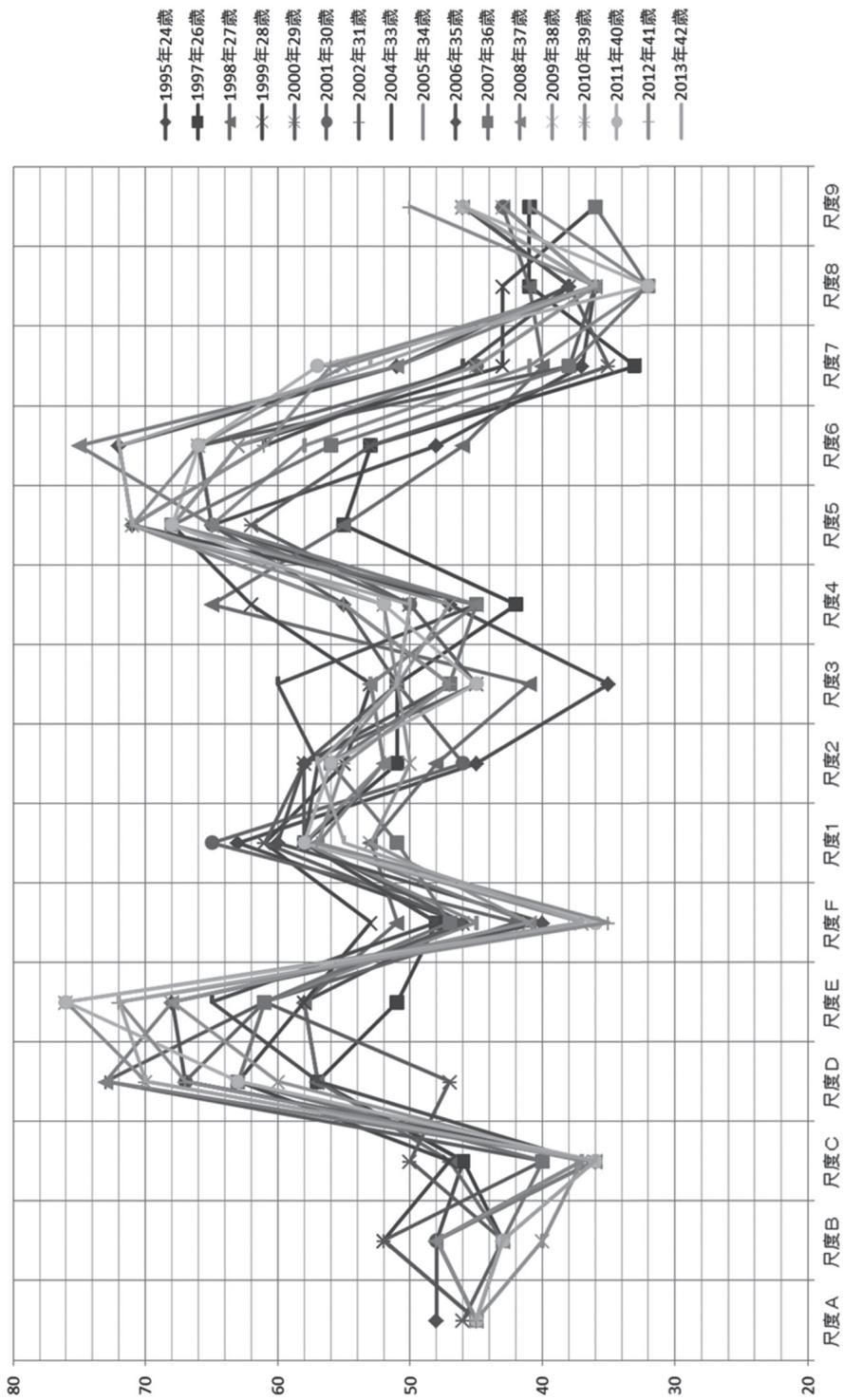


表 31. Y氏の1995-2013年(18年間)にわたる17回の標準得点の変化

	1995年 24歳	1997年 26歳	1998年 27歳	1999年 28歳	2000年 29歳	2001年 30歳	2002年 31歳	2004年 33歳	2005年 34歳	2006年 35歳	2007年 36歳	2008年 37歳	2009年 38歳	2010年 39歳	2011年 40歳	2012年 41歳	2013年 42歳
尺度A	45	45	45	45	46	45	45	45	45	48	45	45	45	45	45	45	45
尺度B	48	43	43	52	43	48	52	48	40	48	43	48	40	43	43	48	43
尺度C	46	46	47	47	50	36	40	37	37	36	40	36	37	36	36	37	36
尺度D	57	57	57	63	47	67	73	57	63	67	63	73	60	70	63	67	70
尺度E	58	51	58	58	61	61	61	65	61	68	61	68	68	76	76	72	72
尺度F	46	48	51	53	46	42	46	48	45	40	47	41	41	37	36	35	37
尺度1	63	58	53	61	61	65	58	58	58	60	51	57	53	58	58	57	55
尺度2	45	51	48	55	58	46	58	57	52	58	56	52	50	56	56	55	57
尺度3	35	51	41	53	45	51	51	60	53	47	47	53	51	51	45	47	51
尺度4	47	42	65	62	50	50	55	45	45	55	45	45	47	52	52	55	50
尺度5	65	55	55	68	62	65	65	71	65	71	68	65	68	71	68	71	71
尺度6	48	53	46	63	53	66	66	61	58	72	56	75	63	66	66	61	72
尺度7	37	33	40	43	35	45	38	46	41	51	38	51	45	55	57	56	53
尺度8	36	41	41	43	38	36	36	38	32	38	32	36	36	36	32	36	36
尺度9	43	41	43	36	46	43	46	46	41	46	36	46	43	46	46	50	46
Mean	47	47	48	54	50	52	53	54	49	55	48	53	51	55	53	54	55

図 16. F 氏 1985-2013 年 TPI プロファイル (19 回)

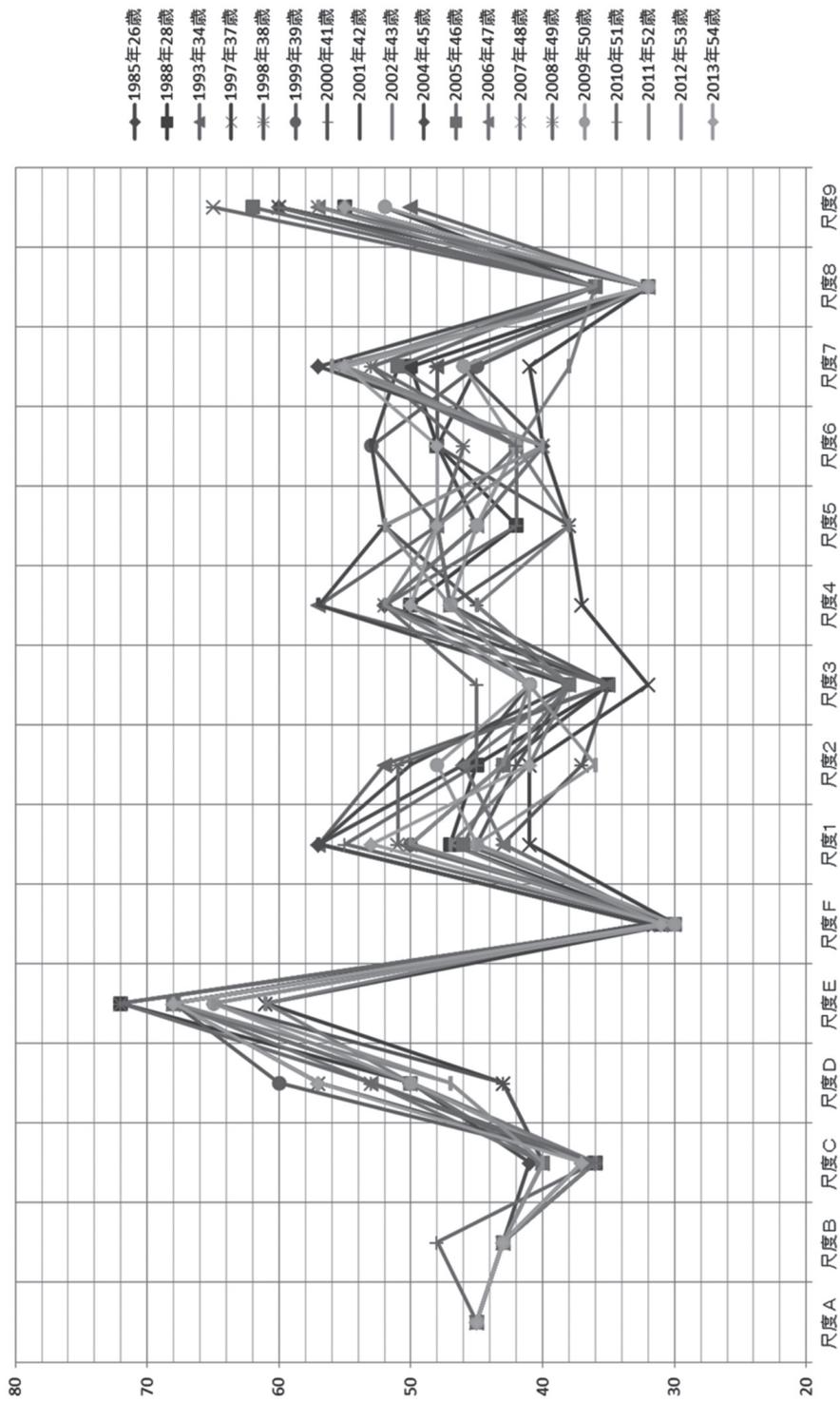


表 32. F氏の1985-2013年(28年間)にわたる19回の標準得点の変化

	1985年 26歳	1988年 29歳	1993年 34歳	1997年 37歳	1998年 38歳	1999年 39歳	2000年 41歳	2001年 42歳	2002年 43歳	2004年 45歳	2005年 46歳	2006年 47歳	2007年 48歳	2008年 49歳	2009年 50歳	2010年 51歳	2011年 52歳	2012年 53歳	2013年 54歳
尺度A	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45
尺度B	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43
尺度C	36	36	37	40	36	36	40	40	36	41	40	40	40	37	37	36	40	40	37
尺度D	57	50	50	43	57	60	43	50	50	50	50	53	50	53	50	53	47	47	57
尺度E	68	72	68	61	68	68	65	68	61	68	68	68	68	72	65	72	68	65	68
尺度F	31	31	32	30	31	31	30	32	32	32	30	31	30	30	30	31	31	31	31
尺度1	50	47	57	41	43	50	45	57	47	57	46	43	50	51	45	55	50	45	53
尺度2	43	45	52	41	37	43	42	50	41	46	43	46	43	51	48	45	43	36	41
尺度3	35	35	35	32	35	41	38	38	38	41	38	38	38	35	41	45	41	41	41
尺度4	52	50	57	37	47	47	45	57	45	52	47	47	52	50	47	52	52	47	50
尺度5	45	42	48	38	38	48	52	52	38	45	48	45	45	48	45	42	48	52	48
尺度6	48	48	48	40	48	53	40	53	42	40	42	42	40	46	42	42	40	40	48
尺度7	45	50	48	41	48	45	46	51	38	57	51	55	55	53	46	53	55	56	55
尺度8	32	32	32	32	32	32	32	36	36	36	36	32	32	36	32	36	36	32	32
尺度9	55	55	50	60	60	55	60	52	55	60	62	57	57	65	52	60	57	55	55
Mean	45	45	47	40	43	46	44	50	42	48	46	45	46	48	44	48	47	45	47

F (41)・1 (57)・2 (52)・3 (53)・4 (45)・5 (65)・6 (75)・7 (51)・8 (36)・9 (46) となっている。尺度D・E・5・6がかなり高く、自己の考えや思いの方向に対する思い入れが強く、自分のなかでイメージをめぐるせていた時期かもしれない。少しりきみもあった可能性もあるが(尺度3・7中程度)、否定的な気分を感じることは少なかったようだ(尺度C・F・8低)と考えられる。

③F氏の1985-2013の28年間にわたる19回の変化について、標準得点を表32に、プロフィールを図16に示す。

有効性尺度のパターンはあまり変わらず、尺度C (36-41)・F (30-32)・8 (32-36)は得点は低く、変化は少ない。また尺度9 (52-65)は高い傾向が続いている。自信を維持し、感情をため込まず、エネルギーを外に出すという基本的な様子が推察される。

しかしながら、尺度D (43-60)・1 (41-57)・2 (36-52)・5 (38-52)・7 (38-57)などには変化がみられる。特徴的なプロフィールの時点を挙げてみよう。

尺度3が低い時は37歳の時点である。A (45)・B (43)・C (40)・D (43)・E (61)・F (30)・1 (41)・2 (41)・3 (32)・4 (37)・5 (38)・6 (40)・7 (41)・8 (32)・9 (60)となっている。尺度E・9以外は、全体的に各尺度とも得点は低い傾向にあり、質問項目についての無回答はなかったため、このような場合はあまり自分の気持ちに関心を持たなくてもよいクールとでもいえそうな心境と思われる。エネルギーを外に出せる姿勢(尺度F低・9高)といえよう。

尺度7が高い時は45歳の時点である。A (45)・B (43)・C (41)・D (50)・E (68)・F (32)・1 (57)・2 (46)・3 (41)・4 (52)・5 (45)・6 (40)・7 (57)・8 (36)・9 (62)となっている。全体的にはプロフィールは低い傾向にあり、エネルギーは外に出せる心境である(尺度F低・9高)。自分の考えや思いに

こだわる傾向はあまり強くなく(尺度D中程度, 5・6低), 現実対処的な姿勢かと思われる。そのなかで自立的・マイペースに取り組んでいこうとする気持ちが強まっている(尺度7高)と理解できよう。

以上3事例を整理してきたが、いうまでもなく環境の変化, 仕事の変化, 心境の変化, キャリアの位置づけなどとの関連で, プロファイルの変化を理解する必要があり, 今後もインタビューをおこなうことにより, それらとの相互関連について, 研究の課題として深めたい。

3氏ともに程度の違いはあるが変化の少ない尺度と変化の大きい尺度とがあり, 集団の値としての平均値の検討とともに, 個別のケースの研究の積み重ねが人格特性の変化を検討するうえで今後も必要とされる。質問紙法でとらえられる人格特性とは人格のどのような部分をとらえているかについて, 長期にわたる追跡研究が期待される。

8. まとめと今後の課題

今まで検討してきた横断的研究および縦断的研究をおもなものとした研究1から研究7について, 概要としてつぎのようなことをまとめることができよう。

①N社においては横断的研究および縦断的研究どちらにおいても, 20代後半から60代前半にいたる各年代ごとの, TPIの各尺度の標準得点の平均値によるプロフィールのパターンはほとんど変化をみせなかった。

②10歳間隔の横断的研究においては, いくつかの尺度において年代別に粗点の平均の値の差に有意差がみいだされた。尺度B・Cは若い年代の得点が高くなった。尺度D・Eは高年代が得点が高くなった。尺度Fは若い年代が得点が高くなった。尺度3・4・7・8においては, 若い年代が得点が高くなった。尺度5は30代あるいは40代が得点が高く,

尺度6は20代の得点が高くなった。尺度1・2・9については有意な差はみられなかった。

③10歳間隔の縦断的研究においては、20代から30代での変化は少なく、その後は、各年代においてそれぞれ共通する傾向として、尺度D・Eが得点が上昇し、尺度5・6も得点が上昇する様子を示した。しかし全体的には他の尺度での顕著な差は示されなかった。

④5歳間隔の縦断的研究でさらにこまかく検討すると、つぎの3つの時期に大別できると考えられた。これらは、Levinson (1978) やSuperら (1970) の提示と似たものであった。

i) 20代前半は、まだ相対的に自信を持つことが少なく、いろいろなことを自分のなかに抱え込んでいる心境の可能性が示された。他の年代のプロフィールとは異なる傾向と解釈される(尺度C・Fの得点が高い。尺度Eが低い。尺度1・4・7・8が得点が高い傾向にあり、尺度6の得点が尺度5よりも高い)。

ii) 20代後半・30代後半から40代後半では、自分の考え・思いの方向をさぐりながら、自分のやり方で対処を試みている時期と解釈された(妥当性尺度・尺度Fにはあまり変化はみられない。尺度1・6・7に変化がみられる)。

iii) 40代後半から60代前半では、自信・安定感を持ち、自分の考えの方向が固まってきている時期と解釈された(尺度Fの得点が高い。尺度D・E・5が高い。尺度8が低い)。

⑤40代後半からの「中年期」以前の、30代から40代の「人生半ばの過渡期」については、さらに変化等の可能性について視点を広げ検討することが今後の課題となろう。

⑥年代を10歳間隔で区切るのは間隔として長いと考えられる。各年代の前半と後半でも変化が考えられ、5歳間隔で区切り検討することが望ましい。

⑦企業・集団によって、そこに属する人々の行動傾向は異なる可能性があると考えられ、集団の特徴を表わす代表値を用いる際には、

十分にその集団の傾向を考慮する必要がある。いうまでもなく多人数であったとしても、特定の企業・集団のサンプルで一般化することには慎重でありたい。

⑧青年期(大学生)と成人期(企業人・社会人)とでは、心的特性・行動傾向が異なる可能性がみだされた。学校から社会への移行期における変化についての丁寧な検討が課題であろう。また、大学生であっても大学生活の違いによって人格特性の傾向が異なる可能性が大きい。

⑨長期にわたる個別の事例にみるように、個々人によってプロフィールには変化がみられ、それも変化の大きい尺度と、変化の少ない尺度とがある。この安定性あるいは変化について丁寧に追跡研究をする必要が考えられる。本研究のように集団の平均プロフィールでは変化が少なくても、個々人のプロフィールは変化している可能性があり、変化をとらえる指標についても検討を加えなければならない大切な課題といえる。平均値あるいは相関値ではとらえきれない個々の変化を表わすような分析の視点が必要と思われ、今後の多角的な研究が期待される。

産業・組織心理学の領域における個人差の研究課題のなかでも、本研究ではとくに人格特性を検討した。組織と人格特性の相互作用や、適性の把握など、成人期の人格特性の変化、あるいは安定の程度を理解することは、基本的な知見として重要であろう。これらをどのような測度でとらえるかは大切な要件であり、本研究では心理検査として代表的なMMPIの日本での研究を検討し、TPIの標準化の過程から、その有用性を確認できたと考える。人格特性の安定の程度については、相関を用いた検討や、個別の多くの事例による分析、さらには既存の尺度にとどまらず、因子構造による視点など多角的なアプローチが考えられ、今後の課題としたい。

[注]

- 1) 本論文の一部は2013年9月7日に京都橘大学で開催された産業・組織心理学会第29回大会で発表された。
- 2) 基準関連妥当性には検査結果である予測変数 (predictor) と職務遂行の評価などの基準変数 (criterion) とを同時点で測定する併存的妥当性 (concurrent validity) と、基準変数を時期を隔てて (たとえば入社5年後など) 測定する方法である予測的妥当性 (predictive validity) とがある (たとえばGregory, 1992, pp.120-123.)。
- 3) 個人—環境適合には環境の水準によって、個人—組織適合 (person-organization fit) ・個人—職業適合 (person-vocation fit) ・個人—グループ適合 (person-group fit) ・個人—職務適合 (person-job fit) がある。
- 4) 類似の概念に、企業文化 (corporate culture) ・組織文化 (organizational culture) ・組織風土 (organizational climate) ・心理的風土 (psychological climate) がある (足立, 1982, pp.3-49.)。組織特性についての認知という測定上の課題から組織風土は組織構造か個人属性かについては議論がなされた (たとえばPayne and Pugh, 1976, pp.1159-1167.)。組織風土と個人は相互作用し、状況変数とパーソナリティ変数の結合機能 (a joint function) として知覚された風土が定義された (足立, 1982, p.25. Johnston, 1976, p.102.)。また組織風土の認知と関連の深い職務満足 (job satisfaction) との位置づけも検討され、組織風土は記述的 (descriptive) であり、職務満足は評価的 (evaluative) であるとされている (Robbins and Judge, 2014, p.275.)。
- 5) Neugartenは、成人発達の理論として Psychoanalysis and Ego Psychology, Social-Psychological Theory, Cognitive Theory, Problem for the Developmentalist の4つに分けて要約している。
- 6) 研究の流れは、Big Five理論とFive Factor Modelとは異なっているとされる。しかし5つの因子は、外向性 (Extraversion) ・情緒安定性 (Emotional stability) ・親和性 (Agreeableness) ・誠実性 (Conscientiousness) ・経験への開放性 (Openness to experience) とまとめられるのが一般的である。心理検査の基準妥当性についても、人格特性の変化についても、このモデルによるものが大変多い。しかし、因子分析による特性の整理は、パーソナリティ構造を示しているのか、単なる認知の意味構造なのかとの議論がある (若林, 2009, pp.22-28.に簡潔な紹介がある)。MMPI・TPIのような精神医学的・臨床心理学的な観点からの尺度構成による人格の理解は意義深いと思われる。
- 7) 岡林は心理学的加齢に関する諸外国の研究を27編紹介している。また、日本での縦断的研究を4編紹介しているが、いずれも老化が研究の関心となったものである (岡林, 2011, pp.59-63.)。
- 8) Scale5は、Masculinity-Femininity尺度ともされる (Graham, 1987, p.50)。
- 9) Mf尺度を改善する試みはおこなわれている。基準群として、同性愛の問題を抱えている女性が対象とされた。Mf尺度作成と同様の過程を経て、Fmと呼ばれる尺度が作成された。この尺度との間に、0.78から0.95の相関を示した。さらに交差妥当化の結果、このFm尺度は同性愛女子の識別のうえで、とくに優れているわけではないことが判明した。Mf尺

- 度との高い相関と交差妥当化の事実によって、Fm尺度は放棄された (Hathaway, 1980, pp.73-74, 阿部・小野監訳, pp83-84)。
- 10) 統合失調症と名称が変更されているが、今後とも原典記載のままとしている。
 - 11) Ma尺度の構成の基準群は、大学病院の精神病棟に入院している患者のうち、中度ないし軽度の躁病患者 24 例である (Mckinley and Hathaway, 1944, pp.159-181)。
 - 12) Scale0 (Si尺度) はThe Clinical Scales に含まれることも多い (Friedman, Webb, and Lewak, 1989, p.33.)。
 - 13) T-S-E とは、Thinking, Social activity, Emotional expressionの3つの領域のことである (Evans and McConnel, 1941, pp.111-124.)。
 - 14) row scoreは素点と表記されており粗点とはなっていない。
 - 15) これに関する報告者は東京大学にも保管されていない。
 - 16) この論文には仮Sc (分裂病) の尺度 81 項目と、その回答傾向が紹介されている。
 - 17) この論文はMMPI東大改訂版 (562 項目となっている) およびTPI各項目について、社会的望ましさ (social desirability) の観点から研究したものである。MMPI東大改訂版の質問項目とSD値、TPIの質問項目とSD値が記載されている。
 - 18) 平田久雄から 1990 年 5 月 25 日の筆者あてへの情報提供による。この数値はいままでどこにも記載されたことはないと思われる。
 - 19) アメリカの研究者 Clark (1985, pp.95-98) によれば、世界で一番早く MMPI が翻訳されたのは日本である。1950 年代後半から 1960 年代前半にかけて研究が盛んとなった。Butcherから聞いたこととして、Hidanoによると日本では 15 の翻訳があるが、そのうち 9 つが研究もしくは出版される形になっているとのことであった。しかし、その後 10 年間は新しい翻訳は出なかった。1970 年代の終わりごろ、Abeら 5 名の MMPI 日本標準版の著者たちが再検討をおこなった。3 バージョンが、臨床あるいは研究として続いており、4 バージョン目が TPI と名づけられた形式である、と位置づけている。残念なことに、この論文では、Tokyo Personality Inventory と表記されている。Clark は、日米のサンプルを対象に、MMPI の日本での統一版を作成しようと試みている。5 つの翻訳を統一して、研究成果の共有をはかろうとした。成果は Minnesota 大学に、学位論文として提出された。
 - 20) TPI 研究会の代表は、肥田野直 (東京大学名誉教授)、平田久雄 (東京大学名誉教授)、古澤頼雄 (元神戸大学教授) が携わってきたが、現在では再び肥田野直が代表となっている。
 - 21) N社とは日本化薬株式会社である。売上高、約 1500 億円規模の中堅化学メーカーである。資本金は約 150 億円、最近の経常利益は約 200 億円である。会社設立は、大正 5 年で、平成 28 年には創立 100 周年となる。設立以来赤字決算となったことはない。主要な事業は、機能化学品事業、医薬事業、セイフティシステム事業、アグロ事業他である。平成 25 年 9 月末の従業員数は連結で 4771 名、単独で 1852 名である。1963 年のデミング賞の際に創られた社是は、現在は「最良の製品を不断の進歩と良心の結合により社会に提供し続けること」となっている。企業の人間的側面を重視する文化がある。

- 22) 松平定康。1918年生まれ。東京帝国大学文学部心理学科卒。海軍航空隊適性検査部に勤務。戦後、旧日本国有鉄道労働科学研究所を経て、(株)松平研究所を主宰する。三菱信託銀行、三井信託銀行のカウンセラーを勤めるとともに、多くの企業の人事・教育・組織開発のコンサルタント、グループカウンセリング、感受性訓練、交流分析ワークショップのファシリテーターとして、大手企業の指導にあたった。なお、肥田野直は心理学研究室の2年後輩にあたり、戦時中は海軍技術研究所に勤務していた。同じ海軍であるので親交があった。
- 23) Butcher and Tellegen (1978, p.621)において、正常範囲 (normal-range) にあるパーソナリティの査定にMMPIを用いることには疑問を呈している。MMPIの臨床尺度は精神病理 (psychopathology) の測度であり、一般的なパーソナリティ (general personality) ではないとしている。しかし、たとえばGraham (1987) にみられるように、一般的なパーソナリティの解釈と思われる説明も多い。
- 24) TPIのコンピュータシステム版 (松平定康の解説法による) は、日本化薬 (株) の関連会社である、日本人材開発医科学研究所、および松平研究所で紹介している。この松平定康の解説法を活用したTPIの利用については、TPI研究会の心理検査に関する倫理の考え方もあり、TPI研究会了承のもと、活用についての考え方と倫理を大切にするための委員会を構成している。したがって、この解釈法による実践と応用については、必ずこの委員会の承諾を得る必要がある。
- 25) 心理検査を用いて、自己理解を促す立場は、特性・因子論 (trait-factor theory) と位置づけられる (国分, 1980, p.138.)。
- 26) 富士ゼロックス総合教育研究所のActive Management Programで用いられていた『持味目録』の一部から「高い場合」「低い場合」の説明は引用している。この研修ProgramではTPIコンピュータシステム版が活用されていた。開発責任者の沢田功夫より依頼を受け、河本と外島が討議により作成し、提供したものである。TPIを参考にして、職場での行動を理解するために、日本化薬 (株) 人事部では、各尺度について行動傾向を整理して『Business Behavior Card』(1984) を作成していた。『持味目録』はこれに基づいて作成された。
- 他に、TPIを人材開発に活用している専門機関として、株式会社日本能率協会マネジメントセンターがある。企業でのキャリア開発・リーダーシップ・管理者研修などに紹介している。
- 27) 個人のパーソナリティと企業文化を結びつける論考がある (Kono and Clegg, 1998, p.101, 吉村・北居・出口・松岡訳, 1999, p.85)。個人のパーソナリティと態度は情報・経験・賞罰を通して形成され、これらは経営の3要素と対応すると考えられている。情報は経営理念に、経験は製品市場戦略に、賞罰は人事制度となる。これらの影響を受けたところの複数のメンバーに共通してみられるパーソナリティや態度の総計として企業文化をみていこうとするものである。この考えに従えば「企業文化」とは「会社のパーソナリティ」と概念化されることとなる。
- 企業文化の変容と組織開発、そのなかでの個人のキャリア発達 (キャリア・アンカーという視点となるが) を考えるには金井の論考が参考となろう (Schein, 1999. 金井監訳, 2004, pp.203-230.)。Scheinは文

化の構造を、文物(人工物)：目に見える組織構造および手順(解読が困難)、標榜されている価値観：戦略・目標・哲学(標榜される正当な理由)、背後に潜む基本的仮説：無意識の当たり前の信念・認識・思考および感情(価値観および行動の源泉)としている(Schein, 1999. 金井監訳, 2004, p.18.)。

なお、精神分析的経営組織論・精神分析的組織行動論の立場から、組織文化を経営陣の神経症的な性格特性(neurotic style)の反映として解釈して分類したモデルがある(Ket de Vries and Miller, 1984. 渡辺・尾川・梶原監訳, 1995, pp.13-42.)。

ここでは、妄想症組織(paranoid)・強迫神経症組織(compulsive)・躁病組織(dramatic)・うつ病組織(depressive)・分裂病質組織(schzoid)と5つに分類して、それぞれの組織の機能不全の特徴と、あるいは組織の潜在的な強みと弱みについて考察がなされている。神話・共同幻想・転移・逆転移・投影同一視・防衛機制などの概念を用いて、組織の力動を解釈して組織開発をすすめようとするものである。

〔参考文献〕

- 足立明久(1982)『心理的風土とパーソナリティ』勁草書房, pp.3-49。
- 阿部満州(1959)「MMPIを通して観た日米人パーソナリティの比較」北村晴朗編集委員会代表編『大脇義一教授在職35年記念心理学論文集』大脇教授在職35年記念祝賀会, pp.60-73。
- 井出正吾(2011)「MMPIの概要」日本臨床MMPI研究会監修『わかりやすいMMPI活用ハンドブック』金剛出版, pp.13-24。
- 岩脇三良(1975)「倫理性に関する省察」岡堂哲雄責任編集『心理検査学 心理アセスメントの基本』垣内出版, pp.57-68。
- 白井博(2013)「成人期」二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康・藤田主一・小塩真司・渡邊芳之編『パーソナリティ心理学ハンドブック』福村出版, pp.253-266。
- 岡林秀樹(2011)「縦断的発達研究」子安増生・白井利明責任編集 日本発達心理学会編『発達科学ハンドブック：3 時間と人間』新曜社, pp.49-66。
- 小口徹編著(2001)『国際的質問紙法心理テスト MMPI-2 と MMPI-A の研究』小口徹私家版。
- 株式会社人材開発情報センター(1988)『Active Management Program 持味目録』FUJI XEROX。
- 河本廣之(1992)「TPI-GADについて」松平定康監修『能力開発と心理テスト』人材開発情報センター, pp.39-50。
- 国分康孝(1980)『カウンセリングの理論』誠信書房, pp.138-175。
- 児玉省・多賀景子(1958)「日本女子大版MMPI」『日本女子大学紀要 文学部』第8号, pp.28-49。
- 坂爪洋美(2008)『キャリア・オリエンテーション 個人の働き方に影響を与える要因』白桃書房, pp.46-56。
- 塩谷亭(1997)「尺度得点に及ぼす年齢要因」MMPI新日本版研究会編『MMPI新日本版の標準化研究』三京房, pp.130-162。

- 鈴木達也 (1962) 「MMPI短縮版作成の試み」『金沢大学法文学部論集 哲学篇』第9巻, pp.30-50。
- 多田治夫 (1960) 「MMPI邦語版の作成と大学生群の結果」『金澤大学法文学部論集 哲学史学篇』第7巻, pp.137-172。
- 田中富士夫 (1964) 「MMPI邦語版標準化の試み(中間報告)—MMPI金大版の改訂とその資料—」『金沢大学法文学部論集 哲学篇』第12巻, pp.71-97。
- 田中富士夫 (1997) 「MMPI新日本版の構想と標準化」MMPI新日本版研究会編『MMPI新日本版の標準化研究』三京房, pp.1-22。
- 坪上宏・平田久雄 (1959) 「MMPIについて」井村恒郎・猪瀬正・懸田克躬・笠松章・西丸四方・台弘編『精神医学臨床検査法』医歯薬出版, pp.217-241。
- 坪上宏・肥田野直・平田久雄・長塚和弥・古澤頼雄・堀久 (1964) 「東大版総合性格検査(TPI)の作成—その4プロフィルの考察—」『日本心理学会大会発表論文集』, p.361。
- TPI研究会(発行年不詳)『TPI実施手引』東京大学出版会。
- テスト学会編(2007)『テスト・スタンダード 日本のテストの将来に向けて』金子書房。
- 東京大学学生部(1957)『MMPI予備検査中間報告(1)』
- 東京大学学生部(1962)『MMPI東大改訂版—研究報告と実施手引』
- 長塚和弥・肥田野直・平田久雄・坪上宏・古澤頼雄・堀久(1964)「東大版総合性格検査(TPI)の作成—その3有効性尺度の研究—」『日本心理学会大会発表論文集』, p.360。
- 日本MMPI研究会編(1969)『日本版MMPIハンドブック』三京房。
- 日本MMPI研究会編(1989)『日本版MMPIハンドブック増補版』三京房。
- 日本化薬株式会社人事部(1984)『TPI-GAD・PAC BUSINESS BEHAVIOR CARD』
- 日本職業指導協会主催職業指導研究セミナー報告書(1969)『職業適合性の研究』, p.150。
- 二村英幸(2005)『人事アセスメント論 個と組織を生かす心理学の知恵』ミネルヴァ書房, pp.43-72。
- 野中郁次郎(1978)「序章」野中郁次郎・加護野忠男・小松陽一・奥村昭博・坂下昭宣『組織現象の理論と測定』千倉書房, pp.13-18。
- 肥田野直(1958)「MMPI標準化のための研究」『試験研究』第25巻, pp.45-57。
- 肥田野直(1967a)「TPIテストの内容と実施について」『学校保健研究』第9巻, 第1号, pp.2-7。
- 肥田野直(1967b)「ミネソタ多面人格目録」井村恒郎監修『臨床心理検査法(第2版)』医学書院, pp.34-65。
- 肥田野直(1978)「人格目録の社会的望ましさの評定」『東京大学教育学部紀要』第18巻, pp.49-82。
- 肥田野直・平田久雄(1963)「MMPI(改訂版)の研究」菅原馨・肥田野直・藤田忠・寺井俊健・松浦健児共編『人事試験総論』白桃書房, pp.473-490。
- 肥田野直・平田久雄・長塚和弥・坪上宏・古澤頼雄・堀久(1964)「東大版総合性格検査(TPI)の作成—その1概要—」『日本心理学会大会発表論文集』, p.358。
- 平田久雄(1995)「東大総合性格検査(TPI: Today Personality Inventory)」松原達哉編著『最新心理テスト法入門』日本文化科学社, pp.104-105。

- 平田久雄・肥田野直・長塚和弥・坪上宏・古澤頼雄・堀久 (1964) 「東大版総合性格検査 (TPI) の作成—その2 基本尺度の研究—」『日本心理学会大会発表論文集』, p.359。
- 古澤頼雄・肥田野直・平田久雄・長塚和弥・坪上宏・堀久 (1964) 「東大版総合性格検査 (TPI) の作成—その5 適用例とその考察—」『日本心理学会大会発表論文集』, p.362。
- 松平研究所・日本人材開発医科学研究所 (2008) 『影響力分析 TPI-GAD』
- 松平定康 (1992) 「TPI-GAD・PAC・CONの概要」松平定康監修『能力開発と心理テスト』人材開発情報センター, pp.13-28。
- 村上宣寛・村上千恵子 (2009) 『MMPI-1/MINI/MINI-124 ハンドブック 自動診断システムへの招待』学芸図書。
- 若林明雄(1993)「パーソナリティ研究における 人間—状況論争の動向」『心理学研究』第64巻, 第4号, pp.296-312。
- 若林明雄 (2009) 『パーソナリティとは何か その概念と理論』培風館, pp.22-28。
- Allemand, M., Steiger, A. E. and Hill, P. L. (2013) “Stability of personality traits in adulthood,” *The Journal of Gerontopsychology and Geriatric Psychiatry*, Vol.26, pp.5-13.
- American Psychological Association (1977) *Ethical standards of psychologists and casebook on ethical standards of psychologists*. (佐藤椅男・栗栖瑛子訳, 1982, アメリカ心理学会編『心理学者のための倫理基準・事例集』誠信書房, pp.83-96。)
- Archer, R. P. (1987) *Using The MMPI Adolescents*, New Jersey:Lawrence Erlbaum Associates.
- Block, J. (1971) *Lives through time*, California:Bancroft Books.
- Butcher, J. N. and Tellegen, A. (1978) “Common methodological problems in MMPI research”, *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, Vol.46,pp.620-628.
- Butcher, J. N. (1990) *The MMPI-2 in Psychological Treatment*, New York:Oxford University Press.
- Butcher, J. N., Dahlstrom, W. G., Graham, J. R., Tellegen, A. and Kaemmer, B. (1989) *MMPI-2: Manual for Administration and Scoring*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Caspi, A., Roberts, B. W., and Shiner, R. L. (2005) “Personality development: Stability and change,” *Annual Review of Psychology*, Vol.56,pp.453-484.
- Clark, L. A. (1985) “A consolidated version of the MMPI in japan”, In Butcher, J. N. and Spielberger, C. D. (eds.) *Advance in personality assessment, Volume 4*, pp.95-130, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Costa, P. T. Jr. and McCrae, R. R. (1980) “Still stable after all these years: Personality as a key to some issues in Adulthood and Old Age”, In P. B. Baltes and O. G. Brim (eds.) *Life-span development and behavior, Vol.3*, Academic Press, pp.65-102.
- Costa, P. T. Jr. and McCrae, R. R. (1994) “Set like plaster? Evidence for the stability of adult Personality”, In T. F. Heatherton and G. J. L. Weinberger (eds.) *Can Personality Change?*, Washington, D. C.:American Psychological Association, pp.21-40.
- Costa, P. T. Jr., and McCrae, R. R. (1978) “Objective personality assessment”, In M. Storandt, I. C. Siegler and M. F. Elias (eds.) *The clinical psychology of aging*, Plenum, pp.119-143.

- Costa, P. T. Jr., McCrae, R. R., Zonderman, A. B., Barbano, H. E., Lebowitz, B. and Larson, D. M. (1986) "Cross-Sectional Studies of Personality in a National Sample: 2. Stability in Neuroticism, Extraversion, and Openness", *Psychology and Aging*, Vol.1, No.2, pp.144-149.
- Dahlstrom, W. G. & Welsh, G. S. (1960) *An MMPI Handbook. A Guide to Use in Clinical Practice and Research*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Eichorn, D. H., Clausen, J. A., Haan, N., Honzik, M. P. and Mussen, P. H. (1981) *Present and Past in Middle Life*, New York:Academic Press.
- Erikson, E. H. (1950) *Childhood and society*, New York:Norton. (仁科弥生訳, 1977, 『幼児期と社会 I, II』みすず書房。)
- Erikson, E. H. (1959) *Identity and the life cycle. Psychological issues*, New York: International Universities Press. (小此木啓吾訳編, 1982, 『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル』誠信書房。)
- Evans, C. and McConel, T. R. (1941) "A new measure of introversion-extroversion", *Journal of Psychology*, Vol.12, pp.111-124.
- Friedman, A. F., Webb, J. T., and Lewak, R. (1989) *Psychological assesment with the MMPI*, New York:Lawrence Erlbaum Associates.
- Furnham, A. (1992) *Personality at work: The role of individual differences in the workplace*, London:Routledge.
- Graham, J. R. (1987) *The MMPI A Practical Guide · Second Edition*, New York: Oxford Univerity Press.
- Gregory, R. J. (1992) *Psychological Testing: History,Principles,and Applications*, Needham Heights: Allyn and Bacon.
- Hathaway, S. R. and Mckinley, J. C. (1940) "A multiphasic personality schedule. (Minnesota): I. Construction of the schedule", *Journal of Psychology*, Vol.10, pp.249-254.
- Hathaway, S. R. and Mckinley, J. C. (1943) *The Minnesota Multiphasic Personality Schedule*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Hathaway, S. R. and McKinley, J. C. (1951) *The Minnesota Multiphasic Personality Inventory Manual (Revised)*, New York:Psychological Corporation.
- Hathaway, S. R. (1980) "Scales 5 (Masculinity-Femininity), 6 (Paranoia), and 8 (Schizophrenia)", In W. G. Dahlstrom and L.Dahlstrom(eds.) *Basic readings on the MMPI A New Selection on Personality Measurement*, Minneapolis: University of Minnesota Press, pp.65-75 (阿部満州・小野直広監訳, 1984, 『MMPI原論』新曜社, pp.73-85。)
- John, O. P., Naumann, L. P. and Soto, C. J. (2008) "Paradime shift to the integrative Big Five trait to taxonomy: History, Measurement, and Conceptual Issues", In O.P.John,R. W. Robin, and L. A. Pervin(eds.) *Handbook of Personality Theory and research (3rd ed.)*, New York: Guilford, pp.114-158.
- Jonston, H. R. (1976) "A new conceptualization of source of organizational climate", *Administrative Science Quarterly*, Vol.21, pp.95-103.

- Kaplan, R. M. and Saccuzzo, D. P. (2005) *Psychological Testing (Sixth Edition)*, Belmont, C. A.: Wadsworth, p.510.
- Kets de Vries, M. F. R. and Miller, D. (1984) *The Neurotic Organization*, San Francisco: Jossey-Bass. (渡辺直登・尾川丈一・梶原誠監訳, 1995, 『神経症組織 病める企業の診断と再生』 亀田ブックサービス, pp.13-42。)
- Kristof, A. (1996) “Person-organization fit: An integrative review of its conceptualization, measurement, and implication”, *Personnel Psychology*, Vol.49, pp.1-49.
- Leon, G. R., Gillum, B., Gillum, R. and Gouze, M. (1979) “Personality Stability and Change Over a 30-Year Period – Middle age to Old Age”, *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, Vol.47, No.3, pp.517-524.
- Levinson, D. J. (1978) *The seasons of a man's life*, New York: Knopf. (南博訳, 1980, 『人生の四季—中年をいかに生きるか』 講談社。南博訳, 1992, 『ライフサイクルの心理学上, 下』 講談社。)
- Lorsch, J. W. and Morse, J. J. (1974) *Organization and Their Members: A Contingency Approach*, New York: Harper and Row. (馬場昌雄・服部正中・上村祐一訳, 1977, 『組織・環境・個人—コンティンジェンシーアプローチ』 東京教学社。)
- Maas, H. S. and Kuypers, J. A. (1974) *From Thirty to Seventy. A Forty-Year Longitudinal Study of Adult life Styles and Personality*, San Francisco: Jossey-Bass.
- McCrae, R. R. and Costa, P. T. Jr. (2008) “The Five Factor theory of personality”, In O. P. John, R. W. Robin, and L. A. Pervin(eds.) *Handbook of Personality Theory and research (3rd ed.)*, New York: Guilford, pp.159-181.
- McKinley, J. C. and Hathaway, S. R. (1944) “The MMPI: V Hysteria, Hypomania, and Psychopathic Deviate”, *Journal of Applied Psychology*, Vol.28, pp.153-174.
- Muchinsky, P. M. (2003) *Psychology applied to work (Seventh Edition)*, Belmont, CA: Wadsworth, pp.4-5.
- Murphy, K. R. (1996) “Individual Differences and Behavior in Organizations, Much More Than g”, Murpy, K. R.(ed.) *Individual Differences and Behavior in Organizations*, San Francisco: Jossey-Bass, pp.3-30.
- Neugarten, B. L. (1977) “Personality and aging”, In J. E. Birren and K. W. Schaie(eds.) *Handbook of the psychology of aging*, New York:Van Nostrand-Reinhold, pp.626-649.
- Neugarten, B. L. (ed.) (1968) *Personality in Middle and Late Life*, New York: Prentice-Hall.
- Payne, R. L. and Pugh, D. S. (1976) “Organizational structure and climate”, In M. D. Dunnette(ed.) *Handbook of Industrial and Organizational Psychology*, Chicago: Rand McNally, pp.1159-1167.
- Roberts, B. W. and DelVecchio, W. F. (2000) “The rank-order consistency of personality traits from childhood to old age:Aquantitative review of longitudinal studies”, *Psychological Bulletin*, Vol,126, pp.3-25.
- Roberts, B. W. and Takahashi, Y. (2011) “Personality Trait Development in Adulthood: Patterns and Implications”, 『パーソナリティ研究』 第20巻, 第1号, pp.1-10.

- Santrock, J. W. (1985) *Adult Development and Aging*, Wm. C. Brown Publishers. (今泉信人・南博文編訳, 1992, 『成人発達とエイジング』北大路書房, pp.379-380。)
- Schein, E. D. (1999) *The Corporate Culture Survival Guide*, San Francisco: Jossey-Bass. (金井壽宏監訳, 2004, 『企業文化—生き残りの指針』白桃書房, pp.201-230。)
- Schmidt, F. L. and Hunter, J. E. (1998) “The validity and utility of selection methods in personnel psychology: practical and theoretical implications of 85 years of search findings”, *Psychological Bulletin*, Vol.124, pp.262-274.
- Schneider, B. (1987) “The people make the place”, *Personnel Psychology*, Vol.40, pp.437-453.
- Specht, J., Egloff, B. and Schmukle, S. C. (2011) “Stability and change of personality across life course: The impact of age and major life events on mean-level and rank-order stability of the big five”, *Journal of personality and Social Psychology*, Vol.101, pp.862-882.
- Super, D. E. and Bohn, M. J. Jr. (1970) *Occupational Psychology*, Belmont, California: Wadsworth. (藤本喜八・大沢武志訳, 1973, 『企業の行動科学6 職業の心理』ダイヤモンド社, pp.208-218。)
- Tellegen, A. (1988) “Derivation of uniform T scores for the restandardized MMPI-2”, In R. D. Fowler(chair) *Revision and restandardization of the MMPI-2: Rationale, normative sample, new norms, and initial validation*, Symposium conducted at the American Psychological Association, Atlanta, Georgia.
- Terman, L. M. and Miles, C. C. (1936) *Sex and Personality*, New York: McGraw-Hill.
- Terracciano, A., McCrae, R., Brant, L. J. and Costa, P. T. Jr. (2005) “Hierarchical linear modeling analyses of the NEO-PI-R scales in Baltimore longitudinal study of aging”, *Psychology of Aging*, Vol.20, pp.493-506.

(Abstract)

The purpose of this study is to examine personality changes occurring during adulthood on a long term basis from the viewpoint of trait theory of personality. The participants were 1111 male employees of N Corporation. Today Personality Inventory (TPI) was applied as a scale for personality measurement of participants. The analytical data was collected in the years 2001, 2006, 2010 and 2011. Studies of MMPI in Japan and the process of standardization of TPI were reviewed first to show the interpretation of each scale from the perspective of competency development. First, cross-sectional studies were carried out in 2001 and 2011 to identify the differences among generations. Mean scores (of T-scores and raw scores at each scale of TPI) were compared among the age groups with ten years distance respectively. Profiles obtained from the mean value based on the T-scores showed close similarity among the age groups. This type of comparison is considered mean-level stability analytical method. Furthermore, as a result of an analysis of variance and multiple comparisons based on the raw scores of each scale, no significant differences were shown in scale 1, 2 and 9, while significant differences were found in other scales. Comparisons of mean values of T-scores and raw scores were made successively to determine the longitudinal changes

from 2001 to 2011 among the 4 age groups with 10 years distance and 7 groups with 5 years distance respectively. Similar profiles were obtained in all the age groups except the group of early 20s. As a result of an analysis of variance and multiple comparison based on the raw scores among the age groups, it was observed due to the inclination of score changes of scale C, D, F, 5, 7 and so forth that characteristic changes can be noticed broadly during the three phases of the ages 19-24, 25-44 and 45-65. For the purpose of identifying the characteristics of the employees of N Corporation, profiles by mean T-scores of employees of two other corporations and students of two universities were compared. Each group showed its distinctions to be described. Furthermore, cases of three employees of N Corporation were presented on the changes occurred in the individuals for a long period of 18 or 28 years. Some scales showed significant changes, while some scales showed negligible changes, depending on each individual.

The following is the summary of the result of the studies briefed above. When mean-level is applied as index, the forms of profiles are almost the same with no change in any age group. However, it will remain an issue if a conclusion is made that no change occurs from 20s to 60s. From the analysis of the inclination of changes at each scale in age groups with 5 years distance, it was inferred that changes can be recognized more or less during three phases in adulthood. Furthermore, by observing the three cases of the individuals on a long term basis, changes can be noticed in scales. The changes vary from individual to individual. Hence, follow-up of individual changes will be necessary. In conclusion, the study of personality changes during the adulthood requires more multilateral perspectives and the importance of further study was raised and emphasized.

〔謝辞〕

本研究をすすめるにあたり、日本化薬株式会社、株式会社日本人材開発医科学研究所、株式会社松平研究所のご協力を得ました。感謝いたします。また、TPI研究会代表、東京大学名誉教授肥田野直先生にご一読いただきました。誠にありがとうございました。

